# Wahrsager（ヴァールザーガー）「占い師　風間祐士」

立花祐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗａｈｒｓａｇｅｒ（ヴァールザーガー）「占い師　風間祐士」

【Ｎコード】
Ｎ６５２３Ｔ

【作者名】
立花祐子

【あらすじ】
「悪魔祓い」の修業を終えた風間祐士は「タロット占い師」をしながら、悪魔に殺された師「礼徳」の仇を討つ機会を窺っていた。思わぬことから、天使と悪魔を仲間にすることができた風間は、その仲間たちに助けられながら「悪魔祓い師（エクソシスト）」として成長していく…。
※他サイトにも投稿しております。
※「悪魔祓い」のシーンがある話には、タイトルに（戦）と入れてありますので、占いにご興味のない方はそこだけをお読みください。

## 悪魔を占う

駆け出しタロット占い師の風間　祐士(ゆうじ)は、スプレッド（＝定位置に並べること）したタロットカードを前にして、向かいに座っているサラリーマンの男性に言った。

「…こりゃ、彼女との関係は危ういですね…」
「えっ…どんな風に？」
「あなたに大きく環境が変わるようなことが近いうちにあります。」
「例えば？」
「転勤とか…」
「転勤！？」

男性が声を上げた。風間は慌てて言い直した。

「いえ、例えばです。昇格とかもあり得…」
「転勤いいですね！」
「は？」
「彼女と別れる理由ができる！」
「……」
「ありがとうございます！」

男性が立ち上がりながら言った。
風間は「いえ…」と言うと、男性は占い料を余分に払って、嬉しそうに帰って行った。

「別れたかったのかよ」

風間は苦笑して、呟いた。

……

風間は最近タロット占い師を始めたところだ。完全な独学で正直カードの読み方も危うい。それでも病んでいる人は多いらしく、ビルの1室で占いの営業を始めたとたん、お客（？）が結構入った。
風間は新聞広告に「新人で当たるかどうかはわかりません」と正直に書き、占い料は５００円（通常の半額くらい）にした。それが逆に宣伝文句のようになったのかもしれない。
冷やかしも多いが、６人中４人は「当たってる！」と喜んでもらえるので、確率はいい方なようだ。

風間はもちろん、この占いで生計を立てるつもりはない。実は、本業は「悪魔祓い」（＝エクソシスト）なのである。
だが、それを言うと何故か怖がられるので表には出していなかった。
（いいことをしてるのに…）
タロット占い師を始めたのは、病んでいる人を呼び寄せるため…つまり、悪魔がついている人を効率よく探すためである。
以前はよく、人ごみの中を歩き回ったりもしたのだが、案外悪魔がついている人というのはいないものである。
疲れるだけなので、何か効率よく探し出すにはどうすればいいか考えた挙句、タロット占い師という選択になった。
風間自身は、先を見る才能はない。正直、タロット占い師には向いていないと言えるが、他に思いつかなかった。（風水とか占星術師とかいろいろあるにもかかわらず…である。）
しかし６人中４人の的中率なら、タロットカードとは相性がいいように感じていた。

……

風間は、ビルの一室でタロットカードの本を読んでいた。
もう夕方になるが、朝に1人来ただけで、その後は全く来ていない。

「あー…もう今日は閉めようかなー！」

風間がそう言って両手を上げた時、突然ノックの音もなくドアが開いた。
風間は驚いて手を下ろした。
入ってきたのは、顔に何かペインティングをしたような男だった。
目は紅く、両頬に長短2本ずつ傷がある。

「！！」

風間は一瞬わからなかった。わからないままの方が良かったかもしれない…と次の瞬間思った。

（…こいつ…本物の悪魔だ！…それも、かなりの力を持ってる…）

風間はごくりと唾を飲み込んでから、愛想笑いを浮かべて気付かないふりをした。

「いらっしゃいませ。どうぞ、お座り下さい。」

その悪魔はこくりとうなずくと、言われるまま椅子に座った。

「あ、あの…今日は…どのような…」
「俺のこの先を占って欲しい。」
「…この先…ですか…。近い未来なら占えますが…」
「それでいい。」

悪魔はそう言うと、上着のポケットに手を突っ込んで、５００円玉を取り出し机に置いた。

「！！」

「これでいいのか？」

「えっ！…ええ、いいですよ。でも後でも構いませんが。」

「今、払っておく。」

「あ、ありがとうございます。」

風間はその５００円玉に手を乗せ、机にすべらせて自分の傍に置いた。

その時、胸のポケットで何かが動いたのを感じた。

「！？」

風間はふと胸のポケットに指を入れ、中の物を取り出した。

「…あれ？どうしてこんなところにカードが…」

風間はそう呟いて、思わず取り出した物を机の中央に置いた。

老人がランプを持っている絵柄のカード「隠者」だった。風間から見て正位置（アップライト）にある。

悪魔はじっとそのカードを見て言った。

「これがどうした？」

「あ…いえ…。…どうもあなたは、慈悲深い人のようですね。」

風間はそのカードを思わず読んで言った。悪魔に慈悲深い人などい

るわけはないのだが、つい口に出た。
悪魔も目を見開いて「隠者」のカードを見つめている。

「それもデリケートなところもおありだ。ただ、やるべきことはきっちりやらなくちゃ気が済まない…そんな性格のようです。」
「…俺には…わからん。」

悪魔はそう呟くように言った。少し顔が紅潮しているように感じた。照れているのかもしれない…と風間は思った。

「すいませんでした。じゃ、占いを始めましょう。」

風間は急に気が楽になり、隠者のカードを混ぜた大アルカナの２２枚だけをカット（カードの束を３つに分けて、またまとめる作業）した。
タロットカードは、絵札の大アルカナ２２枚と、数札と絵札が合わさっている小アルカナ５６枚、合計７８枚で占うものだが、近況を占うだけなら、大アルカナだけで十分と風間は思った。
そして、カットしたカードを机の中央に広げた。

「どうぞ、ご自身で混ぜて下さい。左手でカードの上に手を乗せて…こう…左回りに回すようにして…」

悪魔はうなずくと、風間の手の動きを見ながらカードに手を乗せ、左手でカードを混ぜた。風間が微笑みながら言った。

「気持ちを込めて下さいね。いいことがありますようにって。」
「…ん…」

風間は、この悪魔が素直に自分に従っていることに嬉しさを感じた。

正直、風間にとって悪魔は敵だ。ずっと悪魔を憎んで生きてきた。それは子ども時代の経験からなのだが…その話は後に譲るとしよう。だが、今目の前にいる悪魔は敵だということを感じさせなかった。しかし、かなり地位の高い悪魔だということはわかる。

「…これでいい。」

悪魔が、カードから手を離して言った。

「そうですか。では3枚だけで占いますので、この中から3枚選んで下さい。」

「…混ぜた意味は何かあるのか？」

「えーーっと…」

風間は鋭い突っ込みに少し困った。

「まぁ…一応。」

「そうか。」

悪魔はそれ以上突っ込んでこなかった。慎重深くカードを見つめると、1枚1枚を選びだした。

「あ、表には向けないでくださいね。裏向けのまま。」

風間がそう言うと、悪魔はうなずいて3枚目を選び、他の2枚に並べて置いた。

「ありがとうございます。」

風間はそう言うと、残りのカードをまとめ、自分の右に置いた。

そして、悪魔が選んだ3枚のカードを自分の方へ引き寄せ、反転させた。そして、1枚ずつ横に並べた。

「あなたが1番に選んだカードはこれです。」

風間はそう言うと、左端のカードを表に向けた。

「月」だ。それも正位置(アップライト)である。このカードは逆位置(リバース)の方が意味がいい。

「敵が多いようですね。」

悪魔は、カードを見たまま目を見開いた。

「孤立されているのを感じますが、これはあなたが悪いんじゃない。んー…次のカードを見てみましょう。」

風間は2枚目のカードを開いた。そして「おお!」と言って目を見開いた。

「恋人」のカードだった。これも正位置である。実際に恋人がいるという意味でもあるが、相手が相手なので風間は言い換えた。

「いいパートナーがいらっしゃるようです。すいません。孤立してるなんて言って…。」

風間はそう言って頭を掻いた。悪魔は目を見開いて、恋人のカードを見つめている。思うところがあるようだ。

「そして、最後のカード…これが未来を表します。」

風間はそう言って、３枚目のカードを開いた。

「…戦車…アップライト…」

風間はそう呟くように言い、眉をしかめた。
悪魔が風間の顔を見た。風間は「大丈夫ですよ。」と微笑んで、悪魔を見た。

「今、あなたはあらゆる意味で戦いの最中にいますね。それもかなりの緊張状態だ。ですが、今はこちらに有利に進んでいます。いいパートナーの方もいらっしゃるようですし、どんな戦いにも打ち勝てる勢いがあります。１つだけ悪いことがあるとすれば…この戦いは、しばらく終わりそうにないということです。」

悪魔はうなずいた。そして、風間に向いて「ｄａｎｋｅ（ダンケ）」と言った。ドイツ語で「ありがとう」という意味であることは、風間も知っている。

（待てよ…。ドイツ語を話す悪魔って…）

風間はそう思ってから、突然驚きのあまり立ち上がった。

「ザリアベルっ！！」

悪魔はそう叫んだ風間に驚くこともなく、にやりと笑った。…本人は微笑んだだけのつもりかもしれないが…。風間は動揺を隠せないまま言った。

「なっなんで、ザリアベルがここにっ！？」

「この顔を見て気付かないお前もお前だ。それで本当にＥｘｏｒｚｉｓｔ（イスト）（＝悪魔祓いか）？」
「どぅわ…どぅわってっ！」
…風間本人は「だって」と言っているつもりでいる。かなり動揺している。
「どぅわって、くぉっくぉっんな…とっところに…来るっ…来るわけが…」
「あるさ。」
「なっなにしに来たんですかっ！？おっ俺を消しにっ！？」
風間は後ろの壁に背中を押しつけながら言った。正直、風間が戦える相手じゃない。何しろ相手は「神をも殺せる」大悪魔ザリアベルなのだ。
ザリアベルがにやにやしたまま言った。
「そんなことはしない。新人のＷａｈｒｓａｇｅｒ（ヴァールザーガー）（占い師）の割に当たると聞いて来てみたんだ。」
「はっ！？じゃ、本気で占ってもらいに？」
「ん。私にもアルシェにも予知能力はないからな。」
「アルシェって…？」
「お前が今言っていた俺のパートナーだ。一応天使だがな。お前の占いはなかなか当たっていると思う。俺の戦いがしばらく続くと言うことも自分でわかってはいたが、お前に占ってもらって覚悟ができた。ありがとう。」
悪魔ザリアベルはそうにやついた（微笑んだ？）まま言うと、立ち上がった。

「今度はアルシェが来るかもしれん。占ってやってくれ。」
「えええ？」
ザリアベルは動揺している風間に踵を返し、ドアを開いて出て行った。
風間はしばらく動けなかった。
「…無理だし…絶対に無理だしっ！」
風間はそう独り呟いた。
……
風間は部屋のドアを閉じ鍵を閉めると、憔悴しきった様子で階段を下りた。
（ザリアベルだよー…ザリアベルが来たよー…）
そう心の中で何度も呟きながら、風間はビルの外へ出た。そして深呼吸した。
「あー…排気ガスがうまい。」
風間はそう言うと、自分のアパートに向かって歩き出した。
（なんか、飲みたい気分だなぁ。）
風間はそう思った。ザリアベルに会ったのに、ちゃんと生きていることを喜びたかった。

（飲みに行くかー。前の悪魔祓いの報酬もいっぱい残ってるし。）
風間はそう思いなおすと、繁華街に足を向けた。
……
風間がどの店に入ろうか迷っていると、通り過ぎた狭い路地から、女性のヒステリックな声が聞こえた。
風間がバックしてその路地を覗くと、路地の出口の辺りで、年配の女性が若い女性を怒っている様子が見えた。
…だが、風間が見たのはそれだけじゃない。
その年配の女性の肩にうじゃうじゃと、小悪魔がたかっていた。
（うわ…ありゃ最悪だ。ある意味、ザリアベルを祓うよりやっかいかもな。）
風間はそう思うと「くわばらくわばら」と呟いて、その場を去ろうとした。
その時「パン！」という音がした。風間が思わずまた後戻りして路地を覗くと、若い女の子が頬を抑えて泣いていた。
年配の女性が怒鳴った。
「えらそうなこと言うんじゃないわよ！売上もロクに上げていないくせに！…うちのシステムに文句つけるんだったらねぇ！ナンバーワンになってからいいなさいよ！」
（ひえぇぇぇ…キャバクラのママかよー…。良い子には見せられないシーンだ…）
風間はそう思ってまたその場を去ろうとしたが、何か若い女の子が

可哀想になり、結局路地に入りこんだ。
…だが女の子は泣きながら、路地の向こうへ出て行ってしまった。

「ありゃ。」

風間はそう言って立ち止まったが、年配の女性がこちらに振り返って風間に気づいてしまった。

「あら！まぁ…これはお見苦しい所を…」

女性はそう猫のような声を出すと、風間に近寄ってきた。

（うわー来るな来るな！）

風間はそう思ったが、もう逃れられないと思った。

「どうしてこんなところへ？私にご興味でもあるのかしら…」

女性が色気を振りまきながら、風間の真前に立った。
それと同時に、女性の肩にいる小悪魔たちが騒ぎ出した。あきらかに風間のことを警戒している。…だが、逃げ出そうともしなかった。

「…こりゃ、かなり居心地がいいようだ。」

風間がそう言うと、女性は「え？」と目を見開いた。風間が言った

「あなたには、悪魔がついていますよ。それも、うじゃうじゃと。」
「は？」

女性の顔が驚きの表情に変わった。そして、とたんに顔をゆがめて

言った。

「初対面の相手に失礼な人ね。」

「すいません。サイドビジネスで占い師をやっているものでね。本業は「悪魔祓い」ですが。」

風間がそう言うと、女性は目を見張った。

「人をばかにするのもいい加減に…」

「あなたを占いましょう」

風間はそう言うと、さっと胸のポケットから1枚のカードを取り出した。

女性は目を見張って風間を見ている。

風間は取り出したカードを見て笑った。

「女教皇ですか…それも逆さを向いている。」

風間はそう言うと、女性に見えるようにカードを手の平に乗せて差し出した。

「今のあなたの立場です。あなたから見れば、このカードは正しい向きになる。つまり自分では「理知的な女性」で、お店の経営もうまくいっていると思っている。…だが、このカードを逆に見ている他の人は、あなたを「ヒステリーで冷淡な女」と見ている。」

「！！」

女性は唇を震わせた。風間は続けた。

「どうもあなたは孤立していますねぇ。ある意味、経営者というの

は孤独なものですが、自惚れの強いあなたと肩を並べて、同じ向きでこのカードを見てくれる味方はいなさそうだ。あなたについている悪魔ですら、このカードを逆に見ている。だから悪魔がたかっているんです。…このままじゃ、あなたは自分の店を失うことになりますよ。」

「！！」

女性は目を見開いて、今度は体を震わせた。

「…どうすればいいの？」

女性が震えながら言った。風間はカードを胸ポケットに入れながら「うーん」と眉間に皺をよせて言った。

「あなたは、かなり人から恨みをかってるようですね。その恨まれる要素を取り除かない限り、ただ悪魔を払っただけでは無理なようです。払っても、すぐに別の悪魔がつくだけだ。」

「！！」

女性は背を向けて歩き出す風間に驚いて、思わず叫んだ。

「ちょっと！勝手に占っといて逃げるの！？…ねぇ！お金ならいくらでも出すから！」

風間は立ち止まった。女性が叫ぶように言った。

「だから先に悪魔を払ってちょうだい！」

風間は振り返って、あきれたような顔をして言った。

「お金の問題じゃないんですけどね…。こっちの命がやばいくらいの悪魔の数だから。」
「！？」
「今日は僕の金銭運がなかったとあきらめますよ。とにかく、少しずつでも性格変えなさい。じゃ。」
風間はそう言うとまた前に向き直り、手を振りながら路地を出て行った。
女性は、その場に立ちすくんだまま動かなかった。
……
（あー…無駄な占いを…）
風間は歩きながらそう思い、さっき胸のポケットにしまったカードを取り出した。
「あれっ！？」
風間は取り出して驚いた。絵柄が変わっている。そのカードは片足を棒にくくられ逆さ吊りにされた男が、覚悟を決めた表情でこちらを見ているものだった。
「吊るし人…」
風間はそう呟くと、思わずくすくすと笑った。繁華街の道を行き交う人が、不気味そうに風間を見ながら通り過ぎていく。
「正位置（アップライト）でも逆位置（リバース）でも、厳しいカードだこりゃ。」

風間はそう呟くと、そのカードを胸ポケットに戻した。そして「やっぱり今日は飲むのやーめた」と言いながら、自分のアパートに向かって歩き出した。

（終）

……

カード「吊るし人」の意味

忍耐や自己犠牲を表すカード。正位置ならば、忍耐の後にいい方向へ進む傾向があるが、逆位置の場合は何をしても無駄な状況を表す。…正逆どちらにしても、今の風間の状態を表すのにぴったりともいえる。

## 悪魔を占う（後書き）

さて最後に、インチキ…じゃない、新人占い師「風間祐士」が、今回の占いについて、ご説明しましょう。
今回の占いは「トライアングル・スプレッド」です。1枚目、2枚目は「現況」、3枚目は「未来」として占います。
ただ一般には、1枚目は「過去」2枚目は「現況」とするようです。
でも僕には、現況というのは過去が絡むものなので、過去、現況…とわけてしまうのではなく、2枚共を近い過去を含めた現況…というように見た方が読みやすいのでそうしています。

ザリアベルの占いを一般的な方法で占いますと、過去は「敵が多く孤立していました（月・正位置）」が、現在は「いいパートナーがいるようですね（恋人・正）」…となるわけです。
こちらの判断も、間違ってはいません。でも僕が思うに、ザリアベルに敵が多く孤立している状態は今も続いているように思います。

またデッキ（タロットカードのまとまり）は、占い師さんによっては、自分以外の人には触らせない人もいるようですが、僕は本人にカードに触れてもらった方がはっきりした結果が出やすいので、そうしています。
カードも何か気持ちよさそうですしね（笑）↑危ない奴（－－；）
それに相談に来られる方は（ザリアベルはそうでもなかったですが）結構興奮気味に来られるので、シャッフルに集中してもらううちに落ち着いてくるのがわかります。だから、独りで占われる場合も、シャッフルはゆっくりとされるといいですよ！

では、またお会いしましょう！

## 天使を占う（戦）

風間は、乱立しているビルを見上げながら歩いていた。

「こんだけ高いビルをいっぱい建たせて、地面がめくれ上がらないのが不思議だよなぁ…」

風間はそう呟きながら歩いている。実は風間がこの東京に住むようになったのは、ごく最近だ。それまでは、いわゆる田舎と言われる、人里少ないところに住んでいた。

「お、またここにもビルが建つのか。」

風間は工事中のかなり高いビルの骨組みを見上げて言った。
ざっと見ても、２０階はあるだろう。
その時、胸元に何か感じた。

「んー？今度はなんだー？」

風間はそう言うと、胸元のポケットから、カードを取り出した。

「塔（タワー）！？アクシデントか！」

そう思わず叫んで、風間は再び上空を見上げた。
すると、半袖の黒Tシャツに黒のスリムジーパンという出で立ちの男がビルの上から落ちて来たのが見えた。
カードの絵柄も、塔から男が落ちていく様子が描かれている。

「！？」

風間がその男に片手をかざし止めようとした瞬間、男は猫のように身体をひとひねりし、風間の真ん前に片膝をついて降り立った。

「！！」

風間はその男をただ驚いて見た。男は片膝をついたまま、ニヤリと笑った。

「スパイダーマン？生の？」

風間がそう呟くと、男は立ち上がって、突然風間の腰に手を回した。

「ホモのスパイダーマン！？」

風間のその言葉に男は吹き出したが、「道連れ！」といきなり言い、風間を片腕で抱いたまま飛び上がった。

「！？！？ホモの道連れ！？」

「ホモから離れろー！」

風間の真面目な叫びに、男も真面目にそう返しながら、空を切って飛んでいる。

やがて風間は男と共に、ビルの最上階の骨組みに降りた。

「わー！僕、高所恐怖症なんだって！」

風間が細い骨組みの上で、強い風にあおられながら叫んだ。

「あれ、やっつけて！」

風間を道連れにした男が、空を指して言った。

「え？…！！」

風間は、宙に浮かぶ人間のような形をした悪魔を見て言った。

「プアデビルか！」

「プアデビル？」

悪魔と男が同時に風間に言った。

「名前もつけてもらえない、可哀相な悪魔の総称」

風間がそう言うと、男が吹き出し、悪魔は顔を真っ赤にして、怒りの表情を見せた。

「馬鹿にするな！」

悪魔が風間に指を向けた時、風間は「祓い陣！」と叫んで、両手を前に差し伸ばし円を形作った。風間と悪魔の間に、小さな幾何学模様のようなものが入った魔法陣が現れた。

「！！」

悪魔はそのまま体を硬直させた。

「後は頼んだよ！俺は雑魚をやってくる！」

男はそう叫んで、姿を消した。
目には見えないが、すぐそばの異界に下級悪魔がたかっている。
風間が両手を真横に広げると、その魔法陣は大きく広がり光を放った。
悪魔が動きを止めたまま、目を見開いて言った。
「…その陣…まさかあいつの最後の弟子！？」
「ご明察。」
風間はにやりと笑ってそう答えると、額に人差し指を当て叫んだ。
「封印の渦！」
「封印」と聞いて悪魔は少しほっとした顔をした。魔法陣が廻り始め渦となった。
「礼徳の名のもとに祓え！」
額に指を当てたまま風間が叫ぶと、悪魔は声もあげずに、陣の渦に飲まれるようにして消えた。
風間が指を下ろすと、後ろで拍手の音がした。さっきの男だった。
「さすが、礼徳さんのお弟子さん。お見事！」
「どなたかは知りませんが、ただ働きはきついですよー…」
風間が男に振り返りながらそう言うと、男は笑って「ちゃんと報酬は払うよ。」と言った。
「えっほんと！？」

風間が思わずそう言ったとたん、足を踏み外した。

「あら？」

風間はそんな気の抜けるような言葉を残して、ビルから落ちた。
男は笑いながら、骨組みにぶつかりながら落ちて行く風間を追って、頭を下に向け飛び降りた。

……

風間は目を覚ました。
ふと辺りを見渡すと、きれいな部屋の中にいた。自分はソファーに寝かされているようだ。

「お、目を覚ましたな。」

風間は驚いて、声のした方を見た。
さっきのスパイダーマンが、向かいのソファーに座り、自分を微笑んで見ている。

「あれ？僕…体あちこちぶつけて…」

風間は起き上がりながら、自分の体を見た。痛みも痣も残っていない。

「俺が治しておいた。いきなり道連れにして悪かったね。」

「あの…あなたは？」

風間が体を起こしながらそう尋ねると、男はテーブル越しに手を差

し出して言った。
「浅野俊介だ。よろしく。」
「よろしく…。」
風間はそう答えてから、ふと思い出して言った。
「師匠のことを知っているようですが…浅野…さんて何者なんですか？」
風間がそう尋ねると、浅野が「魔術師だよ。」と答えた。
「魔術師？祓い師じゃなくて？」
「時にはそういうこともするが、本業は人を楽しませる「マジシャン」だ。」
「そうなんですか…」
風間は世界的に有名なイリュージョニストを目の前にしていることに気づいていない。この数年間、社会から遮断された田舎に住んでいたからだ。
浅野が少し表情を暗くして言った。
「礼徳さんとは、悪魔祓い師として有名な人だというくらいで面識はないんだが…亡くなり方が気の毒でね。…奥さまも気の毒な事をされたね…」
「…はい…」
風間はうなだれた。風間の師である「礼徳」の妻は、幼いころから性質の悪い悪魔に魅入られ、憑かれていた。元々幼馴染だった礼徳は、その悪魔を祓うために「悪魔祓い」の修業を始め、弟子が取れ

るまでに精進した。…だが、結局2人とも、その悪魔に勝てず死んでしまったのだった。
浅野が言った。
「君は礼徳さんが亡くなる1か月前に、弟子になったんだそうだね。」
「ええ…。早くに弟子になっていれば…もっと技を教えてもらえたのに…」
「だが、陣がもらえたから良かったじゃないか。」
「はぁ…それだけが救いです。」
「あの「礼徳の元に祓え」と言うのは、君が考えたのかい？」
風間は頬を赤らめて答えた。
「はい。…悪魔達に師匠のことを忘れさせないよう、そう言うことにしたんです。…師匠を死なせた悪魔には、まだ僕は戦うことすらできないけど…。でも師匠の名を呼んでいれば、いつか向こうから戦いを挑んでくるでしょう。…その時までに力を付けておきたいと思っています。」
「……」
浅野は、不安げな表情で風間を見つめている。
その時、キッチンから1人の青年が、コーヒーの入ったカップを乗せた盆を持って現れた。
「！！」
風間は全く気配を感じていなかったため驚いた。
「どうぞ。」

キッチンから現れた青年は、風間の前にコーヒーカップを置いて言った。浅野よりも若いようだ。

「あ、ありがとうございます。」

風間は頭を下げた。青年は微笑みながら、浅野の前にもカップを置いた。

「サンキュー、圭一君。」

浅野がそう言ってから、風間に「彼、知らない？」と、青年を指さしながら言った。

「え？…いえ…知りませんが…」

風間は少し動揺しながら答えた。浅野が青年を見ながら言った。

「そうか。日本では有名なアイドルなんだけどなぁ。」

「えっ！？アイドルっ！？」

風間は浅野の隣に座った青年に頭を下げながら言った。

「す、すいません。僕、ずっとテレビとかないところで生活してたもので…」

青年は微笑んで首を振った。浅野が言った。

「君は修行中だったからな。」

「ええ…。３年程、ド田舎で修行してたもので…」

風間がそう答えると、青年は不思議そうな表情をして浅野を見た。
「彼は悪魔祓いの専門家だよ。有名な悪魔祓い師のお弟子さんでね。」
「！そうなんですか！すごい！」
浅野の言葉に青年は目を見開いてそう言い、風間を見た。風間は顔を赤くしてうつむいた。
「すごいのは師匠で、僕はまだまだ…。」
「またまたご謙遜をー…」
浅野がそうコーヒーをひと口飲んで言った。
「確か圭一君と同い年なんじゃないかな？…修行明けということは、２０歳を過ぎたところだよね？」
「え、ええ。」
「じゃぁ、僕と同じだ！北条圭一（きたじょう）です。よろしく！」
青年はそう言うと風間に手を差し出した。風間は照れくさそうにその手を握って言った。
「風間祐士です。」
浅野はそんな2人をにこにこしながら見て言った。
「ザリアベルが君の所に来ただろう？」
「！？」

風間は驚いて、浅野を見た。

「はっはい！」

圭一という青年も驚いた目で浅野を見ている。風間は動揺しながら言った。

「どうしてそれを…。」

「ザリアベルが君を褒めてたんだ。占い、当たったってさ。」

「そ、そうですか。…浅野さんとザリアベルさんって…どういうご関係なんですか？」

「ザリアベルと僕は「恋人」同士だそうだね。」

「！？」

圭一が一層目を見開いて浅野を見た。風間は驚きながら言った。

「アルシェって…あなたですか？」

浅野がにこりと笑ってうなずいた。

それと同時に、浅野の背に大きな白い羽が生え、髪が伸び銀髪となった。顔も優しそうな浅野の顔から、目つきの鋭い精悍な顔に変わった。

「！！」

風間が驚いていると、天使に姿を変えた浅野が手を差し出した。

「天使のアルシェだ。よろしく。」

「こっこちらこそ！」

風間は目を見張ったまま浅野（アルシェ）の手を握った。
「で、俺もさ。占ってもらおうと思って。」
「えっ！？」
風間が驚いて言った。圭一がアルシェに向いて言った。
「占いって？」
「彼はサイドビジネスで「タロット占い師」をしているんだ。ザリアベルが早速、彼のところで占ってもらったらしいよ。」
「そうなんですか。ザリアベルさんらしいような、らしくないような…。」
圭一がくすくすと笑いながら言った。アルシェも笑っている。風間が言った。
「あの…アルシェさんが占って欲しいというのは…？」
アルシェは表情を硬くして「ん…」とためらってから言った。
「俺とザリアベルがいつまで「恋人」でいられるのか占って欲しい。」
「！？」
圭一がとたんに笑顔を消した。風間も驚いてアルシェを見た。
「いつまで…というのが難しければ、俺たちに別れの日が来るのかどうか…でもいい。」
「アルシェ…」

圭一がアルシェの腕を取り、「どうしてそんなこと…」と呟くように言った。アルシェは風間を見つめたまま言った。

「…ザリアベルは、天使の俺と組んで罪人を裁いていることで、魔界でかなり問題視されているようなんだ。悪魔が魔界を追い出されると、どうなるのか天使の俺にはわからないが…最悪、ザリアベルは「消滅」してしまうかもしれない…。…俺たちが天界から追い出される時は「堕天」と言って、魔界に落ちてまだ存在することはできる。…だが、悪魔はそれ以上堕ちるところはない…。」

「……」

圭一がうつむいて悲しそうな表情をした。風間も真剣な表情でアルシェの憂いに帯びた目を見た。

「…ザリアベルは消滅を恐れていないようだが…彼が俺と組んでいるせいで本当に消滅してしまうのなら…俺は「訣別」を選ぶだろう。」

「……」

「その訣別の為に戦う日が来るかもしれない…とも思ってる。…ザリアベルの存在を守るために…。」

「！…」

「いつか…というのはわからなくていいが、俺とザリアベルが…どうなるのか占って欲しい。」

風間は眉をしかめて考え込んでいたが、心を決めたように顔を上げて言った。

「わかりました。…ただ、僕は占い師としてもまだ駆け出しです。どういう結果が出ても、あまり真剣に捉えないでください。」

「…わかったよ。」

風間はそう答えたアルシェにうなずくと、上着のポケットからタロットカードを取り出した。
フルセット７８枚…。責任重大だな…と風間は思った。

……

アルシェにカードをシャッフルしてもらった後、風間はそのカードをまとめた。そして「どっちの向きにしますか？」と尋ねた。カードの正逆が違うと全く意味が違ってくる。

「そのままの向きでいい。」

アルシェが真剣な表情で言った。風間がうなずいた。
圭一は風間の手に持ったカードを見つめていたが、やがて立ち上がった。

「圭一君？」

アルシェが圭一を見上げて言った。

「僕…結果を知りたくないので、浅野さんの部屋で待ってます。」

圭一のその言葉に、アルシェはふと微笑んだ。

「…ん…ごめんよ。」
「いえ…」

圭一は風間に頭を下げると、リビングを出て行った。風間はカードを手に持ったまましばらく動けなかった。

「風間君、いいよ。始めて。」

アルシェに促され、風間はうなずいた。そして上から7枚目のカードをテーブルの中央に表向きに置いた。

ボロの服をまとった男が、幅の狭い崖の上に片足だけで立ち、嬉しそうに空を見上げている。肩に小さな袋をぶら下げた棒をかつぎ、今にも空に飛び上がろうとしているようだ。その男の足元の犬が、忠告するように吠えている。

「愚者…正位置（アップライト）…」

風間はそう呟いたが、はっと顔を上げて浅野に言った。

「先に全てをスプレッドします。それから読みますので。」

アルシェは「愚者」のカードを見つめながらうなずいた。

風間はまた上から7枚目を引き、1枚目のカードに十字になるように表向きに重ねた。

「金貨の9…リバース…」

風間はそう呟いてから、同じことを繰り返しながら、順番にカードをスプレッドしていった。

「ケルト十字スプレッド」と呼ばれる形ができあがった。10枚のカードを使って占う方法である。

風間は最後のカードを見て、一瞬眉をしかめた。アルシェはその風間の瞬間的な苦悩の表情を見逃さなかったが、何も言わなかった。

風間はざっとカードを見渡した。

１（現状）「愚者」正
２（障害）「金貨９」逆
３（顕在意識）「聖杯５」正
４（潜在意識）「棒７」逆
５（過去）「棒８」正
６（未来）「剣ナイト」逆
７（立場（アルシェ側））「金貨クイーン」正
８（周囲…ここでは敵）「金貨３」逆
９（変化）「聖杯１０」逆
１０（最終結果）「棒１」逆

風間は大きくため息をつくと、少し明るい声を上げた。

「ざっと見た感じ、絵札が少ないですね。数字のついた札がほとんどです。」

「…それに意味があるのか？」

アルシェがそう呟くように言った。

「ええ…。この中で絵札と言われるものは3枚しかありません。それもその中で、大アルカナのカードが1枚しかないところを見ると、あまり気にしなくていいということです。カード自身がとまどっているのかもしれません。」

風間がそう言うと、アルシェは目を見開いて顔を上げた。

「絵札だけ意味を教えましょう。1番目は「愚者」というカードですが、この場所はアルシェさんの現状を表しています。その名の通

り、あなた方は周りには理解しがたい…ある人から見れば「とんでもない」ことをしている。」

風間のその言葉に、アルシェは自嘲するように笑った。

「そうだな。天使と悪魔が組む自体が「Ｆｏｏｌｉｓｈ（愚か）」なことだよな。」

「僕は愚かだとは思いませんけど…。」

風間は微笑みながらそう言うと、６枚目の「剣ナイト」のカードを指さして続けた。

「御覧の通り、ナイト（騎士）が剣を持ち、駆ける馬に乗っているという颯爽としたイメージの絵札です。…ですが、残念ながら逆位置に出ている。」

「……」

アルシェは黙って「剣ナイト」のカードを見つめている。

「このカードは正位置で出ていれば「勇敢」と捉えられますが、逆位置になると「軽率」という意味になります。」

「！！」

アルシェは顔を上げて、風間を見た。風間はため息をつきながら、カードに向いて言った。

「それもこの６番目の位置は「未来」を表します。…何らかの無意味ともいえる戦いが起こる事が予測されます。」

「……」

アルシェは目に手を当てた。しばらくそうしていたが、その手を外して「それで？」と言った。

「そして、このあなたの立場を表す位置に「金貨のクイーン」が出ています。この…金貨を大事そうに抱いたクイーンの表情を良く見て下さい。少し悲しげに見えませんか？」

アルシェはそう風間に言われてカードを見た。そして眉をしかめてうなずいた。風間が言った。

「これはあなたが今の状況に満足はしているものの、不安も感じているという意味を表します。」

アルシェは苦笑するように笑って「確かにその通りだな」と呟いた。風間は続けた。

「あなた方は情熱を持っているにもかかわらず、かなりの迷いも感じながら戦っている様子がうかがえます。ただ、敵は大したことはない。戦い自体はあなた方の方がずっと有利です。それはザリアベルさんの占いにも出ました。」

アルシェは、風間が指を乗せた8番目のカード（金貨3・逆位置）を見たままうなずいた。

「そして最終結果を現すカードですが…これも数札のカードなので、意味はかなり弱い。…だからあまり気にすることはないでしょう。私は結果をだすのはまだ早いとカードが告げているのを感じます。それよりも、今は悩まずに頑張れ…と告げたいがために数札だらけになったのだと私は見ています。」

風間のその言葉にアルシェは顔を上げた。そして微笑んでから言った。

「…で？…最後のカードの意味はなんだ？」

風間はそのアルシェの目を見ながら口を開いた。

……

「圭一くーん！終わったよー！」

アルシェから人間形に戻った浅野が、ドアをノックしながら言った。
隣には風間が立っている。

「圭一君？入っていいか？」

返事がない。浅野は風間と顔を見合わせてから、そっとドアを開いた。
圭一はベッドに寝ていた。それも頭から布団をかぶっている。

「圭一君。寝ちゃったのかい？」

浅野がそう言って布団を下げると、驚いたように体を上げた。
圭一が嗚咽を漏らしながら、涙を流していた。
圭一はさっと起き上がると、また布団を被って体を落とした。

「…圭一君。…大丈夫なんだ。ザリアベルとは縁が切れたりしないよ。」

浅野がそう言うと、圭一は布団を大きく下げて、浅野を見上げた。

浅野は笑って、風間を見た。風間が微笑んで圭一の赤い目を見ながら言った。

「浅野さんの考えすぎです。先の事は本人たちの気持ち次第でどうにでも変わってしまう…。」

「！…そんな結果だったんですか？」

「ええ。」

驚いている圭一に、風間が頭を掻きながら言った。

「何分、新人なもので、はっきりとした結果が出なかったんですよ。」

「…そう…そうですか…」

圭一は嬉しそうにそう言い体を上げた。そして目を指で拭いながら言った。

「あ、あの、今度は紅茶を入れますよ！ザリアベルさんが好きな「レディグレイ」という紅茶なんです！」

浅野が嬉しそうにした。

「おお、いいねぇ。頼むよ。」

「はい！」

浅野と風間は、慌てるように部屋を出て行った圭一を見送りながら、微笑み合った。

（終）

……

カード「棒１（エース）」逆位置の意味

「破滅」「終焉」

正位置ならば「すべての始まり」を表す。

## 天使を占う（戦）（後書き）

では気を取り直して、最後にインチキ…いえ、新人占い師の「風間祐士」が、今回の占いについてご説明しましょう！

最後に出た「棒1」のように、タロット占いでは、カードの正逆によって全く意味が違ってきます。恐ろしいですね。
だから、僕は「ケルト十字スプレッド」で占う場合は、ご本人にカードの向きはどちらにするか聞くようにしています。これもご本人のインスピレーションが大事で、僕が選ぶものじゃないと思っています。

また今回の占いで「絵札」と「数札」の比率が問題になりましたね。絵札とは「大アルカナ（22枚）」と「小アルカナのコートカード（16枚）」を指します。コートカードとは、トランプでいう「キング」や「クイーン」のようなものです。タロットカードでは「キング」「クイーン」「ナイト」「ペイジ」の4種類あります。
聞き慣れないのは「ペイジ」ですね。このペイジはまだ未熟な少年少女を指します。「ナイト」の見習いとも言われますし「プリンセス」とも呼ばれることがあります。絵柄では、少年の姿で書かれているのがほとんどです。
カードには力関係があります。1番強いのが大アルカナ、2番目に強いのが小アルカナのコートカード、最後に強い（？）のは、棒、聖杯、剣、金貨の4つのスートからなる「数札」となります。
ですので、あまりに数札が多い場合は、カードがとまどっていると思っていいと思います。普通同じ占いは2度としない方がいいのですが、数札が多かった場合は、日を改めてもう1回してみるといいでしょう。

そして…実は、今回アルシェに説明できなかったカードがあります。それは、９番目の変化を表すカード「聖杯１０（逆）」です。このカードは「友情の破たん」を表します。…さすがにこれは口に出せませんでした。絵札の説明だけにしたのはそのためです。
でも今回の占いは、僕が思うに、アルシェがザリアベルを想うがゆえに起こされる結果だと見ています。
例えば、この占いをそのまま読んでみると、アルシェはザリアベルの消滅を阻止するために、無意味ともいえる戦いをザリアベルに挑み（剣ナイト（逆））、救いを求めていない（つまり消滅を恐れない）ザリアベルがそれに反発するために友情が壊れ（聖杯１０（逆））、破滅に向かう（棒１（逆））という予測になります。
ですが、これは今の段階での予測にすぎません。アルシェがこの占いの結果を知る事によって、ザリアベルに無意味な戦いを挑まなければ「友情の破たん」も「破滅」も起こらないわけですから。
占いとはこの程度のものなんです。僕が圭一君に安心させるために言ったように「先の事は本人たちの気持ち次第でどうにでも変わってしまう」んです。だから占いの結果は、あくまでもカードからの「忠告」だと思って下さいね。

では、また次のお話でお会いしましょう！（＾＾）

## 神は祟らない（戦）

「神の祟り？」

風間は占い部屋で、前にいる相談者の女性に思わず言った。見たところ３０代前半くらいだろう。

「そうなんです！最近、気持ち悪い事が続いて…」

「気持ち悪いこと？」

「ええ。誰もいない部屋から声がしたり、誰もいないトイレから水が流れる音がしたり…誰もいないお風呂から泣き声が聞こえたり…」

風間は（それ幽霊じゃないの？）とぞっとした。悪魔は怖くないが、得体のしれない「幽霊」は苦手だ。

女性はそんな風間に気付かずに続けた。

「それで、祈祷師さんに見てもらったら「ここは元々は神社が建っていたところで、勝手に家を建てたことで神が怒ってる」…というんですね。」

「うーーん…」

幽霊はともかく、神がそんなことで怒ったり祟ったりするんだろうか…と、風間は疑問に思いながら尋ねた。

「で…その祈祷師さんにお祓いはしてもらったんですか？」

「何を言うんですか！神様を祓えるわけないでしょう！！」

「あ、そうか。」

風間は頭を掻いた。が、最初から思っていた疑問を聞いてみること

にした。

「それで…僕に何を占って欲しいんです？」

「はい！その神様に気を鎮めてもらうためにはどうすればいいか、占って欲しいんです！」

「はぁ！？」

風間は思わず声を上げてしまった。そもそも、神様かどうかわからないものの気を鎮める方法なんて、タロットで占うには無理がある。風間はそう言おうと思ったが、ふと思いついて女性に言った。

「あの…正直言いますと、神様という偉大な方に対してですね…僕なんかが関わる自体、とんでもないことなんですよ。…でも、お困りのようですから専門家をご紹介しますよ。ただその方は祈祷師とか言うのではなく、神様とお話しができる人なんです。僕も同行しますので、その方とお宅にお伺いしていいでしょうか？」

「それは嬉しいのですが…料金はどれくらいかかるのですか？」

「うーん…お祓いするわけじゃないから…でも、特殊能力ですからね…５０万円くらいで考えておいて下さい。」

「５０万円！」

「無理なら、無理です。」

風間のその言葉に女性は考え込んだ。そして「考えさせてほしい」と言って、帰って行った。

風間はほーっと息をついた。

「あー…はったりが効いた…」

実は神と話せる専門家なんていないのである。そんな訳のわからない事に関わるのはごめんだ…というのが正直な気持ちだった。

…だが、風間は結局関わってしまうことになるのである。

……

「えっ！？５０万円払うって！？」

風間は翌日も来た女性に、驚いて声を上げた。

女性が興奮気味に言った。

「はい！ひいおばあちゃんが気持ち悪がっていて、貯金を下ろすから是非来てもらってくれって…」

「ええーっ！？」

風間はそう叫んでから、はっと口をつぐんだ。

（まずい、ひじょーにまずい…）

風間は黙り込んだが、何かに気付き急に明るい声を上げた。

「わかりました！その方に連絡をつけますので、いつ行けばいいですか？」

女性は嬉しそうな顔になった。

……

「いやだーっ！幽霊はいやーーっ！！」

天使「アルシェ」の人間形「浅野俊介」がリビングと和室の間にあ

る柱にしがみついて叫んでいる。その体を、風間が柱から引き剥がそうとしがみついていた。まるで、コアラの親子のようである。

「浅野さん、お願いしますよ！幽霊じゃないんです、神様なんですよ！」

「神様じゃないにきまってるだろ！？それは幽霊だよっ！絶対に幽霊っ！」

浅野は柱にしがみついたまま離れない。そんな2人を、天使アルシェの主人「北条圭一（きたじょう）」がリビングのソファーから、あきれ顔で見ていた。圭一の膝では、キジ柄の子猫「キャトル」があくびをしている。

風間が食い下がった。

「神様じゃないなんてどうしてわかるんですかっ！」

「本当の神様なら、そんなことで怒ったり祟ったりしないのっ！」

浅野の言葉に、自分の思っていた通りだ…と、風間は思った。

だが、納得している場合じゃない。

「それでもお願いしますよー！明日連れていくって返事しちゃったんですよー！」

「…金取るの？」

浅野が急に声のトーンを落として、風間に向いて言った。

「え？…ええ…」

「いくら？」

「…５０万円…」

「この金の亡者ーっ！！」

浅野はそう言って、また柱にしがみついた。風間は浅野の体にしがみついて言った。

「違いますー！本当は、それぐらいの金額を言っておいたら断って来ると思ったんですよ！…それが払うから来てくれってことになっちゃって…」

「にゃあっ！！」

キャトルが急に鳴いた。圭一が驚いた顔をしてキャトルを見た。キャトルは圭一の膝から飛び降り、驚いている風間の足元に駆け寄ってまた「にゃあ！」と鳴いた。

浅野がキャトルに向いた。

「…ザリアベルに？…！…そうだ！ザリアベルに行ってもらおう！！」

「ザリアベルさんに？うわっ！」

「！！」

浅野が急に手を離したので、その体をひっぱるようにしがみついていた風間がひっくり返り、浅野がその風間の体の上に、仰向けにひっくり返った。

「…浅野さん…どいて…！」

「ワンツースリー…浅野、チャンピオンを勝ち取りましたー…」

もがく風間の体の上で、浅野が言った。

キャトルと圭一が同時にため息をついた。

……

「どうして俺が…」

すぐに呼び出された悪魔「ザリアベル」はソファーに座り、当然のごとく「ぶすっ」とした顔で、圭一の淹れた紅茶を飲んでいた。向かいに座っている風間が両手を合わせて懇願している。

「お願いします！ザリアベルさんは幽霊大丈夫でしょう？」

「幽霊とは限らんだろう。」

「例えば？」

「それこそ、悪魔の仕業かもしれない。」

「悪魔！？」

「それなら、お前の仕事だ。俺はこれ以上敵を増やしたくないんでね。」

「でも、悪魔かどうかもわからないじゃないですかー！お願いです！一緒に見に行くだけでも…ねっ！」

風間が両手を合わせたまま言った。ザリアベルの隣に座っている浅野は黙りこんでいる。

風間の隣に座っている圭一が言った。

「ザリアベルさん。僕からも頼みます。風間さんを助けてやって下さい。」

「！！」

風間は驚いて圭一を見た。圭一は苦笑するように笑って言った。

「だって、あまりに気の毒で…。」

その圭一の言葉に、ザリアベルはため息をついた。

「…圭一君がそう言うのなら、仕方ないな。」

ザリアベルのその言葉に、風間がその場で飛び上がって言った。

「！！…えっ！？ザリアベルさん！本当ですか！？」

「1回だけだぞ。1回だけしか行かないからな。」

「はい！充分です！わー！圭一さんありがとう！」

風間はそう言って、圭一の首に抱きついた。圭一が笑いながら「よして下さい。」と言った。

浅野がほーっと息をついた。

「お前も来い。」

「！？」

急にザリアベルにそう言われ、浅野は目を見開いてザリアベルに向いた。

「おっおっ俺は、留守番してます！…お疲れになって帰ってくる皆さんの為に、ご飯作らなきゃー…」

「……」

ザリアベルが浅野を睨みつけている。

「…お供します。」

浅野がうなだれながら言った。圭一が吹き出した。風間は「やったーっ！」と両手を上げて喜んだ。

……

翌日

「きゃぁっ！」

玄関を開けた女性がいきなりそう叫ぶので、先頭にいた風間と浅野は思わず何かが見えたのかと、そっと後ろを振り返った。
…いたのは、ふてくされ顔のザリアベルだけである。

「？」

風間と浅野は再び女性に振り返った。女性は指を胸の前で組んで言った。

「浅野俊介さんですよねっ！イリュージョニストのっ！」
「えっ！？…あっ…ああ、はい…そうですが…」
「きゃーっ！ひいおばあちゃんっ！浅野さんが来たー！嘘みたーい！！」

女性はそう言いながら、中へ引っ込んでしまった。
自動的にドアがバタンと閉じ、風間達は取り残されてしまった。

「喜んでもらえたし…帰ろうか、風間君。」
「そうですね。浅野さん。」

2人がそう言って振り返ると、後ろにいたザリアベルが2人を睨みつけた。

「……」

２人は再び、まだ閉じたままのドアに向いた。

……

「まぁまぁ！生きてて良かったよぉ！」

老女に手を握られながらそう言われ、浅野は照れくさそうに笑った。こんなに感動されて嬉しくないわけがない。女性が嬉しそうに風間に言った。

「風間さん！専門家って浅野さんのことだったんですか？」

「ああいえ…実はあちらの…」

風間は、リビングの中を見渡しているザリアベルを手で指した。

「専門家というのは、あちらのザリアベルさんです。」

「！！…ザリアベルさんって…まぁっ！イリュージョンショーに出てたっ！？」

「えっ？」

風間は知らない。

「ひいおばあちゃんっ！」

女性のその言葉に（またかよ…）と風間はため息をついた。

「ひいおばあちゃんっ！ザリアベルさんですって！ほら、テレビのイリュージョンショーで出てたでしょ！」

「まあまあ！」

老女は浅野の手を離して、ザリアベルにゆっくりと近寄り、両手を取った。

「よお来てくれました。どうぞよろしくお願いします。」

老女はそう言うと、ザリアベルの手を取ったまま頭を下げた。ザリアベルは目を見開いて、ただ老女を見つめている。

……

老女は女性とソファーに座り、リビングをゆっくり歩き回っているザリアベルを不安げに見ていた。

風間と浅野も一応、リビングを見渡しているが、正直何も見えていない。…悪魔の類ではないようだった。

（…やっぱり…幽霊…）

風間はそう思い、ぞっとした。幽霊だった場合は、どうすればいいのかわからない。それこそお祓いは祈祷師の仕事だ。

「庭を見せてもらう。」

ザリアベルが言った。老女が目を見開き、女性が慌てて立ち上がった。

「はい！どうぞ！」

ザリアベルはうなずくと、リビングの窓から庭に降りた。

女性が慌てて言った。

「ザリアベル様っ！どうぞ、この下駄を…」
「？…ああ、そうか。」

ザリアベルはそう言うと、一旦降ろした足を元に戻した。そして女性が並べ直した下駄を履いて、庭に下りた。
カランカランという音がする。風間が思わず吹き出しそうになったが、なんとか必死に堪えた。浅野などは背中を向けて、肩を震わせて笑っている。
…どう見ても、ザリアベルと下駄が似合わないのだ。
だが、女性と老女は笑うこともなく、ザリアベルが中庭を見渡しながら歩いているのを不安そうに見ていた。

突然ザリアベルが、片手を差し出し何かを掴もうとした。
だが逃げられたように、宙を見ている。

「！！！」

女性が体を強張らせた。浅野は何事かと窓に駆け寄ってザリアベルを見た。風間は固まって動けない。

「浅野…見えないのか？」
「え？」

ザリアベルにいきなりそう言われ、浅野は面食らった。

「私には何も…」
「そうか…じゃぁ、悪魔の類じゃないのだな。」
「ザリアベルには見えているんですか？」
「俺には、白いクラゲのようなものがたくさん浮いているのが見え

る。リビングの中もそうだ。この中庭も。特にあの木…」
ザリアベルはそう言って後ろを振り向き、大木を指さした。
「…白いものに絡みつかれて、ほとんど俺には木が見えない。」
それを聞いた女性は口に手を当てて慌てるように老女の横に座り、その手を握った。老女は真剣な表情でザリアベルを見つめている。風間と浅野は情けなくも、恐怖でかちこちに固まって動かなくなっている。
「そなた…本物じゃの。」
老女が突然言った。ザリアベルは老女に向き、下駄の音を鳴らしながら窓に近づいた。
「婆さんにも、見えているんだな?」
ザリアベルの言葉に、女性が驚いて老女を見た。風間と浅野も驚いた目で、ザリアベルと老女を交互に見た。
老女がゆっくりと立ち上がりながら言った。
「じゃぁ…このおかしなことがどうして起こったか…もうわかっとるな?」
「いや…まだよくはわからん。ただ、神の祟りではない事は確かだ。」
ザリアベルがそう言うと、老女が笑った。
「それは神様に失礼なことをしたの。」

「婆さん…あの木で誰か首を吊ったんじゃないか？」
風間と浅野は驚いた目でザリアベルを見た。女性は両手を口に当てて老女を見た。
ザリアベルが続けた。
「…このクラゲのような奴らは、その首を吊った奴の恨みが形をなして集まってる。」
「！？」
風間と浅野がまた固まった。女性が不安そうに老女を見ている。老女はため息をついて言った。
「恨んでるなら、どうしてそう言ってくれんのかの。」
ザリアベルは眉をしかめて言った。
「婆さん、答えになってないぞ。いったい何があったんだ？」
「その木で首を吊ったのは男の子じゃ。…それも１００年以上も前の話でな…」
「！」
老女の言葉に、全員が目を見開いて老女を見た。
「うちは江戸時代から続く商家でな。奉公に来た子たちをこき使ったそうだ。そのこき使い方は半端じゃなかったらしくての…１人の丁稚奉公をしていた少年が、その木の枝に手ぬぐいをかけて、首を吊って死んだんじゃ。」
「……」
「その頃の主人は反省して、それから奉公人を大事にするようにな

った。だが家族はその木を気味悪がっての。主人に切るように頼んだが、主人はその少年の事を忘れないようにと残した。その後も切られることなくその木は残ったが…残ったせいで、死んだ少年がここに居つくことになってしまったのかもしれんの。」

老女は言葉を一旦切って、悲しげにため息をついた。

「死んだ少年の霊はずっとその木に居ついたまま、１００年以上かけて力を付けて来たんじゃろう。そして…末裔のわしらを呪い殺す準備をしとるのかもしれん。」

ザリアベルが眉をしかめて、老女に尋ねた。

「それに気づいたのはいつだ？」

「先月じゃの。時にはその少年の姿が見えるようになって…」

「浅野っ！！」

ザリアベルが突然叫んだ。浅野は女性と老女を両脇にかかえて、別の部屋に瞬間移動した。

間一髪で、竜巻がリビングの中に現れた。あのままだと女性と老婆は吸い込まれていただろう。ザリアベルと浅野はそれを感じたのだった。

風間はその場に屈み、竜巻に巻き込まれないように必死に耐えていた。

「エクソルティスト！」

同じように、竜巻の向こうで屈んでいるザリアベルが叫んだ。

風間は自分の事だと、顔だけを上げたが答えられなかった。ザリアベルの声が聞こえた。

「姿を映せっ！」
「えっ！？でも悪魔じゃない！」
風間はやっとのことで答えた。ザリアベルが叫んだ。
「悪霊も同じことだ！姿を映すんだっ！」
「！！」
風間はなんとか壁に手をついて立ち上がり、両手を前に伸ばして円を形作った。
「鏡の陣！」
竜巻と風間の間に小さな陣が現れた。そして風間が両腕を広げると、陣がそれに従って大きく広がった。
「！！」
陣が竜巻の本体を映している。それを向かいから見たザリアベルが何か悲しそうな顔をした。
風間もその姿を後ろから透かし見て、顔をしかめた。
あどけない少年の姿だった。まだ１０歳になっていないほどの着物姿の少年が映っている。
「おうち…に…帰りたい…の！…父さん…と…母さんに…会い…たい…！」
丁稚奉公の少年が、竜巻の中心でそう叫びながら泣いていた。ずっ

と泣き続けていたように、激しくしゃくりあげている。その時、風間の脳裏に少年の過去や想いが、映像が早送りされるように映った。風間はあまりのつらさに目を閉じた。

「エクソルティスト！この子を救え！」

ザリアベルが震えながらも叫んでいる。ザリアベルにも見えたようだ。

だが風間は、両手を広げたまま、とまどったように目を泳がせている。

「…悪魔じゃないから、どうすればいいのか…」

その風間の言葉を聞いた少年は、また大声で泣き始めた。

ザリアベルが叫んだ。

「礼徳の教えを思い出せ！！魔を魔と視(み)ず！」

「！！」

風間は目を見開いた。ザリアベルが続けた。

「人を人と視ず！」

風間はうつむき加減に、ザリアベルの声に合わせて呟いた。

「…悲哀辛苦(ひあいしんく)を祓い除けば、みな無垢な魂に還(かえ)りゆく也(なり)…」

少年の泣き声が響く中、風間は必死に頭を巡らせた。

風間の後ろに、ドアを開いて立つ浅野の姿があった。その浅野にかばわれるようにして、老女と女性が祈るように風間を見つめている。

「悲哀辛苦を祓い除き…」

風間はそうもう1度呟いて、意を決したように顔を上げ少年を見た。

「泣くなっ！」

風間が叫んだ。少年はしゃくりあげながらも、泣き声を止めた。

「…僕には、君を冥界の入口まで送ってやることしかできない！…そこで親が来るのを待つんだ！」

風間のその言葉に、少年がしゃくりあげながら尋ねた。

「来な…かった…ら…？…僕…のこと…忘れ…てたら…？」

風間が答えようと口を開いた時、老女が叫んだ。

「親は子を忘れたりせん！」

「！！」

風間は両手を広げたまま、顔だけを老女に向けた。少年が老女を驚いた目で見ている。

「１００年経っても、２００年経っても、わが子を忘れたりはせん！」

老女の言葉に、少年はしゃくりあげながらうなずいた。

風間は微笑んで少年に向き、広げていた両手を拝むように自分の胸の前で「パン」という音と共に閉じた。

陣が消え、少年の姿は竜巻に戻った。
風間は両手を前に差し伸ばして、円を形作った。
「浄邪(じょうじゃ)の陣！」
小さな陣が竜巻の上に現れた。風間は陣を見上げながら両手を広げた。それに従うように陣が大きく広がった。
風間は、額に人差し指を当てて叫んだ。
「邪気を除き、冥界への道を開(あ)けよ！」
竜巻が消え、少年の姿が現れた。そして陣から光が降り注いだ。少年は驚いたように降り注ぐ光を見上げた。
少年が笑顔になった。
「！きれい！」
風間は額に指を当てたまま叫んだ。
「礼徳の名の元に…祓え！」
少年は笑顔のまま目を閉じた。そして、輝く光に包まれて消えた。
後には静けさだけが残った。
風間は、その場に四つん這いになるようにしゃがみこんだ。
同時に、老女も両手で顔を覆って座り込んだ。女性が涙ぐみながら、老女を抱くように屈んだ。
浅野は、微笑みながら風間を見ている。
「よくやった。」

風間の耳に、いつの間にか傍まで来ていたザリアベルの声が聞こえた。
風間はザリアベルを見上げた。
ザリアベルは、微笑みを見せていた。風間が初めて見た顔だった。
風間は、何故ザリアベルが礼徳の教えを知っているのか聞こうと思った。

「ザリアベルさん…」
「なんだ？」

…風間がふと視線を落とした時、ザリアベルの足を見てしまった。
そして思わず言った。

「…家の中では下駄を脱いで下さい。」
「！！」

ザリアベルの顔が真っ赤になった。
風間は、またザリアベルを見上げて笑った。

……

「その子は家族の元へ帰りたかっただけだったんです。誰も殺すつもりはなかった…」
ソファーに座った老女は、風間のその言葉に黙ったままうつむいていた。風間が続けた。
「死んで魂だけになれば、家に帰れると思ったんでしょうね。でも自ら命を絶った魂は除霊されない限り、その場に縛られてしまう。

それでその子は時間をかけて、あなたに訴える力をやっとつけた。
それが怪現象だったわけです。」

しばらく、誰も口を利かなかった。長い間（ま）ののち、老女がぽつりと呟いた。

「あの子は…親に会えたかの…」

それを聞いて皆うなだれた。その時、風間の胸ポケットから「がさっ」という音がした。
それを感じた風間は「じゃあ占って見ましょうか。」と言い、胸ポケットからカードを取り出した。

そしてそれを先に自分で見て微笑み、テーブルに置いて言った。

「聖杯の１０、正位置（アップライト）」

そのカードの絵柄を見て、女性が「まあ！」と嬉しそうに言い、両手を胸の前で合わせた。
老女は涙をこらえるような顔になり、浅野がほっと息をついた。ザリアベルは無表情のままカードを凝視している。

絵柄は、両親らしき男女が肩を並べ、聖杯１０個と共に現れた空の虹に手を上げ喜びを表している。そしてその側には子供が２人手を取り合ってはしゃいでる姿があり、遠くには、この家族の家が見えていた…。

（終）

……

カード「聖杯１０」正位置の意味

「家庭円満」「願望成就」を指す。
逆位置になると「家族トラブル」「孤独感」「友情破たん」となる。

## 神は祟らない（戦）（後書き）

では最後に新人（もうインチキとは言わない（笑））占い師の「風間祐士」が、今回の占いについてご説明しましょう！

僕は、胸ポケットをいつも空にしているんですが、これまでにもあった通り、カードが勝手に現れることがあります。
ザリアベルの時は「隠者」でしたね。たぶん「この悪魔は君に危害を加えないよ」と告げてくれたのだと思います。そしてアルシェの時は「上から誰かが降ってくるよ！」と危険を知らせてくれました。
そして今回は「少年の望みは叶ったからね」と教えてくれました。
ただ、こういうことは僕にしか起こらないと思うので（笑）皆さんの場合は「ワンオラクルスプレッド」という1枚のカードで占う方法でされるといいでしょう。
シャッフルしたカードから1枚抜くだけの、シンプルな占い方法です。今日の運勢を占う時などに適しています。
僕は「ライダー／ウエイト版」というカードを使っています。これは一般的なもので、また数札にもわかりやすい絵が入っているので、インスピレーションが湧きやすいです。
意味は深くわからなくても、絵札を見て「楽しそうだな」とか「ちょっと悲しそうだな」と直感で感じたら、それがそのまま占いの結果となります。僕はインスピレーション力を養う練習に使っています。是非独り占いでやってみて下さい。
本当は、僕みたいにカードの方から現れてくれたら、もっとわかりやすいんですけどね（＾＾；）

では、また次のお話でお会いしましょう！（＾＾）

## 恋を占う

風間は、今来たばかりの液晶テレビを満足気に眺めていた。

「薄いテレビー…すごいすごい…」

風間はそう言いながら、テレビの前や横をうろうろと歩き回っている。まるで初めておもちゃを買ってもらった子どものようである。アンテナは電気屋が繋げてくれた。後は、リモコンから電源を入れるだけである。

「では、スイッチオン！」

風間はそう言うと、テレビのリモコンの電源を押した。しばらくしてからテレビがついた。

「うわ。めっちゃキレイ！！…そこに人がいるみたいだっ！」

風間はいちいち感動しながら、チャンネルを変えた。

「歌番組ないかなぁ…圭一君が出てるやつ…」

風間は、アイドルをしている「北条圭一（きたじょう）」が見たくて、テレビを買ったのだった。

「そう言えば…番組表もテレビで見れるって言ってたっけ??」

風間はリモコンを凝視した。そして「あったっ！」と言うと、ボタンを押した。

「おおおー！新聞買わなくていいじゃーん！」

…新聞は、そういうためのものじゃないのだが…。風間は必死に目を凝らしながら、音楽番組を探した。

「えーとえーと…あったっ！始まったばかりだっ！よしよし…」

風間はチャンネルを選んで押した。

若い女性アイドルが歌っている姿が映った。

「うわ。ほんとにそこにいるみたいに綺麗だなぁ…。…この子は好みじゃないけど。」

風間はそんな失礼なことを呟きながら、体育座りをして画面に見入っていた。

その時、ぎくりとした表情をした。

スタジオの後ろの方に、男の影がある。どう見ても人間じゃなかった。

「！！悪魔！」

風間はテレビの画面に近づき目を凝らした。

「…なんの悪魔だ？…火か水か…」

そう呟きながら、目を凝らすがよく見えなかった。

「…わからないな…だけど、ここどこだ？場所がわからなくちゃ、

祓えないしな…」

そう思った時、画面が女性アイドルのアップになった。

「うわっ！！」

風間は驚いて、尻もちをついた。

「あー…キスするかと思った。」

風間はそう言いながら「困ったなぁ」と呟いた。

「祓ってやりたいけど祓えないなんて…。しかし誰についているんだろう…。それがわからないと金取れないしな…」

風間がそう言った時、女性アイドルの歌が終わった。

そして、すぐにカメラがターンし、別のスタジオに移った。

風間は「あっ」と叫んで、画面に顔を近づけた。

「！！圭一さんだっ！！きゃーっ！圭一さーん！」

風間はさっきの悪魔の事を忘れて、黄色い声を出しながら拍手をした。

テレビの中の圭一は、白の開襟シャツに黒の上下のスーツを着ていた。

「あの時と全然雰囲気違うなぁ…かっこいいー…。」

風間はそう言うと、うっとりとしている自分に気がついた。

「いかんいかん。僕、ホモじゃないぞ。」

そう風間は呟くと、きりっと顔を引き締めながら圭一を見た。
しかし圭一が歌い始めた途端、風間はあまりの驚きに動けなくなった。

圭一は「私を泣かせて下さい」というオペラ曲を歌っていた。風間はクラシックは好きだが、オペラはあまり知らない。だが聞いたことのある曲だ…と思った。

「…アイドルじゃないよ！オペラ歌手じゃないか！」

風間は圭一の声に感動しながら、そう呟いた。そしてはっと何かに気がついたように、画面から顔を離した。

「録画っ！録画できるって言ってたような気がするっ！！録画ーっ！！」

風間はそう騒ぎながら、リモコンを端から端まで見渡した。

……

「…なんとか録画できた…」

風間はぜいぜいと息を切らしながら、もう音楽番組の終わったテレビの前で座り込んでいた。

「…圭一君のところ、もう一回見よう！」

風間はそう言うとリモコンを操作し、録画した番組を開いてみた。

圭一が歌っている。

「こんな声…どっから出るんだろう…。なんか気持ちが落ち着く…」

そう思った時、ぎくりとした目で画面を凝視した。

さっき見えていた悪魔が圭一の後ろに突然現れたのである。

「！！圭一さんっ！！」

風間は思わず叫んで、テレビの端を掴んだ。

しかし悪魔の様子がおかしい。圭一の肩の上で、両手をかざしたまま動かないのである。顔は何か苦痛にゆがんで見える。

「…なんだ？…苦しんでるぞ…？」

風間はそう呟きながら、テレビから手を離した。

悪魔は苦しんだ顔のまま、結局姿を消した。

「！！」

風間はしばらく動けなかった。

圭一は何も気づいていないように、歌い続けている。

……

「ああ、圭一君は「清廉な歌声を持つ魂」と呼ばれていてね。歌声で悪魔の動きを封じ込める力を持ってるんだ。」

携帯電話の向こうで、浅野が言った。

「すごいっ！」

風間はそう言って、携帯電話を耳に押し付けた。浅野が続けた。

「すごいだろ？本当のオペラ歌手としてはまだまだそうだけど。」

「えー！？そうでしょうか？僕は心地いい声だと思いますけどね。」

「ん。俺もそう思う。」

「そうか…圭一さんもある意味「悪魔祓い（エクソシスト）」なんだ。」

「ん。そう言うことになるな。」

「あのっあのっ…圭一さんは今度浅野さんの家にいつ来られるんですか？」

「ん？毎日来てるよ。」

「ほんとですかっ！？じゃぁ、今度僕、圭一さんのＣＤ買って持っていくので、サインしてもらいに行っていいですか！？」

興奮している風間の声に、浅野が笑いながら言った。

「もちろん、いつでもおいでよ。今からでも来るかい？圭一君、そろそろ来る頃だから。」

「えっ！いいんですかっ！？」

「ああ、いいよ。ＣＤ買ってきておいで。」

「はいっ！すぐ行きますっ！」

風間はそう言って電話を切ると、ばたばたと慌てながら自室に入った。

……

風間はどきどきしながら、浅野についてリビングに入った。

浅野が申し訳なさそうに言った。

「圭一君、収録が長引いているらしくてさ。まだ来てないんだ。来るのは来ると思うけど、待ってるかい？」

「はい！来られるまで待ちますっ！」

「思いっきりファンになっちゃったみたいだな。」

「はい！」

風間がそう答えると、ソファーに緩やかなウェーブのかかったセミロングヘアーの青年が座っていた。

青年が微笑んで風間に頭を下げた。風間も頭を下げた。

（綺麗な人…）

風間はとっさに思った。思ってから（こらこら。僕はホモじゃない。）と慌てて思い直した。

浅野は、その青年の隣に座って言った。

「この人が、君に占って欲しいそうでね。」

「えっ！？…そっそうですか！」

「占い料ちゃんと払うから、占ってあげてくれる？」

浅野がそう言うと、風間は「自信ないですけど…」と言った。

「なんのなんの！なかなか当たってるよ。ザリアベルも褒めたくらいだからね。」

浅野のその言葉に、青年が驚いて浅野を見た。

「ザリアベルさんが占ってもらったんですか？」

「そう。それも1番にね。」
「面白い人だなぁ…。」
青年はそう言って笑った。そして立ち上がると、風間に手を差し出した。
「バイオリニストの秋本と言います。よろしくお願いします。」
風間は「風間祐士です。」と名乗り、その手を握った。
……
秋本の話も深刻なものだった。今、付き合っている女性がいて、その人と結婚を考えているが、彼女を幸せにする自信がないというのである。
「俺って、電話とかメールとかマメじゃないし…俺が幸せにしてるつもりでも、向こうが幸せに感じてなかったら意味がないし…。こう…女の子を本当に幸せにしてあげるっていうことが、どうすればいいのかわからないんだ。」
「……」
その秋本の言葉に、浅野も風間も黙りこんでしまっている。
正直「そんなこと言われても…」という心境だ。
幸せの基準は人それぞれだ。この秋本という人は、その恋人の幸せの基準が何にあるのか知りたいのだろう。…だが、それを占えっていうのも酷な話である。
風間は困ったように黙り込んでいたが、やがて顔を上げて言った。

「じゃぁ、こうしましょう。とりあえずは、今、秋本さんの彼女がどういう状況なのか見てみましょうか？」
「どういう状況？」
「例えば、今幸せを感じているか感じていないかとか…」
「ええっ！？…怖いっ！！」
秋本が両頬に手を当てて言った。浅野が思わずその秋本の仕草に笑っている。
「そっそれで幸せじゃなかったらどうしよう！」
「秋本さん！大丈夫だって！」
浅野が必死に秋本を抑えている。
……
風間は、秋本にシャッフルしてもらった後、カードをまとめて「向きはどちらにしますか？」と言った。秋本は「そのままで」と言った。風間はうなずいて、上から7枚目のカードをテーブルに置いた。そして「ナインカードスプレッド」と呼ばれる、人の心を読むのに最適なスプレッドを展開した。
これはその名の通り、9枚のカードで占う。最初の3枚は「表面的な意識」を現し、次の3枚は「中間的な意識」を表す。そして、最後の3枚で「潜在意識」を占う。つまり1枚目から9枚目に行くにつれ、相手の深層心理へと近づいていくというわけである。
風間は残りのカードをまとめながら、スプレッドしたカードを見渡した。
1聖杯7（正）
2太陽（逆）

３金貨４（逆）
４金貨８（正）
５女教皇（正）
６月（逆）
７世界（逆）
８剣ペイジ（正）
９剣キング（正）

「うーん…彼女は、夢見る夢子ちゃんではなく、案外冷静な女性なんですねぇ。」

その風間の言葉に秋本は「えっ！？」と声を上げた。
浅野も驚いている。秋本の彼女「荒川真美」はとても可愛らしい少女のようなイメージなので、今の風間の言葉は意外だったようだ。
風間が秋本に向いて言った。

「…というより…秋本さんの彼女って…同じ仕事をしてらっしゃる方ですか？」
「えっ！？…そっそう。」

真美はまだ１９歳だが、プロダクションの中でも「歌姫」と言われるほどの実力派歌手である。

「あー…それでか…」

風間の呟きに、秋本が身を乗り出した。

「それでって？」
「うーん、彼女はあなたをビジネスパートナーのように思っておられる意識が強いですね。」

「！！」

秋本は目を見開いて体を上げた。風間はカードを眺めながら言った。

「あなたのことをとても尊敬なさっているんですが、それは恋人…というより、仕事上で尊敬している…というような感じです。」

「……」

秋本が固まっている。浅野がそんな秋本の顔を不安そうに見た。

「秋本さん自身が、仕事を中心にされているからかな…。男性が陥ってしまうところなんですが、特に秋本さんは職人気質なところがあるんじゃないでしょうか。」

「！！」

秋本が驚いて目を見開いた。浅野が「確かにそうかも…」と隣で呟いている。

「今、プラトニックな関係を貫いておられるようですが…ちょっと彼女はそれを物足りなく思ってらっしゃるかな。…いや、体の関係を求めているという意味じゃないですよ！先に言っておきますけどっ！！」

風間が最後の言葉に力を入れて言った。

秋本が真っ赤になっている。何故か風間も真っ赤になって言った。

「僕が言っているのは…プライベートで会う時間が少ないことを、彼女が不満に思ってるということです。」

「…そうかも…」

秋本が考えるように呟いた。

「上辺の感情では、彼女自身あなたとの関係というか生活というんでしょうか。…をいろいろと夢見て楽しい気持ちでいらっしゃるんですが、意識が深まる…つまり上辺の意識から、深い…潜在意識に近づくにつれ、夢見る夢子ちゃんが、現実的な女性…つまり冷静に恋の行方を窺っているという感じです。ちょっとお2人の関係が、マンネリ化しているところもありますね。」

秋本がショックを受けたようにうなだれた。浅野がその秋本の背中を、なだめるように叩いている。

「でも…一時期、危ない時がありましたよね？」

「！？」

秋本が驚いて顔を上げた。浅野も驚いて風間を見ている。

「その時に何らかの誤解が生じたと思うんですが、そのことは完全に解消しています。それ以上に秋本さんに対する愛情が深まっているのが見える…。それだけに、秋本さんはもうちょっと彼女とプライベートな時間を持つべきですよ。じゃないと、結婚はできても、単なるビジネスパートナーに落ち着いちゃう。」

「…そうか…」

秋本は小さくうなずいている。何か納得するものがあるようだった。

「…この占いで見えたのはここまでです。」

風間がそう言って、顔を上げた。すると秋本が手を差し出した。

「ありがとう。とても納得のいく占いだったよ。」
「そうですか！良かったです！」
風間はほっとして、その秋本の手を握った。
その時、呼び鈴が鳴った。
「お！圭一君、帰って来たな！」
浅野がそう言って、慌てて立ち上がった。
……
（うわー…なんて、贅沢なんだー…）
北条圭一（きたじょう）が、風間と浅野の前で歌っている。そしてその圭一の横で、秋本がバイオリンで伴奏していた。
風間は占い料はいらないから、秋本の演奏を聞かせてほしいとねだったのである。秋本は「そんなのでいいのっ！？」と喜んでくれた。すると圭一が「じゃぁ僕も歌います」と言い、この贅沢な空間が生まれたのだった。
圭一と秋本は「ライトオペラ」というユニット名で活動しているのだという。
その「ライトオペラ」のデビュー曲が、今演奏しているバッハの「主よ、人の望みの喜びよ」なのだそうだ。もちろん風間も知っている讃美歌だ。
風間は浅野の横で、圭一が入れてくれた紅茶「アールグレイ」を飲みながら、贅沢な空間に浸っていた。
（そりゃ、こんな綺麗な歌声を聞いたら、悪魔が固まるはずだ。）

風間はそう思った。

（終）

……

第7カード「世界」逆位置の意味

「惰性」「マンネリ」「破局」を表す。恋占いでこれが出たら、何か建設的なデートを心がけるようにした方がよい。

正位置は「達成」「幸福感」を表す。

## 恋を占う（後書き）

さて最後に、新人占い師「風間祐士」が今回の占いをご説明いたしましょう！

今回は恋占いでしたね。僕が最も苦手としているものです。恋する人って、思い入れが強いので正直悪い結果が出たらどうしようと、毎回毎回はらはらしちゃいます。

だから、結果を出す占いよりも、こういった「相手の気持ちを探る（？）」占いでごまかすことが多々あります。（おいおい）

そのごまかし（おい）に適したのがこの「ナインカードスプレッド」です。もちろん恋占いに限りません。嫌いな上司の気持ちとか、周りの目が気になる時とかにこのスプレッドを使うといいでしょう。

また内容がシンプルなのがいいですね。表面意識、中間意識、潜在意識と深まる気持ちをカードから汲み取るだけでいいわけですから。

ただ…秋本さんの当初の質問「彼女を幸せにするためにはどうすればいいか」…なんて…男にとって永遠の課題じゃないでしょうかねぇ…。秋本さんに「今度こそ占ってくれ！」と言われたらどうしようかと、今も戦々恐々としています（＾＾；）

では、また次のお話でお会いしましょう！（＾＾）

## 文車妖妃（ふぐるまようき）（戦）

「祐士」

師の「礼徳」が、風間祐士を見下ろして優しく微笑んだ。師と言っても礼徳はまだ２８歳だ。長いストレートの白髪を緩めに麻の紐で束ね、常に静かに微笑んでいる。
まだ弟子になって間もない１７歳の風間は、床に四つん這いになり、涙で頬を濡らしながら唇を噛みしめている。風間は今、過去の苦しみを祓う修行に耐えている。

「祓うは、消すことに非(あら)ず。救うこと也。」

風間は嗚咽を漏らしながら、黙って礼徳を睨みつけるようにして見つめた。
礼徳は優しく言った。

「苦しみを与えたものを赦さない限り、お前に救いは訪れないぞ。」
「赦すなんてできません！」

風間はそう言いながら、再び涙が溢れだすのを抑えきれなくなった。

「…親、消されて…誰が赦せるって言うんですか！！」
「祐士」
「僕が師匠の所に来たのは、親の仇を討つためです！赦すためじゃない！！」
「祐士、聞け。」

礼徳は風間の傍にしゃがんだ。

「憎しみだけで、悪魔は祓えん。逆に悪魔を増長させることになってしまう。」
「……」
「悪魔が恐れるのは、赦しの心を持つ者だ。それはわかるか？」
「…でも…できない…」
風間は泣きながら言った。礼徳は悲しげな顔になった。
「できなくても、わかるか？」
「…わかります。」
「わかれば良い。できなくても。…お前の時間はまだまだある。」
礼徳はそう言って、風間の背をとんとんと優しく叩いた。
「今日はもう終わろう。茜のご飯食べに行こう。今日はお前の好きな…」
……
風間は、急に目を覚ました。そしてしばらくぼんやりと天井を見た。
「師匠…」
風間はいつの間にか濡れていた頬を手で拭った。
「奥さんのご飯、なんだったんだろう？…あの後何食べたっけな…。」
そこかいっ！…と、浅野がいたら突っ込んでいそうだが…。

風間は体を起こした。そして目をこすった。

「祓うは消すことに非ず。救うこと也。」

風間はそう呟いて「うん」とうなずいた。

「そして赦すこと也。」

風間はそう確かめるように呟いた。

……

風間はスクランブル交差点を歩いていた。日曜日でもないのに、秋葉原はいつも人が多い。

何度も人にぶつかりそうになりながら、風間は人の波をぬって歩いている。

「田舎もんに、人ごみは辛いなー…」

交差点を過ぎてから、風間は思わずそう呟いた。

「あー…田舎に帰りたい…」

風間はそう言い、空を見上げた。そしてぎくりとしたように顔を強張らせた。

真紅の生地に大きな椿が散りばめられた着物を着た女性が、両手を広げて宙に浮いている。

着物は風になびき、長い黒髪が散るように広がっていた。

（悪魔というより、鬼女（きじょ）…文車妖妃（ふぐるまようき）か…）

風間はそう思うと、頭を掻いた。
文車妖妃とは、文章の妖怪である。特に恋文などに込められた女性の情念が形になって現れることが多い。

（質（たち）悪いんだー…この手の悪魔というか、妖怪というか…。）

風間はそう思うと、妖妃に背を向けて歩き出した。

「こらーっ！」

その声に、風間は肩をすくめて立ち止まった。

「無視をするな、無視をっ！！」

妖妃が叫んでいる。もちろん一般人には聞こえていない。
風間がため息をつくと、妖妃は風間の前にひらりと降りた。
珍しくかなり美しい妖妃だ。だが若くはない。

風間はさり気なく路地に入りこんだ。
妖妃は、ひらりひらりと嬉しそうに、風間の後をつけながら言った。

「人が美しく登場したというのに…」
「俺、年増には興味ないんだよ。」
「年増いうな！」
「じゃあなんていうんだよ。」
「熟女」
「……」

風間はあきれたようなため息をついた。そして路地の奥の方に入ってから、風間は振り返って言った。

「で、なんの用だよ。祓って欲しいのか？」

「やだっ！」

妖妃が首を振った。風間は苦笑しながら言った。

「じゃ、なんだよ！」

「助けてほしいんだよ。」

「何を。」

「恋の手助け。」

「やだっ！」

風間が言い返した。

「そういうの俺、関わりたくないんだよ。お前が絡んでるってことは、かなりドロドロな状態だろうしな。」

「そこをなんとか。」

風間はため息をついて言った。

「じゃぁ、占い部屋まで来い。その文の主のこと占ってやるから。」

「でも金ないもん。」

「お前から取らないよ。ついて来い。」

「やった！」

妖妃はひらりと風間の肩に乗った。風間は苦笑しながら、部屋に向かって歩き出した。

……

「うわぁ…ドロドロもドロドロだなこりゃ…」

風間は妖妃から差し出された巻物を読みながら言った。その巻物には、ある女性の日記が転記されている。

「なんとかしてやりたくてさ。」

妖妃がため息をつきながら言った。

「しかし…相手の男はもう…ええと、いつだっけ？…ああ…今週の土曜日に結婚式なんだろう？それをぶち壊すのは至難の業だぞ。」

「だから…手を貸してくれって…」

「絶対にやだ！」

風間は巻物を妖妃に返しながら言った。

「とりあえずは、その男と文の主の状況を見てやる。」

「うん！」

妖妃は目を輝かせて、風間がカットしているカードを見ている。風間はまとめたカードをさっと横に広げて「お前が混ぜろ」と言った。妖妃は不思議そうな目で風間を見た。

「こう…左手で左回りにカードを混ぜるんだ。その文の主のことを思いながら、よく混ざるようにしろよ。」

「うん！」

妖妃は嬉しそうに左手を出すと、カードをシャッフルし始めた。

（心根は優しい奴なんだけどなぁ…。）

風間はその妖妃を見つめながら思った。

（キレた時がやばいんだよな…。）

妖妃は「終わった！」と言って手を離した。

風間はカードをまとめると「どっちの向きにする？」と言った。

「ひっくり返して！」

「ん。」

風間はカードを逆さにして、スプレッドし始めた。そして上から7枚目のカードをテーブルに置いた。

7枚のカードを使う「ヘキサグラムスプレッド」である。

1（過去）剣キング　逆
2（現在）棒6　逆
3（近い将来）聖杯4　正
4（対応策）聖杯6　正
5（周囲）世界　正
6（願望）聖杯クイーン　正
7（未来）金貨1　逆

「あきらめろ。」

スプレッドを見た途端、風間がそう言った。

「ええーーっ！？」

妖妃は机にしがみつくようにして叫んだ。風間は小さく首を振ってから言った。

「お前の主人…結構エゴが強い奴で、思い込みが激しすぎる。どうも向こうの事はどうでもいいから、自分が幸せになりたいって奴だ。結果から言うと、この最後のカードが逆になってるだろ？」

「…わちには逆じゃないよ。」

「俺から逆なんだよ！要するにな、今からじたばたしたって「無駄だ」という意味のカードなんだ。」

「……」

もちろん、本人が占いに来た場合はこんな言い方はしない。だが「これから新しい出会いがありますよ。」とかなんとか言って、諦めさせるしかないような結果であった。

「うーん…わかった…」

妖妃のその言葉に、風間は思わず「えっ？」と言った。妖妃がこんなにしおらしくなるなんてことはない。

「わかったよ。わちもあきらめる。」

「お…おお、そうしろ。今度はラブラブの文見つけろよ。」

「うん。ありがとな。」

「いや…」

妖妃は寂しそうに肩を落として、ひらひらと浮かびながら部屋を出て行った。

風間は何か胸につかえるものがあったが、それが何なのかその時はわからなかった。

……

翌日ー

「へえー！結婚式で歌うんですか！」

風間は、浅野俊介のマンションでそう声を上げた。北条圭一がにこにことして「ええ」と答えた。ソファーに隣同士に座って、圭一の淹れたコーヒーを飲んでいる。向かいのソファーには、浅野が2人の話を聞きながらコーヒーを飲んでいた。

風間は（結婚式の話が多いな…）と思いながら、圭一に尋ねた。

「圭一さんのお知り合いですか？」

「いえ。仕事ですよ。」

「えっ！？…圭一さんみたいな売れっ子アイドルが、そんなことするんですか！？」

風間が驚いてそう言うと、浅野が「うちの事務所はそういうのが売りだからな」と笑いながら言った。

「売り？」

「ええ。浅野さんだって、小さなスーパーでも商店街でも、依頼があればマジックショーに行きますよ。」

「へえー！」

圭一のその言葉に、風間が驚いて声を上げた。浅野がコーヒーをひと口飲んでから言った。

「俺はどっちかっていうと、そういう方が好きだけどな。目の真ん

前でおばちゃんとか子どもたちが驚いてくれたりすると、すごく嬉しくなる。」
「僕は苦手なんですよ…。」
圭一はそう言って苦笑した。風間が驚いた目で圭一を見た。
「苦手？」
「ええ。だって本当に目の前にお客様がいるし、直前に発声練習もできないから、ぶっつけ本番のようなものなんですよ。声が出なかったらどうしようっていつもドキドキしながら歌っています。」
「なるほど…。アイドルって華やかなように見えて、いろいろと大変なんですね。」
風間がそう言うと、圭一が苦笑するようにして笑った。風間は何気なく尋ねた。
「結婚式はいつなんですか？」
「今度の土曜日です。」
「えっ！？」
風間は思わず声を上げた。文車妖妃の話を思い出したのだ。圭一が不思議そうな表情をした。
「？どうしたんですか？」
「あっいえ。僕も聞きに行きたいなって思ってたんですけど…無理みたい。」
風間のその言葉に、圭一が笑って言った。
「じゃぁ、練習もありますし、今、歌いましょうか？」

「えっ！？うわっ！やった！」

風間がそう飛び上がらんばかりに喜ぶと、圭一は照れくさそうに笑いながら立ち上がった。

「いいねぇ。美味しいコーヒーを飲みながら、圭一君の歌…最高だ。」

浅野が嬉しそうに言った。風間もうなずいた。

（…まさか…同じ結婚式じゃないだろうな…）

風間は、かばんからCDを取り出す圭一を見ながら思った。

……

夜―

風間は自宅で、大アルカナのカードをスプレッドしていた。文車妖妃の事が気になって仕方がないのである。何か悪い予感がする。

「東南東…おいおいー…」

風間は12番目に置いた「悪魔」のカードを見て、眉をしかめた。

「ホロスコープスプレッド」で、文車妖妃の言っていた、結婚式が行われる会場の方角を占っていたのだ。

「…圭一君の言ってたホテルだ…恐らく。」

風間は、ほぼ間違いないと思った。

「あいつが動くかどうか…」

そう思いながら、最後のカードを中央に置いた。

「！！」

風間はそのカードを見て目を見開いた。

「力（ストレングス）…逆位置（リバース）…！」

風間は（やっぱりやる気だ…）と唇を噛んだ。

……

土曜日ー

圭一は、ホテルの結婚式場のドアの前にいた。そして緊張を逃すために、ふーっと息を吐いた。傍にいるホテルの従業員が「大丈夫ですか？」と言った。

「ありがとうございます。なかなか慣れなくて」

圭一がそういうと、従業員が笑った。その時、漏れていた司会者の声がひときわ大きくなった。

「ではここでサプライズゲストをお呼びしましょう。新郎様のご友人からのプレゼントです。どうぞ！」

従業員がドアを開いて、中を手で指した。
圭一が中へ入って一礼すると、女性達の悲鳴と、どよめきが起こった。
従業員はそっとドアを閉じた。
……
独りの女性が緊張気味に、エレベーターから出てきた。正装している。
そして、圭一が入って行った式場の前まで来た。従業員が慌てて、その女性に駆け寄った。
「こちらのゲストの方でらっしゃいますか？」
「はい。遅れちゃって…。」
「すいません。お名前を。」
「石田です。」
「石田様ですね。お席を確認します。お待ちいただけますか？」
従業員がそう言ったとたん、女性は人間とは思えないような力で従業員を突き飛ばした。従業員は壁に頭を打ちつけ倒れた。
女性の目が赤く光り、ドアを開けようとした。
「文車妖妃！」
風間が、隠れていた階段ホールから飛び出して叫んだ。
女性は振り返り、風間に手をかざした。風間は飛ばされ、床に打ちつけられた。
すると、中から圭一の歌が響き渡った。女性は固まったように動かなくなった。
風間は痛みをこらえながら身体を起こし、両腕を伸ばした。

「祓い陣！」

風間はそのまま両手を広げた。

「やめて…」

陣が広がるのを見て、女性が声を震わせながら言った。

「やめて欲しいなら、その人を解放しろ！」

風間が叫んだ。圭一の歌が終わるまでに、妖妃をなんとかしなければならない。

「いいか！今彼女にさせようとしていることは、彼女に一生恥をかかせ、後悔させることだ！そんなことをさせたところで、相手の気持ちは揺らがない！祓って欲しくなければ、彼女を解放しろ！」

「いやだ！この人は毎晩毎晩泣いていたんだもん！二股かけられて捨てられて、それでも好きで、泣いてたんだもん！」

「だけどこのやり方は間違ってる！人の幸せを奪うと、いつか自分になんらかの不幸が襲うんだ！つまりお前が今やらせようとしていることは、その人を不幸にするのと同じことになる！」

「……」

「とにかく彼女から離れろ！でないと…」

風間は額に人差し指を当てて言った。

「消滅の渦！」

妖妃は息を呑んだ。

「わちを消すのか？」
「どうするんだ！」
風間が叫んだ。圭一の歌が最後のサビに入っている。
「どうするんだ！妖妃！」
女性が突然その場に倒れ、妖妃が姿を現した。
風間がほっとしたように、額から人差し指を離した。
圭一の歌が終わった。拍手の音がしている。
すると妖妃が、目を吊り上がらせ叫んだ。
「奴を殺す！」
「！！」
風間が再び額に指を当てたが、妖妃はドアを抜けて中へ入った。
「しまった！！」
中から悲鳴が上がった。風間はドアを引き、中へ入った。
新郎が椅子に座ったまま、がくりと首を後ろに垂れていた。
その首を妖妃が両手で絞めている姿が見えた。だが、その妖妃の姿はもちろん風間にしか見えていない。
皆、急に新郎が首を後ろに垂れ、体を痙攣させたことに驚いている。
「消滅の渦！」

風間が、再び額に人差し指を当てて叫んだ。陣は渦を巻きながら、妖妃の上に移動した。
圭一だけが風間に驚いた顔を向けた。
「礼徳の名の元に祓え！」
妖妃は悲鳴とともに、渦に吸い込まれた。
……
圭一は気を失っている新郎の頭を起こし、背中から抱きかかえるようにして胴に両腕を回した。そして、気合いの声とともに新郎の胴を締めた。
「！」
新郎が目を覚ました。目が血走っている。
「大丈夫ですか？」
圭一が声をかけた。側にはホテルの従業員達も心配そうに見ている。
圭一はふとドアの方を見た。ドアは閉じられ風間の姿もない。
「あいつが…あいつが…俺の首締めようと…」
そううわごとのように呟く新郎を、新婦が不安そうに見ている。
「夢を見られたんです。大丈夫ですよ。」
圭一はそう言ったが、新郎の首には、縄で締められたような痕がく

っきりと残っていた。

……

翌日ー

「祓うは消すことに非ず。救うこと也…」

風間はそう呟きながら、歩行者天国で賑わうスクランブル交差点を歩いていた。

その肩には、文車妖妃が嬉しそうに乗っている。

「中途半端な陣ですましてくれるなんて、わちのこと好きなんだろ？風間」

妖妃のその言葉に、風間は苦笑しながら答えた。

「年増は嫌いだって。」

「年増じゃなくて熟女！」

「年増は年増」

「呪い殺されたい？」

「若い子にならね。」

「〜〜〜〜〜」

実は、風間の「消滅」の陣は完成していなかった。風間はそれをわかっていて妖妃に使った。脅しの意味もあったが、妖妃は結局ホテルの屋上に吹き飛ばされただけですんだのだ。

妖妃は急に思い出したように言った。

「あの時…人を不幸にしたら、自分に返ってくるって言ってたけど

ほんとか？」

風間は頷いて言った。

「『知って起こした災いは、返って我が身に降りかかる。』…師匠の教えだ。」

「じゃあ、あの男にも不幸は返るのか？」

「確かに二股かけて振ったとなれば、相手を傷つけることをわかってたんだから、知って起こしたことになるな。…返るんじゃないか？」

「いつ？」

「さあねぇ…。本人が忘れた頃かもしれないし、すぐかもしれないし…」

「ふーん。」

妖妃は「まあいいか」と明るく言った。風間があきれたように言った。

「よくないだろう。従業員が気を失っているうちに、お前の主をなんとかエレベーターに乗せて逃がしたけど、結局、暴行罪で警察に呼び出されたって聞いたぞ。どうすんだよ。」

「示談で済んだってさ。なんか相手の男が従業員に、代わりに慰謝料払ったとかで。」

「へえー。」

ちゃんと責任とったじゃないか…と風間は思った。それなら不幸が返ることはないだろうと思ったが、妖妃には言わなかった。

風間は、妖妃を見上げて言った。

「で、いつまで人の肩に乗ってるんだよ。」

「いつまでも。」
「ばーか。」
風間が笑いながら言い、前を向いた。
「俺、これから占いの仕事なの！ほら、どいたどいた！」
「見てたらだめ？」
「だめっ！向こうに悪魔がついてたらどうするんだよ！ややこしくなるだろうが！」
「…ちぇっ…わかったよ。」
妖妃はそうつまらなそうに言うと、姿を消した。
風間は苦笑しながら肩を回すと、鼻歌を歌いながら占い部屋に向かって歩いた。
（終）
……
カード「力」逆位置の意味
「力の乱用」「空回り」
女性がライオンを手なずけている絵柄である。
正位置の場合は、「勇気」「成功」「解決」となる。

## 文車妖妃（ふぐるまようき）（戦）（後書き）

では、新人占い師「風間祐士」が、今回の占いについてご説明をいたしましょう！（いらない人は読み飛ばしてね。）

「ヘキサグラムスプレッド」と「ホロスコープスプレッド」が出ましたが、今回は「ホロスコープスプレッド」の方のお話をします。

「ホロスコープスプレッド」は、方角を占うのに適した占いです。例えば、旅行にはどこに行くのがいいのかとか、引越し先はどこがいいかなどに使えます。方角を占うだけなので、大アルカナ２２枚だけで大丈夫です。

まず、時計でいう「９時」の位置にシャッフルしたカードの１枚目を置き、そのまま時計とは反対周りに円を描くように１２枚カードを並べ、最後の１３枚目を中央に置きます。

１枚目は「東」となり、２枚目は「東北東」３枚目が「北北東」４枚目（６時の位置）が「北」となり、その順番で、３時の位置（７枚目）が「西」、１２時の位置（１０枚目）が「南」となります。

忘れてはならないのが、スプレッドする前に回答のカードを決めておかねばなりません。僕は「悪魔」を選びました。その「悪魔」のカードが１２番目（時計でいう１０時）に出たので、「東南東」だとなったわけです。

もし出なかった場合は、出るまでやり直しができます。そして、最後の１３枚目のカードを中央に置くのですが、これは、回答カードが出た方角で、占ったことがどうなるかという結果のカードとなります。今回は「力」の逆位置でしたね。「力の乱用」…ということは、文車妖妃が何かをしでかす…という意味を表した訳です。

…さて、今回の文車妖妃のお話…ぞっとした男性の方、いらっしゃるんじゃないでしょうか？（笑）知って女性を泣かすような事をしていませんか？例えば浮気とか不倫とか…。もし心当たりがあるようでしたら「文車妖妃」があなたの後ろにいるかもしれませんよ。

どうかご用心を（にやり）。
では、また次回にお会いしましょう！

## 安楽の泉（戦）

「ほら！マミちゃん！がんばって立って！」

少し遠く先で、遠足姿の小さな女の子が座り込んで泣いている。転んだようだ。その横で、若い女性がその女の子を励ましていた。風間はそれを見て、ふと立ち止まった。

（幼稚園か…いや、もっと小さいから保育園の遠足かな…）

周りの子どもたちも、心配そうにその女の子を見ている。

（この子は…急に親から離されて、どんなに心細いだろう…）

風間はそう思い、女の子が泣く姿をぼんやり見ていた。女の子は泣きじゃくりながら、肩からさげている水筒を手に持ち見つめていた。まるでそれに助けを求めているように見える。

恐らく、その水筒は母親と一緒に買ったものなのだろう。

周りの子どもたちも、保母らしい若い女性も「がんばれ」と声を掛けている。

だが、女の子は泣きじゃくったまま動かなかった。

（あの子にとっては…母親から離れていることだけで、いっぱいいっぱいなんだよな…）

これ以上頑張れないんだろうと、風間は思った。そして、また歩き出した。

「あ、すいません…。」

保母が、風間に道を塞いでいることに謝った。風間は「いえ」と言って、座り込んでいる女の子に手を伸ばし「ほら」と言った。子どもたちと保母が驚いた目で風間を見た。

「ほら、手を出して掴め。」

風間はそう言うと、差し出した手の指を動かした。女の子は水筒から目を上げ風間を見ると、口を開けたままそっと手を乗せた。風間はその手を掴むと「ほらよっと。」という声と共に、腕を曲げ女の子を立ち上がらせた。

「遠足だろ？ママの作った弁当早く食べなきゃ。泣いてたらもったいないぞ。」

風間はそう言うと、女の子に手を振って歩き出した。

「あの…すいませんでした！」

保母が風間の背中に言った。風間は振り返りながら「こちらこそ、よけいなことを」と言い、また前を向いて歩いた。女の子の明るい声がした。

「おじちゃん、ばいばーい！」

「お兄ちゃん」のつもりの風間はつんのめった。

……

風間は、占い部屋でぼんやりとしていた。

泣いている子どもを見ると、つい自分の幼いころを思い出してしまう。

風間は、5歳の時に両親が行方不明になった。
それも同じ部屋にいたはずの親がいなくなったのである。
独り残された風間が発見されたのは、両親がいなくなった2時間後のことだった。
「子どもが窓を叩いて、泣いている。」と警察に通報があり、風間は無事警察に保護された。
警察はまだ5歳の風間に「パパは？」「ママは？」と何度も聞いたが、幼い風間にわかるわけがない。
ただ覚えているのは、両親の悲鳴と大きな黒い影だった。両親はその黒い影に包み込まれ消えた。消える直前に、母親が自分に伸ばしている手が見えた。
…後は、テレビの音だけが残っていた。子ども向けの番組で歌を歌っていた。
その後、風間は施設で育った。待っても待っても親は迎えに来てくれなかった。
風間は毎日のように泣いた。…だが1カ月程経ってから急に泣かなくなり、全く口を利かなくなった。笑いもせず泣きもせず、先生達を困らせる日々が続いた…。

突然、ドアをノックする音がした。
風間は、はっとして「どうぞ！」と答えた。
お客（？）だと思ったのだが、何か遠慮がちな声がした。

「風間さん？今、いいですか？」

天使「アルシェ」の主人であり、アイドルの「北条圭一（きたじょう）」の声だった。風間は驚いて立ち上がり「はい！」と言いながら、ドアを開い

た。

「圭一さん！」

圭一が紙袋を下げて、にこにことして立っていた。
ビルの下から、キャーキャーという声がしている。

「…ちょっと騒がせちゃったからすぐに帰るけど…これ…」

圭一が紙袋を風間に差し出した。風間は何か分からないまま、受け取った。

「？ありがとう…ございます。」
「お昼食べられる前に持ってこようと思って…お弁当です。」
「えっ！？僕に？わざわざ？」
「いつもコンビニ弁当とかファーストフードだと聞いたので、飽きる頃じゃないかなぁって思って…」
「もっもしかして、圭一さんの手作りですかっ！？」

漫画なら、風間の目がハートになっているだろう。圭一が照れくさそうに「ええ」と言った。

「お口に合うといいけど…」
「合います！食べなくてもわかります！わー…ありがとう！」

喜びながら紙袋の中を覗く風間に、圭一は騒ぐ声を気にしながら言った。

「浅野さんがいたら、テレポートで送ってもらえたんだけど…今日はザリアベルさんと約束があるとおっしゃって、姿を現してくれな

いんですよ。」
「え？そうなんですか？」
「ええ。何かちょっと深刻な顔をしていたので不安なんですが…」
風間は眉をしかめた。圭一が、後ろを見ながら言った。
「すいません…ビルの人に迷惑をかけるから…帰ります。…また浅野さんのお家にいらして下さい。」
「あっはい！ありがとうございます！わざわざすいません！」
「いえ。じゃ。」
圭一は階段を下りて行った。風間は見えなくなるまで見送るとドアを閉じた。…一層大きな悲鳴のような声が響いた。
……
「うまいー…」
鳥の照り焼きを食べながら、風間は思わず言った。
そして、泣いていた女の子の事を思い出した。
（…あの子も、今頃お母さんの作ったお弁当食べてるのかなぁ…）
そう思いながら、行儀悪くも弁当の上で箸を迷わせた。
「菜の花！」
そう言うと、風間は菜の花のおひたしを口に入れた。
「あー…うみゃーだよー。圭一さんってオールマイティーなんだな

あ…。」

口をもぐもぐさせながら、風間は言った。そしてふと思い出して呟いた。

「…浅野さんとザリアベルさん…何かあったのかな…」

そしてまた弁当に向くと箸を迷わせ「卵焼き！」と言った。

……

天使アルシェ（浅野俊介）と悪魔ザリアベルは、浅野のマンションのソファーで向かい合わせに座っていた。だが、人には見えないように姿を隠したままである。

アルシェが腕を組んで眉をしかめ、うつむき加減でいる。ザリアベルは考え込むように宙を見ていた。

「礼徳さんは消滅させられたってことでしょうか…」

アルシェがやっと口を開いた。ザリアベルは口をきっと結んで黙っていたが、小さくうなずいた。

「としか考えられないだろう。…天界にも魔界にもいないということは…。」

「奥さんと一緒に、どこかに幽閉されているという可能性は？」

「ないでもないだろうが…。俺が見つけられないということは、俺よりも上の地位の悪魔が関わってるということになる。」

「どっちにしても…やっかいってわけだ。」

「ん…。」

アルシェは目に手を当てて言った。

「…風間君に危険が及ぶ前になんとかしてやりたいけど…礼徳さんがどうなったかわからない上に、相手の悪魔が誰かわからないとなると、どうしようも…」

「…風間は、なんとしても守らなくては…。」

「ザリアベル…。ザリアベルは、どうして礼徳さんと知り合ったんです？前に教えの言葉まで言ってましたけど…」

「知り合ったのは、今の風間くらい…奴が修行明けの頃だったんだ。俺はあの頃から人間界をうろうろする癖があってな。そこで出くわした。」

「なんだ。もっと劇的な出会いかと思ったのに。」

アルシェの言葉にザリアベルが苦笑するように笑いながら言った。

「悪魔祓いと悪魔が出会うってのは、そんなもんだ。」

「それで戦ったわけですか。」

「いや…。もしあの頃奴と戦ってたら…俺の方がやられてただろうな。」

「！？…え？礼徳さん、修行明けだったんでしょう？」

「ん。それでも奴は、出会った瞬間にぞっとするようなオーラがあった。向こうも俺が悪魔だとわかって、陣を出した。…だが、すぐに消したんだ。」

「！？」

「…そして、俺にひざまずいた…。」

「えっ！？礼徳さんがっ！？」

「ああ…俺も訳がわからず、その場で動けなくなってしまったが…。その時、奴が言ったのが、あの「教え」だ。」

「！！」

ザリアベルは遠い目をしながら言った。

「魔を魔と視ず、人を人と視ず…悲哀辛苦を祓い除けば、みな無垢な魂に還りゆく也…」

アルシェは驚いた目でザリアベルを見た。

「奴は俺の無垢な魂を見たってわけだ。結局、奴とはそれきりだが、俺はずっと忘れられなくてな…。そして3年前、奴が消えたと伝え聞いた時、あの時も魔界を探し回ったんだ。だが奴のオーラすら感じなかった。」

「風間君のことは？」

「奴の弟子は、皆長続きしないんだ。奴の優しい修行のやり方に、物足りなさを感じで嫌気がさすんだそうだ。だが、あいつの修行の基本は「優しさ」だ。無意味な祓いはせず、力だけで相手を消す事を禁じている。…風間のことは奴が消えた後に知った。最後の弟子だと言われているが、修行明けまで奴の教えを守り続けたのは、風間が最初で最後の弟子と言うことになる。…師が消えれば、普通は別の師を探す。だが、風間は最後まで、奴の…礼徳の教えを守り、誰も継がなかった陣を守り続けた…。」

「…じゃあ、ザリアベルが風間君に占ってもらったのは…本当は占いの結果を知りたかったんじゃなくて…」

アルシェの言葉にザリアベルは頷いた。

「知りたかったのは…風間の優しさだ。礼徳の優しさを継いでいるかどうか見たかった。」

「…彼は継いでた訳だ。」

ザリアベルは頷いた。

「その上、あの馬鹿…」

アルシェが驚いて目を見開いた。ザリアベルらしくない言葉だと思った。

「あの馬鹿？」

「風間の馬鹿が、祓いに礼徳の名を使いやがって…。」

アルシェはクスッと笑った。

「確かに危険ですね。」

「礼徳が勝てない相手に、今の風間が勝てる訳ないだろう！…何を考えてるんだ…」

何か怒っているザリアベルに、アルシェが微笑みながら言った。

「風間君は、我々で出来る限り守ってやりましょう。…そして、彼がいつか師の仇を討つ時には、我々も邪魔しない程度に助けてやりましょう。」

ザリアベルは頷いた。アルシェが、再び眉をしかめて言った。

「それから…風間君の親のことですが…」

「…ん…」

「ザリアベルはどう思います？どうして、悪魔祓い師でもなかった風間君の親が消されたのか…」

ザリアベルはしばらく黙りこんだのちに言った。

「俺にもわからん…。何度も風間の記憶を覗いたが…あの黒い影の正体が掴めない。本当に悪魔かどうかも、わからん。」
「悪魔以外で…となると…？」
ザリアベルは首を振った。
「わからん…」
アルシェはザリアベルがここまで悩む姿を初めて見た。
（思っているより…風間君の仇討ちは、長引きそうだな…）
アルシェはそう思った。
……
自宅に帰った風間は、鼻歌を歌いながら弁当箱を洗っていた。
「圭一さんに、何かお礼がしたいなぁ…何しよっかなー。」
風間はそう呟きながら、水を止めた。
そして布巾を取り、弁当箱を拭きはじめた。
その時、黒い霧が風間の後ろに出現した。風間がはっとして振り返った時には、霧に飲み込まれていた。
…後には、弁当箱と布巾が床に散らばっていた。
……
風間は体を横にした状態で黒い霧に包まれ、暗いトンネルのような

所を移動していた。逆らう気力も奪われている。

（…父さん達も、同じ道を通った？）

風間は誰ともなしに、語りかけた。

（師匠も通った？茜さんも？）

誰も答えない。ただ高速で移動している。気分は悪くない。むしろ、フワフワのベッドに寝かされているような、心地よさを感じた。

風間は突然、白い世界に引き込まれた。

……

「祐ちゃん、ほら立って。」

母親が、泣いている風間の顔を覗き込んで言った。

「ママ…」

「男の子でしょ？自分で立ちなさい。」

風間はうつぶせになっていた体を起こした。そして汚れた手で目を拭った。

母親が風間の体の土を払いながら、顔を見て笑った。

「やだ！祐ちゃん、おもしろい顔になってる！」

風間は母親が差し出した鏡を見て、自分も笑った。目の下に黒い筋が入っている。風間が笑ったのを見て、母親はまた笑った。

……

浅野は自宅のリビングのソファーで、組んだ両手に額を押し付けていた。隣に座っている圭一が、泣き出しそうな表情で浅野を見ている。突然、ザリアベルがソファーの側に現れた。

「ザリアベルさん！」

圭一が立ち上がった。

「風間さんが…！」

ザリアベルは最後まで聞かないうちにうなずいた。

「浅野！見えないのか！？」

浅野は首を振った。

「見えません…大天使様にも探してもらっていますが、何も見えないって…」

圭一が浅野の横に座り込んだ。風間がいなくなって丸1日が経っていた。圭一はあの次の日も弁当を持ち、浅野と一緒にテレポートして占い部屋に行ったのだが、風間はいなかった。何か胸騒ぎを感じた浅野は、そのまま圭一と風間のアパートにテレポートした。そして、キッチンの床に落ちたままの弁当箱を見て、風間が連れ去られたのを悟ったのだ。

「とにかく、そのまま探しつづけろ。俺はもう一度、魔界を探して

みるから。」

ザリアベルはそう言って、消えた。

「風間さん…」

圭一はそう呟いてソファーに座り込み、自分も浅野と同じように、組んだ両手に額をつけた。

……

「祐士」

風間は父親の顔を見上げた。

「紙飛行機、出来たか？」

「パパ…これでいい？」

風間は自分で折った紙飛行機を、父親に差し出した。

「よし。飛ばしてみよう。」

「うん！」

風間は、紙飛行機を飛ばした。紙飛行機は弧を描きながら、優雅に飛んだ。

「祐士！お前は天才だ！」

父親はそう言いながら、風間の体を抱き上げた。

「てんさい？」

風間は、父の首にしがみつきながら聞き返した。

「そうだよ。天才だ！」

父親が風間の体をかかげ上げ、嬉しそうに言った。

……

「祐士、陣をやろう。」

「えっ！？」

風間は、師「礼徳」の言葉に驚いた。

「でも僕、まだ半月しか…」

「陣を継ぐのは、いつでもいいんだ。要は陣をどう完成するかが永遠の課題みたいなもんだから。…こういう風に、両手を伸ばして円を手で作れ。」

風間は、向かい合わせに立っている礼徳の動きをを見ながら、両手を伸ばし円を形作った。

「陣を継ぐ！」

礼徳がそう言うと、礼徳と風間の間に小さな陣が現れた。

「よし。お前はそのまま動くな。」

礼徳は風間の背に回ると、風間の背中を抱くようにしながら風間の

手首を掴んだ。陣は消えずに浮いている。

「ゆっくりと広げるんだ。ゆっくりだぞ。割れにくいシャボン玉みたいなものだ。だが一気に広げると壊れる。…そう…」

風間は師に両手をつかまれながら、ゆっくり開いた。陣が大きく膨らんだ。

（陣って球体なんだ…）

風間はそう思った。シャボン玉というよりも、球体のステンドグラスみたいだった。

「きれい…」

風間が思わずそう呟くと、背中の礼徳が笑った。

「これはまだ術のない基本の陣だ。これから術を磨いて、陣を完成させて行くんだ。」

「はい」

その時、傍の小山の頂から、礼徳の妻「茜」の声がした。

「礼徳さーん！祐士くーん！晩御飯できたよー」

「！すぐ行くー！」

礼徳が急に甘えたような声で答えると、風間から手を離し山頂に向かって駆け出した。

「えっ師匠！こっこれどうするんですか！」

風間は、両手を広げたまま慌てて言った。
礼徳は走りながら「手を鳴らして閉じろー！」と言った。
「えっ！そっそんなんでいいの？」
風間は両手をパンと鳴らして閉じた。陣が消えた。
「おおー」
風間は感動してまた手を伸ばし、円を手で形作った。
「なんて言えばいいんだ？えーと…陣来い！」
小さな陣が現れた。
「やったっ！…ゆっくりと広げて…。」
風間がゆっくりと手を広げると、陣が広がった。
「すげえっ！」
風間はそう言って思わず、手を下ろしてしまった。すると、陣はボールのように地面に落ち、弾んで転がって行く。
「わー！ごめん！待って！」
風間が慌てて、ぴょんぴょんと弾む陣を追いかけた。
「待ってってば！」

「こらー！陣で遊ぶなー！」

礼徳が笑いながら言ったが、陣はまるで意思があるように、弾みながら風間から逃げている。

茜が笑いながら言った。

「祐士君、頑張れー！」

「師匠！どうすんすか！これー！？……こらっ逃げるな！」

礼徳は妻の肩を抱いて笑うだけで答えない。

どちらかというと陣に遊ばれている風間の姿に、茜の笑う声が響き渡っていた。

……

「エクソルティスト！」

風間はその声に目を覚ました。

「エクソルティスト！溺れるな！」

「ザリアベルさん…？」

風間は思わず呟いて、辺りを見渡した。薄明かりの中で自分の体が浮いていた。上を見ると水面のような膜が揺らいでいる。まるで水の中に浮いているかのようだ。

その風間の胸ポケットから、1枚のカードが飛び出した。風間は慌ててそのカードを逃すまいと掴み、絵柄を見た。絵柄は椅子に座った女性が目隠しをし、2本の剣をバランスよく持っている。目隠しをしているのは、目で見ることによって判断を誤まらせないためである。

「剣2（スウォード）…正位置（アップライト）…」

そう呟いた時、ザリアベルの声が響いた。

「安楽の泉だ！溺れれば、もう戻れない！」

「安楽の…泉…？」

「エクソルティスト！」

「エクソル…ティスト…」

風間は、確かめるようにそう呟いた。

「風間さん！」

「圭一さん？」

「風間君！帰って来い！」

「浅野さん…」

風間は、はっとしたように下を見た。体はゆっくりと下へ下へと落ちて行っている。その底では何本もの白い手が風間を誘うように揺らいでいる。

「！！」

「安楽の泉に溺れるな！お前にはまだやらねばならないことがある！溺れるな！」

「ザリアベルさん…」

風間は頷きながらカードを胸ポケットに戻すと、両手を前に伸ばした。

「祓い陣！」

小さな陣が現れた。風間は両手を広げた。陣が広がった。
風間は額に人差し指を当てて叫んだ。

「我を導く者の元に道を開け！」

陣は道を開いた。先が見えない程の長い線が延びていた。

風間は、大きく息を吸い叫んだ。

「礼徳の名の元に、我を祓え！」

風間は陣に吸い込まれるようにして消えた。

……

「風間さん！」

風間がゆっくりと目を開くと、圭一の顔が目の前にあった。
そして、自分のアパートのベッドに寝かされていることに気付いた。

「圭一さん…」
「良かった…。帰って来てくれて…」

風間は戸惑った目で圭一を見ていた。
浅野が圭一の後ろで言った。

「戻れて良かったよ…。安楽の泉にはまったら最後、二度と抜けられないんだそうだ。」

「じゃあ、父さん達ももしかして…！」
風間が体を起こしながらそう言うと、浅野が首を振った。
「ザリアベルが言うには、君のご両親をさらった影には悪意が見えるが、君をさらった泉の番人には悪意はないそうだ。」
「泉の番人？」
「そう。泉の番人は、過去を振り返り悲しむものをさらっていく。その悲しみが深ければ深いほど、さらわれやすいんだそうだ。だけど君のように、この世に心を残すものは抜け出せる。…だから君のご両親が、君という幼い我が子を置いて、泉に溺れるわけないんだ。」
「…そうか…」
風間は考え込むように、黙っていたが、急に顔を上げて言った。
「ザリアベルさんは？」
「ザリアベルは、何か調べたいことがあるとかで、また魔界に下りたよ。」
「そうですか…お礼が言いたいな…」
「いつでも会えるよ。」
「…はい！」
風間はそう言ってから、照れくさそうにうつむいた。
「あの…浅野さんも圭一さんもありがとう…。」
浅野と圭一は、視線を見合わせて微笑んだ。
風間がうつむき加減に言った。

「僕…師匠が消えてから、ずっと独りだったから…嬉しかった…」
「！風間さん…！」
圭一は、ふいに涙をこぼした風間の肩に手を乗せた。
浅野が、風間の頭をくしゃくしゃっと撫でた。
……
「わーっ！圭一さん！無理っ無理です！僕には無理！」
「風間さん、手を離しちゃダメですよ！卵は火が通るの早いんですから！」
浅野のマンションのキッチンで、風間と圭一がお揃いのエプロンをつけ、何か料理を作っている。エプロンは、風間から圭一への弁当のお礼だ。…なぜか自分にもお揃いで買っている。
浅野が楽しそうにはしゃぐ2人の声をリビングで聞きながら、新聞を開いて苦笑している。
「おーい！花見はいつ行くんだー？弁当まだできないのかー？」
浅野がそう言うと、キッチンから「後1時間！」と言う風間の声がした。圭一が笑っている。
「1時間だー！？腹減って死ぬぞ！」
浅野はそう言うと、新聞をたたんで立ち上がりキッチンに入った。
圭一は、卵焼きを作る風間にぴったりと寄り添い、手ほどきをしている。浅野はそれを横目でみながら、重箱の中を覗き込んだ。
「小芋いただき」

「あっ！浅野さん、だめっ！」
圭一が振り返りながら言った。
浅野はもう口を動かしている。
「うまい！」
「もおー浅野さん！いつまでたっても、お弁当出来ないでしょっ！」
圭一がそう怒りながら浅野に言った。風間は卵焼きと格闘中で振り向きもしない。
突然ザリアベルが現れた。
「！ザリアベルさん！お花見…」
圭一の声に風間が驚いて振り返った。だがザリアベルは、重箱の中から唐揚げをつまみ上げ、口の中に放り込んで消えた。
あまりの早技に皆、固まった。そして、３人同時に笑い出した。
（終）
……
カード「剣２」正位置の意味
「友情」「調和」を表わす。逆位置になると「不誠実」「偽りの友情」となる。

## 安楽の泉（戦）（後書き）

さて、今回は占いをする間が無かったので（笑）占い師ではなく、新人悪魔祓い師の「風間祐士」が「安楽の泉」についてお話しましょう。

「安楽の泉」は魔界にあると言いますが、実際にはその人の心の中にあるのだそうです。

人間って、幸せな時は未来をみようとするけれど、気弱になった時は良し悪し関係なく、過去を振り返ったりするじゃないですか。そして1ついい思い出を蘇らせると、また違ういい思い出を蘇らせ、どんどん深みに落ちて行ってしまうんですね。すると今を悲観する思いが強くなり、自分の将来を見失ってしまうというものです。

お話では「泉の番人」がそういう人を引きずりこみ溺れさせてしまうのですが、その番人には悪意が無く、むしろ、いつまでもいい思い出に浸らせてやって、幸せにしてやりたいと思っているわけです。

この「泉の番人」を心理学的に表現すると「現実逃避」となります。これは人間が無意識に陥る心理であり、これが続くとその人は本当に将来を悲観してしまい（うつになる状態です）、ついには「自殺」つまり「安楽の泉」から抜け出せないという最悪の結末を迎えるわけです。

もし、今あなたが「昔は良かったなぁ」なんて思っているなら、「泉の番人」があなたを泉に引きずり込もうとしている時です。そんな時は過去ばかりではなく、未来に想いを馳せましょう！そうすることで「泉の番人」はあなたから離れて行きます。

では、また次回にお会いしましょう！

## 社長を占う

「えっ！？僕がタレント事務所に？」

風間は、浅野と圭一を前にして声を上げた。浅野が身を乗り出して言った。

「ん。君の今のタロット占いの仕事も、悪魔祓いの仕事も収入がはっきりしないから不安だろうと思ってね。うちのプロダクションに入って、安定した収入をもらった方が君のためにいいんじゃないかって、圭一君と話していたんだ。」

「で、でも、僕は歌ったり踊ったりできないし、楽器だって弾けないですよ。」

「タロット占い師としてでいいじゃない？俺だって、ただのマジシャンだし。」

「いえ、マジシャンは立派なエンターテイメントですが、タロット占いはそうじゃないじゃないですか。」

慌てる風間に圭一が微笑みながら言った。

「大丈夫です。お膳立てはこちらでしますから、一緒にプロダクションに来てもらえませんか？」

「はあ…」

風間は困り果てた。もちろんありがたい話ではある。だが（こんなにしてもらって、いいんだろうか…）と思った。

また、タレント事務所で、自分がどう役に立てるのかもわからなかった。

だが、結局浅野と圭一に押し切られ、風間はとまどいながらもプロ

ダクションに行く事を決意した。

……

1週間後ー

風間は圭一に連れられて、プロダクションビルに入った。

（すごいビル！）

風間はそう思った。同時にまた気が萎えてきた。

圭一が、社長室のドアをノックした。中から返事があった。

圭一は「失礼します。」と言って、ドアを開き、一礼した。

風間も後ろで頭を下げた。

「よく来たね！入って！」

明るい声に風間は少しほっとしながら、頭を上げた。

中にはスーツを着た男性が2人いた。ソファーから立ち上がり、微笑んでこちらを見ている。

風間は2人とも、見たことがあると思った。

そして、いきなり「あっ！」と声を上げた。

「…励（れい）と明良（あきら）？」

風間の呟きに、圭一が驚いて振り返った。

「風間さん、知ってたの？」

「えっ！？本当に「励と明良」！？」

風間は「えーっ！？」と叫んだ。

「うそおっ！えっ…社長と副社長って、あの「ライヴァル」の励と明良のことなのっ！？」

風間は、無礼にも呼び捨てしていることに気付かないほど、動揺している。

圭一が苦笑しながら、うなずいていた。

スーツ姿の2人が顔を見合わせて笑っている。

風間は圭一に背中を押されるようにして、中へ入った。何か興奮したように、顔が真っ赤になっている。

「風間君、初めまして。社長の相澤です。」

先に社長の相澤励が、風間に手を差し出した。

「あっあの…お会いできて光栄です。」

風間がその手を両手で握り、頭を下げた。そして、副社長の「北条（きたじょう）明良」が風間に手を差し出した。

「初めまして。副社長の北条です。」

「はっ初めまして！よろしくお願いします！」

風間は明良の手も両手で握った。そして相澤に促され、向かいのソファーに座った。

相澤が嬉しそうにニコニコとしながら言った。

「君は圭一と同い年だと言っていたが…」
「はい！」
「俺たちのこと、知ってるんだ。」
「知ってるも何も…僕が小学生の時のスーパーアイドルですよ！仲が悪いっていわれてたトップアイドルの２人が突然ユニット組んでって…女の子達が騒いでて…」
「いいねぇいいねぇ！それで？」

相澤は一層嬉しそうに身を乗り出して、風間に言った。
明良が、そんな相澤の腕に手を乗せ「先輩！」と笑いながら抑えた。
それを聞いた風間が興奮気味に言った。

「わー！明良の「先輩」っての生で聞いた！」

その言葉に、相澤も明良も大笑いした。圭一が苦笑しながら「風間さん、落ち着いて。」と言った。

「えっ！？…あ？…えっと…僕、今おかしい？」

風間がそう言いながら圭一に言うと、圭一が笑いながら、うなずいた。
その時、ノックの音がし「社長、今いいかしら？」という女性の声がした。

「いいよー！」

相澤はもう誰かわかっているようにそう答えた。
ドアが開き、美しい女性が入って来た。風間は思わず目を瞬かせた。
女性が風間に気がついて言った。

「あら…ごめんなさい。お客さまだったのね。」
「あーーーっ！！」
風間がまた声を上げた。圭一が笑いながら「風間さん！」と言ったが、風間は気付かず言った。
「女優の香月(かづき)菜々子さんまでいるっ！」
それを聞いた女性は驚いた表情をした。相澤と明良はおかしくてたまらないように、体を反らせて笑っている。
「何？何？…ここ何？…訳わかんない…。」
風間は瞳孔を開かせたまま言った。
わかんないのはお前だ…と、浅野がいたら、そう突っ込んでいるだろう…。
……
「すいませんでした。」
やっと落ち着いた風間は、向かいのソファーに座っている相澤と明良、そして明良の隣に座っている菜々子に言った。
3人は笑って首を振っている。圭一も可笑しそうに、風間を見ていた。
風間は顔を真っ赤にしながら言った。
「だって…まさか目の前に「ライヴァル」の励と明良が…あ、すいません…。」

やっと呼び捨てにしていることに気づいて、風間は口を手で押さえた。
相澤が笑いながら言った。
「いいよ「励と明良」で…。何だかそんな風に呼ばれたの懐かしいと言うか…なぁ明良。」
「ええ…何かくすぐったいですね…」
明良が言った。菜々子が明良に向いて言った。
「「ライヴァル」っていう、ユニット名も何か懐かしいわね。」
「そうだな…。自分ですっかり忘れてたよ。」
「あの…今はソロ活動されているんですか？」
風間の言葉に相澤達は驚いた表情をした。圭一が慌ててフォローに入った。
「あ、あの、風間さんは、タロット占いの修行でここ3年間、テレビとか見ていなかったそうなんですよ。」
圭一が言った。悪魔祓い師の事は内緒にすることになっている。風間も慌てて言った。
「あっ…あっそうなんです。すいません！…だから、僕、圭一さんの事も最初アイドルだって知らなくて…」
「へぇーそうなのか！占い師にも修行ってあるんだねぇ。」
相澤がそう言うと、風間は「はぁ」と言って、俯いた。…実際は半年もしていないが…。
圭一が明良に向いて言った。

「父さん達が引退したのは、ちょうど3年前くらいでしたよね。」
「そうだったな。…もう大分前のような気もするが…。」
「父さん？」

風間が驚いて、圭一に向いて言った。
圭一が「あっ」という顔になり、風間に慌てて言った。

「僕…明良副社長と菜々子専務の養子にしてもらったんです。」
「えっ！？…あ、ちょっと待って…明良さんと菜々子さんは結婚してるのっ！？」
「あ、そうです。引退前にされて…」

圭一と風間の会話に、また相澤達が可笑しそうに笑っている。風間はまるで浦島太郎のようだった。

「…す、すいません。」

風間がまた顔を赤くして謝った。
菜々子がふと明良に向いて言った。

「風間君はタロット占い師なの？」

明良がうなずきながら、菜々子に答えた。

「うん。それで風間君を、圭一がうちで雇ってくれないかってことでね。」
「まぁ！いいんじゃない？占い師も最近、タレント活動する人多いし。」

菜々子がそう言い、風間を見た。風間はどきりとして思わず俯いた。顔が真っ赤になっている。

「俺は、最初からＯＫだよ。ただどういう風に売り出すかはこれから考えなきゃだけどな。」

相澤が言った。明良がうなずきながら風間を見て言った。

「そうですね。いきなりテレビとかに出すのではなく、よく当たる占い師として認識させてから徐々に売り出す方がいいでしょう。」

「…よく当たるかどうかは…自信ないですけど…」

風間は困ったように言ったが、圭一が慌てて言った。

「大丈夫ですよ。ザリアベルさんも浅野さんも占ってもらって、当たってるっておっしゃってましたから！」

「ザリアベル？クロイツさんか？」

明良が驚いて言った。圭一が笑いながら「はい」と答えて言った。

「風間さんに一番に占ってもらったのは、ザリアベルさんなんですよ。」

「へえー！意外だなぁ。どんな顔して占ってもらったのか見たかったなぁ。」

相澤がおかしそうに言った。

「社長、今、占ってもらったら？」

菜々子が言った。風間は「えっ！？」と目を見開いた。圭一が嬉し

そうに言った。

「そうですよ！社長、何か占うことないですか？」

「えっ…えっ…無理だって…」

風間は慌てて圭一の袖をひっぱりながら言った。

「え？カードお持ちじゃないですか？」

「いや、持ってるけど…。」

風間はそう言ってから（しまった）と思った。「持ってない」と言えば、良かったと思ったのだ。

「じゃぁ、出来るじゃないですか！社長、何かないですか？」

「そうだなぁ。…俺が占って欲しいのは、やっぱりこのプロダクションがどうなるかってことかなぁ。」

「えーーっ！？そっそんな大変なこと、僕には…」

風間がうろたえている。圭一が「それじゃ」と言いながら、風間を見た。

「じゃぁ、短い期間でどうですか？今年1年、プロダクションがどうなるかって。」

「えええ？…そんな責任重大な。」

「やってみてよ、風間君。占いは当たるも八卦、当たらぬも八卦って言うじゃないか。俺が今見たいのは、君の占う姿がどんな風なのかなんだ。あまり堅苦しく考えないで、やって見せてよ。」

風間は相澤にそう言われ、まだ困ったような表情をしていたが、やがて心を決めたように「はい」と答えた。

……

相澤にカードをシャッフルしてもらった後、風間は緊張気味にカードをまとめた。

さっきの雰囲気とは打って変わって、皆、緊張した様子でいる。

風間は慎重深く、カードをスプレッドした。7枚のカードで占うヘキサグラム・スプレッドである。

1（過去）運命の輪　逆
2（現在）棒5　逆
3（近い未来）剣1　正
4（対応策）剣クイーン　逆
5（周囲）剣ナイト　逆
6（願い）聖杯キング　逆
7（結果）剣9　逆

風間はスプレッドを見て、思わず眉をしかめた。正位置のカードが1枚しかなく、大アルカナも1枚しかない。また絵札が多く「剣（スウォード）」のカードが突出して多い。そして…どちらかというと「ネガティブ」なイメージのカードが多かった。それは絵柄を見ただけでわかるので、相澤達もなんとなく気づいているようだ。

「どう？風間君。」

相澤が不安そうに、風間に言った。風間は拳を口に当てて黙りこんでいたが、表情を明るくして顔を上げた。

「かなり厳しい展開になっていますが、いい場所に、いいカードが

出ているので安心しました。それはここです。」

風間はそう言うと、3枚目の「剣1」を指し示した。

「このカードだけが、僕から見て正しい向きになっています。このカードの位置は「未来」を差しています。」

風間がそう言うと、相澤がほっとした顔をした。明良と菜々子も思わず微笑み合っている。

「このカードは「勝利」を意味します。今後はどんなことがあっても、大丈夫だと思います。ただ…プロダクションを立ち上げた頃から、結構大変だったのではないでしょうか？」

風間の言葉に、相澤達が驚いて顔を上げた。

「この1枚目のカードが逆になっています。…用意周到に準備して、プロダクションを作ったのではなく、作ってから準備を始めたように見えますが、いかがですか？」

相澤はそう風間に言われ、目を見開いた。明良が驚いた目を風間に向けてから相澤に向いた。相澤がうなずきながら答えた。

「その通りだよ。…とにかく早く立ち上げたくて…事務所も机と電話1本だけで始めたんだ…」

「正直、その急いで作ったことによって、現在までバタバタ感が抜け切れていません。このカードは、このプロダクションにかかわる人たちがどうなのかを表しているんですが…。」

風間はそう言って、5枚目の「剣ナイト（逆）」のカードを指さし

た。

「どなたか、健康を害したり…あるいは、危険なことに陥ったようなことはありませんでしたか？」

それを聞いた相澤達は、皆息を呑んだ。
プロダクションを立ち上げてからというもの、病院にお世話になるような事件や事故が続いたのは確かだ。今は落ち着いているが…。

「でも今は、落ち着いていますね。」

その風間の言葉に、相澤達はまた目を見開いた。

「そう…その通りだよ。」

相澤が目を見開いたまま言った。風間はうなずきながら続けた。

「正直、申しまして、今後もゴタゴタすることになると思います。ですが、未来は「勝利」に満ちているのですから、無理をしない程度にこの落ち着いた状態を保られたらいいと思います。
…ただ、相澤社長が少しワンマン的な判断をすることが多いようです。なるべくなら、もう少し1歩下がるような感じで、経営された方がいいかと思います。ゴタゴタが続いているからこそ、突っ走ってしまうのも仕方がないと言えば、仕方がないのですが…。」

「すいません。」

相澤が思わず風間に謝った。それを聞いた明良が思わず吹き出した。
菜々子もつられたように笑い始めた。圭一も堪え切れないように笑いだした。

「えっ！？あっ…すいません。…僕…すごく失礼なこと…」
「いやいや、いいんだよ！」
相澤がそう言って、風間に手を差しだした。
「君を気に入った。できるだけ早く君を売り出せるように、明良達と相談しながら考えてみるから。」
「あっ…はい！すいません…」
風間は体を縮ませながら、その手を握って言った。圭一が励ますように、その風間の背に手を乗せた。
……
「圭一さん、さっきはよく聞けなかったんだけど、明良副社長の養子だっておっしゃってましたよね。」
風間は、迎えに来た浅野が運転する車の後部座席で、隣に座る圭一に話しかけた。
「ええ、そうです。」
圭一が微笑みながら、風間に向いて言った。風間は少し言いにくそうに尋ねた。
「圭一さんの親御さんって…どうされたんですか？」
「2人とも健在ですよ。僕は親に勘当されたんです。」
「！？勘当！？」
風間は驚いた。圭一が苦笑するように言った。

「話すと長くなりますけど、本当の両親は、僕が小学校６年生の時に離婚しましてね…。そして、母が再婚したんですが、その新しい父親に僕はなじめなくて、暴走族に入ったんです。」
「！！…暴走族…」
「その後、少年院にお世話になるような事件を起こして勘当されました。…その後はずっと独りで暮らしてたんですけど、１７歳の時に明良副社長の歌を有線で聞いて感動して、その時はただ「明良副社長に会いたい」という理由だけで、相澤プロダクションの入団試験を受けたんです。」
「…それで採用されたんですか！」
「…ええ…。本当にラッキーだったと思います。その時から、明良副社長にはとても気を掛けてもらって。…養子にまでしてもらって…今は本当に幸せを感じています。」
風間は黙って圭一の横顔を見つめていた。いつも穏やかな笑顔を見せている圭一に、そんな過去があるとは思いもしなかった。
「…すいません…嫌な事を聞いて…」
風間がうつむきながらそう言うと、圭一が驚いたように「いえそんな！」と言って、風間に向いた。
「僕より、風間さんの方が…。親御さんのこと…早くはっきりするといいですね。」
「ええ…。それはなんとしても突きとめたいと思っています。」
「僕も、できる限り協力しますよ。何でも遠慮なく言って下さい。」
「…ありがとうございます。」
風間はそう言うと、照れくさそうにうつむいた。何か圭一が、一層

身近に感じられた。
圭一も、照れ臭そうに外の景色に目を向けた。
浅野はバックミラーでちらとそんな2人の様子を見、独り微笑んだ。
……
（うわー…初体験…）
風間は、髪を触られながら思った。軽くメイクもされている。風間の宣伝用の写真を取るためだ。ヘアメイク担当の女性が、風間の髪を手で整えながら言った。
「目、すごい綺麗な二重ですね。うらやましー…」
「そうですか？よく眠たそう…って言われますけどね。」
風間がそう言うと、女性が笑った。
「はい。お疲れ様です。どうぞ。」
女性が離れ、風間は緊張気味に立ちあがった。
「風間さん！こちらにお願いします！」
照明に囲まれたステージのような場所に案内され、風間は言われるまま中央に立った。
衣装は、圭一が「ライトオペラ」で着るものを借りた。サイズもほぼぴったりだ。
「風間さん！カードを何か1枚持ってもらえますか？」
「え？カード…」

風間は焦った。カードは元々着ていた服のポケットだ。服は着替えた楽屋に置いたままである。その時、衣装の胸ポケットにガサリという音がした。
風間は（まさか）と思い、ポケットに手を入れてみた。
カードが1枚入っている。

風間は苦笑するように笑って、カードを取り出した。
「星正位置（スタナップライト）…なるほどね。」

風間はカードを掲げ「これでいいですか？」と向かいでカメラを構えているカメラマンに言った。

「はい！OKです！で、体ごと斜め前を向いてもらえますかね。はい、それで顔の右の頬辺りにカードを…そうです。で、視線だけこちらに…ああ、いいですね…。そのままでお願いします。」

カメラマンが、ファインダーを覗いて言った。

「もういきなりいっちゃいましょう！まず顔のアップからいきます！はい！1枚目！」

シャッターがきられた。

（終）

……

カード「星」正位置の意味

「希望」「明るい見通し」を指す。逆位置の場合は「失望」「高すぎる望み」という意味になる。

## 社長を占う（後書き）

では、新人占い師「風間祐士」が、今回の占いをご説明いたしましょう！

今回は「文車妖妃」でも使いました「ヘキサグラム・スプレッド」でした。

このスプレッドは、ほぼどんな占いでも使えるものです。恋占いしかり、今後の運勢しかり…。枚数も適当に少ないので、読みやすいのが特徴です。（少なすぎても読み切れないし、多すぎても混乱してしまいますよね。）

…しかし、まさかプロダクションのことをを占うとは思いませんでした。でも結果がよければ、すべてよしとしましょう！

あー…でも「励と明良」はいまだにカッコよかったです。あの後、相澤社長にこっそり「明良と俺とどっちが女の子にもててた？」なんて聞かれて「もちろん社長ですよ！」と答えましたが、実は女の子に人気があったのは「明良副社長」の方でした（^^；）相澤社長は男らしさがプンプンしていて、男の子の方に人気がありましたね。

では、また次回にお会いしましょう！

## 通りゃんせ（戦）

真夜中の高速道路ー

1人の青年が、あくびをしながら車を運転している。

「あー…運転に飽きてきたなー」

青年はそう言いながら、ハンドルを握っていた。遠距離恋愛の彼女のいる大阪からの帰り道だ。やっと首都高速に入ったところなのだが、眠くて仕方がない。

「でも、こんな生活ももうすぐ終わりだ。…結婚式まであと少し…」

青年はそう呟いて、またあくびをした。

その時、カーナビから歌声が流れた。悲しい旋律の歌である。音が小さいので青年は思わず耳を澄ました。

『こーこはどーこの細道じゃー…天神様の…』

青年の体に戦慄が走った。同時に危機感を感じ、青年はブレーキを踏んだ。だが、何故か逆に車のスピードが上がった。はっと足を見るとアクセルを踏んでいる。慌てて足を離し顔を上げると、幾何学模様の入った壁が立ちふさがっているのが見えた。

「！！」

青年は慌ててブレーキを踏み直したが、止まり切れずにその壁に衝

突した。轟音が鳴り響いた…。

……

翌朝ー

「高速道路で突然車が大破…」

浅野が新聞を広げて呟いた。向かいのソファーにいた圭一が驚いて顔を上げた。

「突然車が？」

「ああ…。後ろにいた車の運転手の証言によると、前を走っていた車が急にスピードを上げ、何かにぶつかったように大破したって…。」

「…風間さんに見てもらうべきでしょうか？」

「ああ、そうだな。…悪魔の臭いがプンプンするものな。」

圭一はその浅野の言葉にうなずくと、ジーパンの後ろポケットから携帯を取り出した。

……

「ああ、僕も今、テレビのニュースで見てたところなんですよ。」

風間はカウチソファーに寝転びながら（えらそうに）、携帯電話を耳に当てて言った。

「確かに怪しいですね…。テレビでもその現場が映っていましたが、その時は特に何も見えなかったです。…はい、そうしていただける

と助かります。いつ行きます？…なるほど…確かに事故のあった時間がいいでしょうね。はい、じゃぁ０時にアパートの前で待ってます。」

風間はそう言うと、携帯電話を切った。

……

同日　夜中ー

「えっ！？圭一さん、いつの間に免許を取ったんですか？」

風間が、浅野の車の助手席に乗りながら言った。運転席で圭一が照れくさそうに笑っている。

「昨日取りたてですよ。２週間で取りました。」

「すごいー！」

風間はそう言いながら、シートベルトを止めた。後ろの席で浅野もシートベルトをはめている。

「いきなり高速道路はやばいかなと思ったけど、圭一君、バイクには乗れたから大丈夫だろう。」

浅野のその言葉に、風間は圭一が暴走族にいた事を思い出した。

（いまだに信じられない…）

風間がそう思っていると、圭一は「行きますよ。」と言い、バックミラーで後ろを確認しながら方向指示器のランプをつけた。

……

圭一の運転は快適だった。止まる時もゆっくり止まるし、発進もスムーズだ。昨日取りたてとは思えないほどのハンドルさばきで、高速道路に入って行った。

夜中の高速道路は、昼とは違い不気味に静まり返っている。事故現場にはまだだが、何かぞっとする感じを3人とも感じていた。

「ザリアベル呼ぶんだったなぁ…」

後部座席で浅野が呟くように言った。圭一がバックミラーで浅野の顔をちらと見ながら言った。

「浅野さん、ザリアベルさんは魔除けじゃないんですよ。」

風間がその圭一の言葉に笑った。

すると、浅野の横に突然ザリアベルが現れた。

「呼んだか？」

「ぎゃーーーっ！！」

浅野が声を上げた。風間と圭一も同じように声を上げて驚いたが、すぐに笑い声に変わった。

圭一が笑いながら言った。

「もーザリアベルさん…やめて下さいよー！…心臓止まっちゃう…」

「呼ばれたような気がしたからな。」

「いえ、呼んだわけじゃないですけど…呼べば良かったって話をしてまして…」

浅野が胸を押さえながら言った。ザリアベルは何かニヤニヤしながら、シートベルトをはめている。
風間が振り返り、ザリアベルに会釈をした。

「ザリアベルさん、お久しぶりです！」
「ああ、久しぶり。花見の時以来か。」
「そうです。本当は今日もお呼びしたかったんですが、前にザリアベルさんを呼ぶのは「1回限り」って約束しちゃったから、だめかな…と思いまして。」
「そう言えば、そんなことを言ったか。別に気にしなくていい。こういう楽しい事は好きだ。」
「楽しい事ですか。」

風間がそう言って笑い、前に向いた。浅野が不気味そうにザリアベルを見た。
圭一がバックミラーでザリアベルをちらと見てから言った。

「ザリアベルさん、今僕達が何をしようとしているか、もうおわかりなんですよね？」
「ああ…。あの事故は恐らく悪魔の仕業だろう。風間がいるから、俺は手を出さずに見物させてもらうよ。」
「ええーっ！？そんなこと言わないで下さいよ！」

風間がそう言い、再びザリアベルに向いた。ザリアベルはにやりと笑いながら言った。

「俺は魔除けで充分だ。」

そのザリアベルの言葉に、浅野がザリアベルから体を避けるように

して言った。

「怒ってるっ！？ザリアベル、怒ってる！？」

「怒ってない。」

「だって怒ってる顔してるじゃないですか！」

「これは、元々だ。」

「あ、そうか。」

その2人の会話に、風間と圭一は思わず吹き出した。何かまとわりついていた恐怖が無くなっていた。

（ザリアベルさんは、本当に魔除けなのかもしれないな。）

風間はそう思った。

……

「ここですね…」

圭一が、側壁に沿うように車をゆっくり止めながら言った。

浅野がシートベルトをはずし、車から降りた。風間とザリアベルも降りている。

圭一はシートベルトをはずしながら、ハザードランプをつけ、自分も降りた。

「うわー…星が綺麗だなー…暗いとこれだけ見えるんだな。」

浅野が空を見上げて、そんな呑気な事を言った。ザリアベル達は苦笑するように笑った。

「車は全く通りませんね。」
圭一はそう言いながら、高速道路を渡った。そして、薄く消えかけたチョークの痕を指差した。
「ここですよ。車が大破したの。」
浅野と風間も圭一の傍に駆け寄った。ザリアベルは、車にもたれて腕を組んだまま動かない。本当に手を出さないつもりのようだ。
「いきなり大破か…。魔術でも掛けられたかな。」
浅野がそう言いながら、辺りを見渡した。悪魔の気配すら感じない。その時、小さくアップテンポの音楽が聞こえた。
「何だ？」
3人が振り返ると、ザリアベルの声がした。
「車だ！こっちに戻れ！」
浅野達は慌てて、ザリアベルに駆け寄った。
ザリアベルが黙って、徐々に近づいてくる音のする方向を見ている。
「かなりのスピードだな。風間の術じゃ間に合わん。」
ザリアベルがそう呟いた。浅野達が驚いて、車から体を離したザリアベルを見た。
ザリアベルは道路を渡りだした。

「ザリアベルさん！」

圭一が思わず駆け寄ろうとしたが、浅野が止めた。

「ザリアベルに任そう。大丈夫だよ。」

浅野の言葉に圭一は「でも…」と言いながら、不安そうに道路の間中に足を広げて立つザリアベルを見た。

風間はしっかりと目を見開いて、ザリアベルを凝視している。

（ザリアベルさんには何かが見えているんだ。…僕はやっぱりまだまだだな…）

その時、大音量で音楽を鳴らしている車がかなりのスピードでザリアベルに向かって走ってきた。風間は一瞬見えたその車の中の様子に驚いた。運転席と助手席に座っている男女が、強く目を閉じている。　ザリアベルは片手を差し出した。

その途端、ザリアベルの背後に幾何学模様の入った壁が出現した。

「！！」

「何！？あれ！」

風間がそう言ったとたん、車はザリアベルの前で突然消え、壁の後ろから飛び出した。

「ほらーっ！何もなかったじゃないかー！」

「みんなばっかみたい！明日自慢してやろうよ！」

「いいねぇ！」

走り去る車の中から大音量の音楽と共に、そんな若い男女の笑い声

がした。
風間は（怖くて目を閉じていたくせに…）と、独り苦笑した。
助手席の窓から、女性が腕を出し振り回している。車は更にスピードを上げ、遠のいて行った。
ザリアベルが壁に振り返り、その壁の上を見上げた。
「お前…何のためにこんなことをしてるんだ？」
すると壁が消えた。
「…見えないな…」
浅野が呟くように言った。風間と圭一もうなずいた。
ザリアベルはふとこちらに向き、歩いてきた。
「ザリアベルさん、何だったんですか？」
「黒い服を着た女の姿が一瞬見えた。呼びかけたが、すぐに消えてしまったよ。」
「……」
浅野達は考え込むような表情で黙っている。ザリアベルが腕を組みながら言った。
「悪魔かどうかわからないが、明日もこの場所この時間に、また事故が起こる可能性は充分にある。…お前達が出来る事は、明日この時間にもう1度来て、あの壁を壊す事だ。」
「壁を壊す？ザリアベルさんの後ろに現れた壁ですか？」
風間の問いかけにザリアベルがうなずいた。

「あれ、ザリアベルが出したんじゃなかったんですか？」
浅野が驚いて言った。ザリアベルは首を振って答えた。
「違う。あの壁が車を大破させたんだ。俺がさっきしたことは、走ってきた車が壁に激突しないように瞬間移動させただけだ。あの壁は車がぶつかってくる直前に現れる。俺も、その一瞬の間にそれを壊す自信がなかったものでね。」
「そんな…ザリアベルさんが出来ない事を僕達が出来るわけが…」
圭一が言ったが、風間がその圭一の肩に手を乗せた。
圭一が驚いて風間を見ると、風間はうつむき加減に考える風を見せている。
「1つ…方法が。…かなり危険な方法ですが…。」
圭一と浅野が驚いた目で風間を見た。ザリアベルがにやりと笑った。
……
翌晩ー
圭一が緊張気味に浅野の車を運転している。助手席には風間が座り、後ろには浅野が座っている。
ザリアベルは姿を現していない。浅野が言った
「もし、風間君の術が間に合わないようだったら、俺が君たち2人を瞬間移動させる。なんとかぎりぎりまで踏ん張ってくれ。」
圭一と風間は同時にうなずいた。風間の喉はからからになっていた。

今日成功しなければ、また明日同じ事をしなければならない。それは避けたいと思っていた。

「そろそろです。スピードを上げますよ。」

圭一はそう言うと、アクセルを踏む足にゆっくりと力を入れた。そして風間は窓を開け、助手席から体を乗り出し、窓に腰を下ろした。

「風間君、気をつけろ！」

浅野の声がした。風間は強風にさらされながら前方を見た。浅野が風間の足を押さえている。前方には何も見えない。だが風間は進行方向に向けて両手を差し出し、円を形作った。

「祓い陣！」

車の前に陣が現れた。風間は両手を広げ、陣を膨らませた。そして人差し指を額に当てて叫んだ。

「破壊の渦！」

陣は球体から、ドリルのように三角錐に変化した。その先端は前方に向いている。

突然、幾何学模様の入った壁が出現した。

「礼徳の名のもとに祓え！」

その風間の叫びと共に、車が壁に激突したかのように見えた。だが

車は無事すり抜け、壁が砕け散った。

「よっしゃあ！」

風間はそう言いながら、車に乗り込んだ。そして運転している圭一と、パンと音を立てて手を合わせた。圭一はブレーキをゆっくり踏み、スピードを落とした。風間が後部座席に振り返ると、天使アルシェに姿を変えた浅野が頭を出したまま、もがいている。

「アルシェ！？何してるんですか！」

「羽根が引っ掛かって出られないー！」

「もおっ！こんな時に何してんですか！瞬間移動（テレポート）でいいでしょっ！」

「あ、そうか。」

アルシェが消えた。圭一が思わず吹き出している。

車から飛び出したアルシェは、弓矢を構えながら辺りを見渡した。何も見えない。

『とーうりゃんせ…とーりゃんせ…』

突然歌声が響いた。アルシェは声を上げて弓矢から手を離し、耳をふさいだ。

「アルシェ！」

止まった車から降りた風間が叫んだ。圭一も車から飛び降りるようにして、アルシェに向かって走った。アルシェは地面に落ち、四つん這いになるようにして両耳を押さえている。

（天使だけ…？）

風間はそう思いながら、アルシェの背に手を乗せた。

『こーこはどーこの細道じゃー…』

声はアルシェをせせら笑うように歌っている。

「鏡の陣！」

風間がそう叫びながら立ち上がり、両手を差し出した。
すると風間は突き飛ばされるようにして、地面に叩きつけられた。

「風間さん！」

圭一は倒れた風間に駆け寄った。風間は背中を強く打ち、起き上がれない。

圭一が立ち上がり、歌う構えになった。
歌は続いている。

『ちょーっと通してくだしゃんせ…』

圭一はその声に自分の声を重ねた。

『御用のないもの通しゃせぬ…』

歌声が一瞬止まったが、また歌い始めた。

『この子の七つのお祝いに…』

圭一は声を重ねて歌っている。その時、黒いドレスの女が姿を現した。

『お札をおさめにまいります…』

女は苦しみ、歌えなくなった。胸を押さえ体を曲げている。圭一は構わず歌い続けた。

「行きはよいよい帰りはこわい…こわいながらも通りゃんせ通りゃんせ…」

圭一が歌い終わったと同時に、立ち上がっていたアルシェが、女に矢を放った。

女は胸に矢を受け、悲鳴を上げながら体を反らせ、チリのように消えた。

圭一が、ふーっと息を吐いた。

風間が顔をしかめながら、ゆっくり体を起こした。

「風間さん！大丈夫ですか！？」

圭一が立ち上がる風間の体を支えた。風間は微笑んで、うなずきながら言った。

「悪魔の通りゃんせは不気味だったけど、圭一さんのは優しく聞こえました。」

「そう？それはうれしいな…」

圭一が微笑みながら言った。

アルシェは浅野に姿を戻し、片耳に指を押し込みながら圭一達の方

へ歩いてきた。まだ耳がおかしいように、頭を振っている。
「あー…耳をつんざくって、ああいうのを言うんだな…。」
「お疲れ様でした。」
風間がそう言って、片手を上げた。
「お疲れさん。」
浅野がそう言って、風間のその手にパンという音と共に手を重ねた。
その後に圭一が重ねた。
何か手を叩くような音がした。
３人は驚いて、その音のする方を見た。
車にもたれたザリアベルが、拍手をしていた。
……
翌日ー
「同じ場所で、半年くらい前に追突事故があったそうだよ。」
浅野がソファーに座り、新聞を広げたまま言った。
向かいに座っていた圭一と風間は驚いて浅野に向いた。
「追突事故？」
「ああ…。夜中…ちょうど同じ時間くらいに…ええっと？…若いカップルの乗った車が、後ろから１４０キロで走ってきた無免許の少年が運転する車に追突され、追突した方の車に乗っていた３人の少

年達と、追突された車の助手席にいた女性は即死、運転席の男性は重傷を負ったが命に別状はなかった…。」

風間と圭一は黙って何も言わなかった。浅野が続けた。

「…その後、重傷だった男性は1ヶ月で退院し、それから半年後に婚約した。…一昨日の事故は、ちょうど男性が結納を交わした翌日で、その死んだ女性の怨念が引き起こしたのではないかと言う噂が立っているという…」

浅野が新聞を下げ、風間を見た。圭一もつられるように、風間に向いた。

風間は黙っていたが、上着のポケットからタロットカードのデッキを取り出した。
そして、自分でカードをシャッフルし、それをまとめるとスプレッドし始めた。
6枚のカードで占う、二者択一スプレッドである。

無言のまま厳しい表情でカードを展開する風間を浅野達は見つめた。
スプレッドが終わり、風間は口に手を当てて、カードを見渡した。

1　女性の過去　剣3　正
2　女性の現在　棒クイーン　正
3　女性の未来　世界　正
4　悪魔の過去　女帝　逆
5　悪魔の現在　剣1　逆
6　悪魔の未来　審判　逆

圭一も浅野も黙ってカードを見、風間が口を開くのを待った。

「違いますね」

風間が言った。浅野と圭一がほっとした顔をした。

風間はカードを見つめたまま続けた。

「亡くなった女性はむしろ、彼の婚約を喜んでいます。そして、彼の婚約が決まったと同時に彼女は天に召されています。では、一昨日の事故の発端はなんなのか。」

浅野が身を乗り出した。圭一も風間を見た。

「あの悪魔の嫉妬です。」

「！？」

風間はやっと顔を上げて言った。

「そもそも半年前のカップルの追突事故も、あの悪魔が起こしたものだったんです。悪魔はそのカップルの仲睦まじい姿を見て、たまたま後ろを走っていた少年達の車を扇動し、追突させたんだと思います。」

「…ひどい…」

圭一が眉をしかめて言った。風間はうなずきながら続けた。

「亡くなった女性の呪いならば、全く関係のない人に呪いをかけても意味がない。婚約した男性に直接呪いをかけるはずです。だが、その男性は結納を無事済ませている。呪われているなら、そうはならないでしょう。一生結婚できなかったかもしれない。」

浅野と圭一はうなずいた。風間が続けた。

「悪魔が、あの場所であの時間に事故を起こさせるようにしたのは、亡くなった女性の怨念に見せかけるためでしょう。一昨日、事故で亡くなった男性も結婚間近だという事でしたし…。」

浅野が「気の毒に」と呟いた。圭一はカードを凝視しながら黙っている。

風間は４枚目のカードを指しながら言った。

「この悪魔の動きを表わすカードを見ると…嫉妬心から自分の力を悪用し事故を起こさせた…と出ています。そして最後には…」

風間は一旦そこで言葉を切り、６枚目のカードに指を乗せて言った。

「審判（ジャッジメント）の逆位置（リバース）」

風間は、自分を見ている浅野と圭一の顔を見て言った。

「このカードには天使（アルシェ）「ガブリエル」が書かれています。つまり天使に悪魔は消滅させられた。それも復活できない完全な消滅です。もう、あの悪魔が現れる事は無いでしょう。」

圭一が拍手をした。浅野も「お見事」と言い拍手した。

風間は照れくさそうに、頭を掻いた。

……

２週間後―

「載りましたよ！風間さんの投稿！」

圭一が女性週刊誌を持って、プロダクションの食堂に入ってきた。女子研究生達に囲まれて、占いをしていた風間は驚いて顔を上げた。

「あっごめん、占い中だったんですね。」

圭一は、女子研究生達が頭を下げるのを見て、自分も返礼しながら言った。

風間は圭一に「もう少しで終わりますから」と言い、向かいに座っている女子研究生に占いの結果を説明し始めた。

圭一は風間の後ろに立ち、カードがスプレッドされているテーブルを興味深げに覗き込んだ。

風間の説明は続いている。

「…ただ、この結果は、あなたがこれまで通り努力を怠らなかったと仮定しての結果です。また今一層努力すれば、もっといい結果に変わる可能性だってある。カードの中に事故や怪我などのカードは全くありませんし、安心して今後も研究生として努力を続けられるといいですよ。頑張って下さい。」

風間の言葉に、女子研究生は「ありがとうございます！」と頭を下げた。周りの女子研究生達が拍手をしている。

「ごめんなさい。今日はこれで終わりです。あなたの占いは明日にしますね。」

1人の女子研究生を見て、風間が言った。女子研究生は嬉しそうに「はい！」と答えて頭を下げた。

研究生達はそれぞれ「失礼します」と風間と圭一に頭を下げて、食

堂を出て行った。

「ふえー…」

風間がそう言いながら、椅子の背にもたれた。

圭一は笑いながら、風間の隣に座った。

「連日大変ですね、風間さん。それも1人や2人じゃないでしょう。」

「これもいただいている給料のうちですよ。それに占いも洗練されるし、僕には願ったりかなったりです。」

「そう言ってもらえると、プロダクションに薦めた甲斐があります。」

圭一はそう言って「そうそう」と、開いてある女性週刊誌を風間の前に置き、赤ペンで枠をしている記事を指し示した。

「載りましたよ。風間さんの投稿…。編集者がコメントをくれています。すぐにでも風間さんの事が話題になるでしょう。」

風間は少しおどおどした様子で、赤ペンで囲まれている記事を読んだ。

自分の書いた文章があり、続けて女性編集者のコメントが載せられている。

「風間さんは新人占い師とのことですが、あの事故が亡くなった女性の怨念でない…という占いの結果に、個人的にほっとしました。新聞では、生き残った男性が婚約したことによる怨念と確かにありましたが、きっとその男性の方も婚約された女性も、心を痛めておられると思います。この記事を、その男性が読んで下さるといいの

ですが…。」

風間がわざわざ女性誌に投稿したのは、まさにこの編集者のコメントの通りになることを狙ったものだった。男性がこの記事を読む事はなくても、なんらかの形で知ってもらえたら、きっと今後は、幸せに暮らしていけるだろう。

もちろん、この記事を投稿する事はプロダクションに許可をもらっている。社長の相澤は「いいじゃない！君の宣伝にもなる！」とビジネスモード全開でＯＫを出してくれた。

その時、食堂にアナウンスが鳴った。

「風間祐士さん、お電話です。お近くのインターホンより、１番でお取り下さい。」

圭一が「もしかして！」と言い、風間を見た。風間は緊張した顔で圭一に向いた。そして圭一に背中を押されながら、キッチン横にあるインターホンの受話器を取り、１番のボタンを押した。

「はい…風間です。…！…ええ…あの記事を投稿したのは僕です。…ええ、そうなんです。相澤プロダクションに所属しています。」

風間の背中に体を密着させるようにして聞いていた圭一が、黙ってガッツポーズをした。

風間は必死に笑いを堪えながら言った。

「はい…はい…僕は構いませんが、プロダクションの許可がいりますので、また後日こちらからご連絡します。…はい、ありがとうございます。」

風間はそう言うと、インターホンを戻した。

「…雑誌の占いコーナーを担当してくれないかって言われました。」

その風間の言葉に、圭一が「やりましたね！」と言って、両手を上げた。風間はその圭一の手に、自分の両手をパンという音と共に合わせた。

圭一が嬉しそうに風間の腕を取りながら言った。

「さぁ！すぐに社長の所へ行きましょうよ！」

「はぁ…でも、何か全てが上手くいきすぎて怖いです…」

「何言ってるんですか！ほら早く！」

風間は笑いながら、圭一に引っ張られるようにして食堂を出た。

（終）

……

2番目のカード「棒クイーン」正位置の意味

「寛大」「愛情が深い」。逆位置になると「強欲」「嫉妬」となる。

## 通りゃんせ（戦）（後書き）

さて、今回も新人占い師「風間祐士」が今回の占いの説明をいたしましょう！

今回は「二者択一スプレッド」を使いました。ただ、このスプレッドは特に枚数が決まってなく、増やせば増やすほど詳しく調べられる…というものです。基本は5枚のカードをV字型に展開するのですが、今回は亡くなった女性と悪魔がどうしたか…という占いでしたので、6枚のカードを使いました。

基本の5枚で占う場合は、1枚目が現状、2枚目がAの未来、3枚目がAの未来の心境（状態）、4枚目がBの未来、5枚目がBの未来の心境（状態）となります。

名前の通り「二者択一スプレッド」ですので、本来は「自分はこれからどちらの道に進むべきか」というような事を占います。あるいは、どちらの恋人と結婚すれば幸せになるか…なんてのも占えますよ（おい）。

今回は左に3枚、右に3枚縦に並べ占いました。左を女性、右を悪魔として占ったのですが、これが逆だと、どういう解釈になるかと言いますと…。右を女性とした場合は、女性が「嫉妬」し、「力を悪用して事故を起こさせ」、「天使に消滅された」となります。つまり女性の怨念という結果になってしまうように感じますが、左の悪魔のカードはどうなるかと言いますと、悪魔が「涙を流すほどの傷心」を感じ（これはカップルに嫉妬して傷心したとも取れますが）、それでも「寛大な愛情深い気持ちを持って」（???実際は寛大じゃないですよね？）、最後には「幸福感、達成感」を得た。（???）と、意味がわからなくなります。つまりやはり、左のカードを女性と見、右のカードを悪魔と見た方がつじつまが合うという事になります。

これは過去を占った場合ですから、未来を占う場合はどっちがどっ

ちになるかわかりません。過去と現状のカードで判断する事もできないでもないですが、スプレッドの前に強い意志を持って「左が○○」「右が××」と決めて占って下さいね。

しかし今回は、とても悲しいお話でした。夜は悪魔や悪霊が活動を活発にする時間ですので、特に車の少ない高速道路は走らないに越した事がないと思います。悪魔や霊でなくても、信号もない同じ景色が続くような、暗い長い道を一定の速度で走り続けると、脳が混乱するとも聞いた事があります。（あるはずのないものが見えたり、あるべきものが見えなかったり…）夜はできるだけ外に出ず、ゆっくり眠るのが一番いいと思います。

では、また次回お会いいたしましょう！

## 愛を占う

風間は「相澤プロダクション」ビルに向かって歩いていた。風間は正社員として雇われたので、毎日決まった時間に出勤する事になっている。

今まで借りていた占い部屋は解約した。ほとんどお客が来ることはなかったし、アイドルの「北条圭一（きたじょう）」が1度来てから、ファンがまた圭一が来るかとたむろしたりして、ビルにも迷惑をかけていたところだったので、ちょうど良かったのだ。

相澤プロダクションの施設は居心地のいいものだった。通称「相澤食堂」と言われるレストランは、プロダクションに所属している者なら、朝6時から夜中0時まで自由に安い料金で食事ができる。またシャワーも完備され、タレントたちが周りを気遣わずに飲める「バー」まである。それもこの「バー」のマスターは、マジシャンの浅野俊介だ。浅野は元々、このバーのマスターとして採用されたのだという。

ちなみに浅野は契約社員なので、毎日通う義務はない。

（今日は何食べようかなー…）

風間がそう思いながらビルの前の横断歩道を渡った時、胸のポケットに何かを感じた。

「ん？今日はなんだよ。」

風間はビルの前で立ち止まり、胸ポケットから現れたカードを取り出した。

「また「塔（タワー）」か！何が落ちて…」

そう言いながら上を見ると、毛むくじゃらのモノが顔に落ちた。

風間はすぐにわかった。

「！…ふがふが（キャトル）！」

「にゃあ！」

「ふがふがふ…がふが…ふがふがふが（こめかみに爪が食い込んでる。）」

「にゃんにゃん」

「ふがふがふがふがふがっ！（にゃんにゃんじゃない！）」

風間は頭を起こし、キジ柄の子猫「キャトル」の体を両手で掴むと、そっと離した。

「もおー…キャトル！」

風間はやっと普通に言った。

「お前、どっからどうやって降って来たんだよ！」

「にゃぁ？」

キャトルが首を傾げた。風間が顔を赤らめて言った。

「…くっ首を傾げてもだめっ！…かわいいけど…ごまかされないぞ！」

「にゃんにゃん♪」

「〜〜っ…だめだっ可愛すぎる！」

風間はそう言って、キャトルを胸に抱きしめた。キャトルが「ぎゃ

ーっ！」と鳴いて、風間の胸で暴れた。

……

「ごめんなさいね、風間君。大丈夫？」

専務室のソファーで、このプロダクションの専務であり、北条圭一（きたじょう）の義母である、北条菜々子が風間を心配そうに見ながら言った。

ビルの中から、風間がキャトルに胸を引っ掻かれたのを見た受付の女性が、（笑いながらだが）専務室に案内してくれたのだった。

キャトルは時々浅野のマンションにもいるが、本来は北条家の飼い猫である。プロダクションでは、専務室が主な寝床なのだった。

「だっ大丈夫です！」

キャトルに引っ掻かれた傷が痛むが、風間はそれを必死に堪えながら言った。

「シャツにも傷つけちゃって…圭一君に頼んで、同じようなの買ってきてもらうわね。」

「えっ！？あ、いえ…そこまでしていただかなくてもいいです！…元はと言えば、僕がレディーをいきなり抱きしめたのが悪いんですから。」

風間がそう言うと、菜々子が口に手を当てて笑った。

「まぁ！風間君って、おもしろい人ね。」

「にゃあ！」

キャトルはそう鳴くと、菜々子の座っているソファーに飛び乗った。

「自分は確かにレディーなのだ」と言いたいようだ。
「キャトル、本当のレディーは殿方を引っ掻いたりしないのよ。もうしちゃだめよ。」
菜々子がそう言いながらキャトルの鼻を突くと、キャトルはぶるぶるっと首を振った。
風間が思わず笑った。菜々子が風間に向いて言った。
「風間君、雑誌の方は好評のようね。」
「ありがとうございます。なんとか続いているって感じですが…」
「本当はもっと他にも何か仕事をしてもらいたいと思ってるんだけど…社長が「黙っててても向こうから来るよ」なんて、呑気なこと言ってるのよ。」
風間は首を振りながら言った。
「そもそも「占い師」なんて地味なものですし、僕は雇ってもらったってだけでも申し訳なくて…。…あ、でも、いただいた仕事はどんなことでもやりますので…。」
「ありがとう。でも、うちのことだから、何をさせられるかわからないわよー。」
「えっ…」
風間はどきりとして菜々子を見た。
「浅野さんだって、イリュージョンショーの宣伝だと言って、天使の格好で道を歩かされたりしてたわよ。」
浅野は元々天使だが、菜々子はそれをコスプレのように思っている

のだろう。言いながら笑っている。
風間は想像して、思わず吹き出した。浅野なら、案外喜んでやっていたように思えるが…。
その時、突然キャトルが「にゃあ」と鳴いて、菜々子の膝に前足を乗せた。
「あら、なあに？キャトル。抱っこして欲しいの？」
菜々子はそう言い、キャトルを膝に乗せた。風間は思わず（猫になりたい）などと思ってしまい、慌ててそのみだらな考えを打ち消した。
「にゃあ！にゃあ！」
キャトルは、菜々子の顔を見上げて、必死に何かを訴えている。
菜々子は驚いた顔でキャトルを見ていたが、やがて「はっ」とした顔をした。
「まさか…キャトル…」
「にゃぁ！」
そのまさかよ！…というような声が、風間に聞こえた。浅野はキャトルの言葉を理解できるようだが、風間にも圭一にもわからない。だが、風間は今瞬間的に、キャトルがそう言ったように聞こえたのである。
「まさか…って…なんでしょう？」
風間が菜々子に向いて言った。

菜々子は、困ったようにキャトルを見つめ黙りこんでいる。キャトルも菜々子の顔を見つめていた。

「…あなたは不思議な子ね。キャトル。」

菜々子はそう言うと、何かを決意したように風間に向いた。

「あのね、風間君。…圭一君にも明良(あきら)さんにも内緒で占って欲しい事があるの。」

「！…なんでしょう？」

風間は、ただならぬ菜々子の様子に緊張しながら言った。

……

「赤ちゃん…ですか。」

風間は少しショックを受けながら、菜々子に言った。

「ええ…。明良さんと結婚して4年になるけど、赤ちゃんができなくて…。圭一君ももちろん、大事な息子だと思っているわ。…でも、やっぱり明良さんと私の結晶というかしら…2人の子どもも欲しいのよ。」

「…圭一さんは、そのことについては？」

「ええ、もちろん知っているわ。圭一君も一緒に待ってくれているの。」

「そう…ですか。それなら良かった。」

「明良さんは急ぐことはないし、子どもがいなくても別に構わないって言ってくれてるんだけど…。それもどこまで本気なのかわからなくて…」

「……」

風間は（かなり深刻な話だな）と思った。今までで一番深刻な問題かもしれない。

風間は菜々子の膝に丸まりながら、自分を見ているキャトルを見て思った。

（キャトル、なんてことをしてくれたんだよー…。まさか、子どもが本当にできるかどうかなんて占わされるんじゃ…）

風間がそう思った時、菜々子が口を開いた。

「私と明良さんの赤ちゃん…できるのかしら？」

風間は（きたーっ！）と心の中で叫んだ。そして、手で目を覆った。

菜々子が不安そうに言った。

「…やっぱり…占うにはきつい内容かしら…」

「…正直、微妙な占いになると思います。占いは予言ではないので、できるかできないか…という結果は正直でるかどうか…」

「…そうよね。」

菜々子はうつむいた。その菜々子の顔をキャトルは見上げ、風間を睨みつけるように見た。

「！」

風間はそのキャトルの目を見て慌てて言った。

「ですが、ちょっと現状がどうか見てみましょう。」

「！…ええ…。」

菜々子が嬉しそうにした。

……

菜々子にシャッフルしてもらった後、風間はカードをまとめ、スプレッドしはじめた。

クロス・スプレッドという、５枚で占うスプレッドである。

１　プラス要素　聖杯９　逆

２　マイナス要素　剣クイーン　正

３　対策　女帝　正

４　解決　聖杯１０　逆

５　総合結果　聖杯４　逆

風間はこぶしを口に当てて、カードを見つめている。菜々子もカードを見つめていた。

「…かなり、踏み込んだことを言いますが、よろしいでしょうか？」

菜々子はその風間の言葉に少し驚いた様子を見せたが「ええ」と答えた。

「専務ご自身は、半分あきらめておいでではないでしょうか？」

「！！」

菜々子は驚いた目を風間に向けた。

「…もしかして、ご自身でもお気づきになっていないかもしれませ

んが…」
「いいえ…。正直言うとそうなの…。もう無理なんじゃないかって…」
「その原因ですが…病院で何か言われたのではないですか？」
「！！！えっ…ええ…」
菜々子がまた驚いた声を上げた。風間は2枚目の「剣　クイーン（正位置）」のカードを指さして言った。
「…実は、このカードはマイナス要素を表すのですが…専務に「婦人性疾患」があることを表しているんです。」
「！！」
菜々子は目を見開いたまま、風間が指しているカードを見た。
「それで専務は、落胆された…。その上で、明良副社長と何か…喧嘩…といいますか、もめ事のような事がありませんでしたか？」
菜々子はその言葉を聞いて、両手で顔を覆った。キャトルが「にゃぁっ！」と鳴いて、風間に向かって「ふーっ」と毛を逆立てて見せた。
風間は慌てて身を乗り出した。
「すっすいません！僕…」
「いえ！いえ、いいのよ！風間君、本当にその通りなの。でも…」
「ええ、でも解決されましたよね。そして、またお2人の愛を深められた。」
風間がそうなだめるように言うと、菜々子は赤い目をこすりながら、微笑んでうなずいた。

「ええ。明良さんの優しさで…」

菜々子のその言葉に、風間はほっとした表情をした。キャトルも毛を収め、また菜々子の膝で丸くなった。

「それで…このカードが最終結果を表すのですが…」

風間が5枚目（聖杯４（逆））のカードを指さした。菜々子は赤い目のまま、そのカードを見た。

「私から見て逆位置になっていますが、実はこのカードは、逆になった方がいい意味を持つんです。気にかけておられる事が、徐々に払拭されていくことを表します。」

「！…」

菜々子が目を見開いて、風間を見た。

「このカードの絵を見て下さい。青年が不満そうな顔で、置いてある３つの聖杯を見ているでしょう？その上、自分に差し出されている聖杯にも気付いていない様子だ。…つまり、満たされているはずなのに、満たされない何かを感じている。」

菜々子はカードに向いて、うなずいた。

「…ええ…そんな感じね。」

「それが、逆になっている…ということは…いつか、本当に満足する日が来る…という意味になります。」

その風間の言葉に、菜々子が微笑んだ。風間は続けた。

「ただ専務ご自身も、この青年と同じです。とても幸せなはずなのに、幸せに思っておられない。」
「！」
「この対策を表すカードは「女帝（正位置）」となっています。明良副社長に、これからも変わらぬ愛情を注いでいれば、きっと望みは叶います。」

菜々子はまた両手で顔を覆った。キャトルは菜々子を見上げたが、今度は風間に優しい目を向けた。
風間は（ゲンキンな奴）とあきれ顔でキャトルを見た。

「それから、明良副社長の本心がわからないとおっしゃっていましたが…」
「！…ええ…」
「今、見てみましょう。」

風間は調子に乗って、カードをまたまとめ始めた。
そしてカードをカットすると、もう1度、菜々子にシャッフルを頼んだ。今度は「明良」のことを思ってもらいながら…。
風間はカードをまとめ、スプレッドした。
3枚で占う「スリーカード・スプレッド」である。前に秋本を占った「ナインカード・スプレッド」の簡略版である。

1　表面意識　聖杯8　正
2　中間意識　聖杯3　正
3　潜在意識　皇帝　正

「んー…副社長もあきらめているようなご様子ですが、希望を捨てたわけではないようです。」

菜々子が嬉しそうな表情をした。風間は微笑んで言った。

「それも、専務との生活をとても幸せに思っていらっしゃいます。副社長ご自身がおっしゃっていたように、急いでもいない。今は準備期間だと思っておられます。」

「…そう…良かった…」

菜々子はまた涙ぐみながら言った。風間が顔を上げて言った。

「…副社長って、実は結構、頑固な方じゃないですか？」

「ええ…そうかもね。」

菜々子がうなずきながら言った。

「でしょう。…明良副社長はまさに…」

風間は3枚目のカードを指して言った。

「皇帝（エンペラー）…そのものじゃないでしょうか？」

菜々子は涙ぐんだまま、くすくすっと笑った。

……

「頼むよ、キャトルー…ほんとどうなるかと思った。」

風間は、非常階段に腰を下ろして言った。風間の隣でお座りをしたキャトルが「にゃあ」と鳴いた。

「にゃあじゃないよ！…ほんっとに、焦ったんだからな！」
「にゃんにゃん♪」
キャトルはそう鳴くと風間の肩に飛び乗り、頬ずりをした。風間は何かを耐えるように目を閉じて言った。
「くーーっ…ごまかされるものか…可愛いけど、僕はごまかされないぞ…ごまかさ…」
キャトルは風間に頬ずり続けている。
「やっぱり、可愛いーーーーっ！！」
風間がいきなりそう言い、キャトルを胸に抱きしめた。キャトルが「ぎゃーっ」と鳴いて、風間の胸をがりっと引っ掻いた。
「いったーーーーーーいっ！！」
風間の声がビルの裏に響いた。
（終）
……
最後のカード「皇帝（エンペラー）」正位置の意味。
「意思が強い」「父親」「夫」を表わす。逆位置では「無責任」「ワンマン」となる。

## 愛を占う（後書き）

では今回の占いを、新人占い師「風間祐士」がご説明しましょう。
さて、今回は痛みを伴った（^^;）大変な占いでした。
愛する人との結晶が欲しい…。それは女性にとっては切実な願いなのだと胸が痛みました。（キャトルに引っ掻かれた痛みじゃないですよ（笑））
でも、生まれるかどうか…というのは、占いで確かめるものではありません。菜々子専務にも言いましたが、占いは「予言」ではありません。あくまでも「予測」です。
このままの状態で続いた場合、どうなるか…と予測するもので、途中の環境の変化などで、いくらでも「未来」は変わります。
今回は「クロス・スプレッド」を使いました。本来は大アルカナだけで占うものです。
でも僕はより詳しく占うために、フルセット（７８枚）を使いました。…しかし、菜々子専務の占いに「女帝」が、明良副社長の占いに「皇帝」が出たのには驚きました。どちらもいいカードです。お２人がお似合いなのをカードも認めているのでしょう。
この占いも、恋占いしかり、運勢しかり、何でも占えます。ただ５枚では少ないような感も否めません。その場合は、最終結果の追加として、６枚目をスプレッドして構いません。５枚目のカードではっきりしなかった場合などにやってみてください。
タロット占いは、そんな自由さがあります。基本のスプレッドはありますが、それに固執する必要はありません。占い師ごとに作成されたスプレッドもたくさんあります。僕はそこまで行くにはまだまだですが、「風間スプレッド」なるものを、いつか編み出したいと思っています。（しかしいつになることやら（ーー；））

では、また次回にお会いいたしましょう！

## 風間の異変（戦）

「アイドル」北条圭一（きたじょう）が、同じプロダクションの「タロット占い師」であり、「悪魔祓い師」でもある「風間祐士」の様子がおかしいと思ったのは、圭一が恋人の「マリエ」を風間に紹介してからだった。マリエを見たその時の風間は、まるで雷が体に落ちたような驚きようだった。

マリエは、プロダクションのスター歌手の1人で、圭一よりも2歳年上である。またフランス人と日本人のハーフで、目は蒼く、肌は透けるように白い。そして、いつもは目立つという理由で、濃い茶色のカツラをかぶっているが、その時はコンサートの後だったので、金髪のままだった。

風間が、驚くのも無理はない…と圭一は思ったが、翌日から風間が圭一を避けるようになった。

食堂で会っても、逃げるように去って行ってしまうし、浅野の家にも来なくなった。

浅野に、何か本人から聞いていないかと尋ねてみたが、浅野も全くわからないと言った。

「まさか、マリエちゃんに一目惚れしたんじゃないだろうな。」

浅野が眉をしかめてそう言った。圭一は何かショックを受け、それから自分からも風間と目を合わせられなくなった。

そして、そんな日が1週間続いたある日、マリエが食堂でコーヒーを飲む圭一の隣に座った。

そして、圭一に頭を寄せて言った。

「ちょっと…あの風間さんて人…どういうつもりなのかしら…」

圭一は「えっ」とマリエに向いた。マリエが後ろを気にしながら言った。

「そっと、入り口のとこ見て。じっと、私を見てるのよ。ここ数日ずっとなの。」

圭一は少しだけ顔を後ろに向け、入り口を見た。確かに風間がこちらを見ている。

圭一は意を決して立ち上がった。

「ケイイチ！」

マリエが慌てて、圭一の手を取ったが、風間に向かって歩き出した。風間は目を見開いて、背を向けて逃げ出した。

「風間さん！」

圭一は走って追いかけた。風間は開いたエレベーターに飛び乗り、「閉」ボタンを連打している。

圭一は飛び込もうとしたが、ドアは閉じてしまった。

圭一は、階段を走り降りた。

もし、マリエのことを好きになったのなら、なったで言ってくれたらいいのに…と圭一は思った。

どうして、マリエの後をつけるようなことをするのか…そして自分を避けるのか、本人に問い正さなければ気が収まらないと思っていた。

圭一が階段を降りきり、エレベーターに駆け寄った。…だが、風間

は去った後だった。

……

圭一は、風間に避けられるようになってから、何度も風間に電話をしていた。だが1度も出ない。メールも返信されることはなかった。そうするうちに、風間が「私用で1週間休む」とプロダクションに届け出た事を聞いた。

圭一はあきらめず、浅野に頼んで瞬間移動（テレポート）させてもらい、風間のアパートにも行ったが会えることはなかった。

瞬間移動は長い距離を移動したり、何度も繰り返すと、生体にかなりの負担をかける。

浅野は5日通った時点で「もうやめた方がいい」と言った。そして「何か結界みたいなのを張ってるな。」と眉をしかめていた。

（風間さん…まさかプロダクションをやめるんじゃ…）

圭一はそこまで考えた。そうなる前になんとか風間と話して、思いとどめさせなければならない。

…しかし、何もないまま1週間が過ぎた。

……

圭一は、朝、風間がプロダクションビルに出勤してくるのを待った。姿を先に見られないように、応接セットのついたてに隠れるようにして、ガラス張りのエントランスから外を見つめた。

すると、マリエが入ってきた。茶色のカツラをかぶり、サングラス

をしている。圭一は声をかけずに、マリエが、受付の女性に挨拶をしながら中へ向かうのを見送った。

その時である。

横断歩道の向こうで、風間が電信柱に隠れてマリエを見ているのを見た。

圭一は慌ててついたてから飛び出し、エントランスから出ようとして、はっとした。

風間が両手を差し伸ばし、手で円を形作るとそのまま広げた。しかし口はしっかり閉じたままである。そして、人差し指を額に当てた。

すると、マリエの悲鳴が聞こえた。

圭一が驚いて振り返ると、エレベーターに乗ろうとしていたマリエが背中から引っ張られるように、後ずさりしている。

「！！マリー！」

圭一は思わずマリエの本名を呼び、マリエに駆け寄った。

「何！？何なのよ！」

マリエはそう叫んでいる。圭一はマリエの体を前から抱き締め、風間の方を見た。

風間は、開いた両足を踏ん張るようにして人差し指を額に当て、強く目を閉じている。

（何かを祓ってる！…それも…マリーの何かを…）

圭一はそう思ったとたん、涙が溢れるのを感じた。

「ケイイチ！助けて！体が…引っ張られる…」

マリエが圭一の体にしがみつきながら言った。

圭一は「頑張って！耐えるんだ！」と言った。２人は必死に踏ん張っているにもかかわらず、エントランスに向かって、ずるずると足が引きずられている。

それを見ている周りの研究生たちや、受付の女性がうろたえていた。

圭一は、必死にマリエの体を抱きしめたまま、風間を見ていた。風間の顔がかなり歪んでいる。

その時、駐車場から上がって来た浅野が、エレベーターから降りてきた。

そして圭一達を見、遠くの風間を見て目を見張った。

「きゃあっ！」

いきなりマリエがそう叫び、弾かれたように圭一の体にもたれてきた。ずっとマリエの体を引っ張るように抱きしめていた圭一は支えきれず、マリエを抱きしめたまま仰向けに倒れた。

「圭一君！」

浅野が思わず、倒れた圭一とマリエのそばにかがみこんだ。

「浅野さん！風間さんを！」

圭一が泣き出したマリエを抱き締めながら言った。

浅野が風間がいた方を見ると、風間はその場にあお向けに倒れてい

た。
通行人の男性が慌てるように風間にかがみ、携帯電話を取り出している。
浅野は、ビルの外へ飛び出した。

……

風間は、意識を失ったまま救急車に乗せられた。救急車には、浅野が同乗した。
だが病院に着く前に、風間が救急車の中で目を覚ました。

「！風間君！大丈夫か！？」

浅野が呼びかけると、風間は驚いた表情で救急車の中を見渡した。
救急隊員が「大丈夫ですか？どこか痺れてないですか？」と風間に言った。
風間は目を見開いたまま、呟くように言った。

「救急車…初めて乗った…」

それを聞いた浅野と救急隊員は、思わず笑った。

……

「初めてマリエさんに会わせていただいた時、もうその「生霊（いきりょう）」が見えたんです。」

風間は念の為と入院させられた病院のベッドに寝たまま言った。
ベッドの側には、浅野、圭一、マリエが座っている。

「怖がらせてはいけないと思って…圭一さんにも言えずにいました。すいません。」

圭一は涙を手で拭いながら、首を振った。マリエも目をハンカチで押さえている。

「最初は生霊だとわからなくて、悪魔の類だと思ったんです。今まで「霊」が見えた事はありませんでしたから…。でも見れば見る程、何かがおかしいと思っていたら、それが、マリエさんの前の彼氏だとわかって…そして、その彼氏がちゃんと生きていることもわかりました。」

マリエの前の恋人は独占欲の強い男だった。マリエがその恋人に結婚を迫られた時、マリエは、まだ歌手を続けたいと思っていたため、その恋人の家に行き、別れ話を切り出した。すると元恋人は逆上して「結婚すると言うまで外へ出さない」とマリエをそのまま監禁し、最後には、マリエの首を絞めて殺そうとした。…それを助けたのが、圭一だったのだ。

風間はその全てを「生霊」から知った。そして、まだその恋人がマリエに強い未練を持っている事を感じた。

「生霊は悪魔のように祓ってしまうと、生体の命すら奪ってしまう可能性があります。それだけはあってはならないので、1週間お休みをもらって、師匠の残した奥義書を片っ端から読んで、術を探しました。そして、ギリギリ最後の7日目に見つけたんです。」

風間は目を閉じて、思い出すように言った。

「「生ける魂を救い、邪なる気を祓え」…それが術の言葉でした。…でも言うのは簡単ですが、祓うのは簡単じゃなかった…。生霊は

思っていたよりも強くて…なかなか剥がれてくれなかった。そのために、マリエさんの体にもかなりの負担がかかったと思います。圭一さんが、マリエさんを強く抱きしめてくれてなかったら、マリエさんごと陣に吸い込んでいたかもしれません。…僕の力はまだまだだと思いました。」

風間はそう言ってからため息をついた。しばらく静寂が訪れた。

「風間さん…」

圭一が風間の手を取って言った。

「僕、とんでもない勘違いをしていて…」

「……」

「風間さんがマリーのこと好きになったんじゃないかって…思ってて…」

それを聞いた浅野は、すっと目を反らせた。マリエがうつむいた。皆、同じことを思っていたからだ。

風間が笑いながら言った。

「そう思われても仕方がないな…とは思ってました。…本当はそう思われたままで、ずっと黙っているつもりでした。これで圭一さんとの友情が壊れても仕方がないって…。そしてプロダクションやめようって…」

風間がそう言って、涙をこぼした。

「でも、僕、うまく…さりげなく祓えなくて…結局…こんなに大騒ぎになってしまって…ごめんなさい…」

「風間さん！これでよかったんです！…何も言わずに辞められたりしたら…」

圭一がそう言って、一緒に泣き出しベッドに伏せた。

浅野が、ほっと息をついて立ち上がった。そしてマリエに目配せした。マリエはうなずいて立ち上がり、浅野に手を引かれて病室を出た。

圭一と風間はしばらく2人で泣き続けていた。

……

翌日ー

プロダクションの防音室（本来は歌手が新曲等のレッスンをするための部屋）で、風間はテーブルの上にスプレッドしたカードを見つめていた。

顎に手を当て、考え込んでいる。

そのテーブルを挟んだ向かいに、マリエが不安そうな表情で風間を見ていた。

風間は顔を上げ、マリエにいきなり言った。

「…いったい、圭一さんのどこが心配なんです？」

「えっ！？」

マリエは面食らった表情をした。

「どこって…」

「ぜんっぜん、心配ないですって！圭一さんはマリエさんの事を全力で愛してます。」

風間のストレートな言葉に、マリエは顔を赤くしてうつむいた。風間は微笑みながら言った。

「そりゃ圭一さんは、アイドルにならなくてもモテる素質を持っています。マリエさんは、圭一さんがあまりにもモテるので、何かの拍子に他に心を奪われるんじゃないかと心配なのではないですか？」

「そっそう！そうなのよ！」

マリエは何かほっとしたように、しゃべりだした。

「だって、ケイイチって誰にでもいい顔をするんだもの。他の女性に見せる笑顔を見たりするたびに、何か不安みたいなのを感じちゃって…。「この子可愛いから、もしかして…」なんて考えだしたらもーっ！！」

マリエはそう言って、かぶったカツラを両手で押さえる格好をして、悶えるような動きをした。風間は驚いたように目を見張って、そんなマリエを見ている。

マリエはいきなり両手を離し、風間に顔を寄せるようにして、まくしたてた。

「私、年上じゃない？それも2歳もよ！…男の人って、どっちかというと、年下の方が好きじゃない！だから、年下の可愛い女の子に本気で言い寄られたりしたら、ケイイチがフラフラーっとその子に気を許しちゃって、とうとうその子を本当に好きになっちゃって、しまいには私をぽいっなんて…」

「マリエさん、マリエさんっ！！落ち着いて下さい！」

風間が慌てて立ち上がり、マリエの両肩を押さえた。マリエは息を

切らしながら、はっと風間を見た。風間は苦笑しながら手を離し、椅子に座り直した。

「考え過ぎですって。さっきも言った通り、圭一さんはマリエさんを全力で愛しています。このカードを見て下さい。」

風間はそう言うと、最後にスプレッドしたカードを指差した。マリエはそのカードを見た。

白馬にまたがった子供が満足げな顔をしている。その上には太陽が降り注ぎ、その子供を見守っているようだ。

「太陽（サン）正位置（アップライト）」

マリエは顔を上げ、微笑む風間を不思議そうな表情で見た。

「…どういう意味？」

風間は微笑んで答えた。

（終）

……

最後のカード「太陽」正位置の意味

「幸福な結婚」「誠実」「喜び」を表わす。逆位置になると「失敗」「破局」となる。

## 風間の異変（戦）（後書き）

では、今回は新人占い師ではなく「悪魔祓い師」の「風間祐士」が「生霊」についてご説明しましょう！
いやー…今回は、ほんとーに、圭一さんと破局（笑）するかと思いました。
でも「悪魔祓い師」とはそんなもので、一般の方には理解されにくい立場ではあります。ストーカーまがいのことをしなきゃいけなかったりしますからね。それも声を出せなかったので「言霊（ことだま）」の力を使えず、念だけで祓うのは大変でした（ー ー；）
それに、相手は圭一さんの愛する「マリエ」さんだったから、なんとか祓いきらなきゃと、よけいに力が入っちゃいました。その為に、マリエさんに必要以上の不安を持たせてしまいました。（ほんとごめんなさい）
でも最終的に信じてもらってよかったですよ。でなきゃ、ほんとに「ストーカー」ですからね。充分に注意しないと警察沙汰になっちゃいます（ー ー；）
あ、「生霊」のお話でした。「生霊」は、今回のお話でもおわかりの通り、死んだ人の霊より質（たち）の悪いモノです。
怨念や未練が強ければ強いほど、強大な力を持ちます。ですが本気で祓ってしまうと、生体そのものにも影響を与えるので、ほんとやっかいな祓いになります。
「生霊」は、「幽体離脱」と同じようなものです。ただ無意識に起こった「幽体離脱」ならば、霊が勝手に抜け出るだけなので大したエナジーは使いませんが、霊能者など、自分の意思で幽体離脱をしようとすると、とんでもないエナジーを必要とするのだそうです。
（実際に生体が痩せたりするのだそうです。…誰ですか？それなら幽体離脱してみたいというのは…（ー ー；））
今回の「マリエ」さんの元彼の場合は、強い未練に寄って起こされ

た「半意識」的な幽体離脱と考えられます。幽体離脱後の生体は眠っているので、昼間でも「マリエ」さんに憑依していた元彼は、いったいどういう状況にいる人なのかな…と、後でこっそり浅野さんに見てもらったら、元彼はまだ刑務所にいるのだとか。まぁ刑務所でもずっと寝てられる訳ではないでしょうから、休憩時間などに幽体離脱をしていたのかな…と思います。
元彼が刑務所から出たら危ないんじゃないかと思われるでしょうが、今後は「マリエ」さんをテレビで見ただけでも、恐怖を感じさせるくらいの術で祓いましたので大丈夫です。
…しかし、圭一さんとマリエさんって、本当にお似合いのカップルです。…でも、どっちかというと、圭一さんが尻に敷かれそうですかね（笑）
では、また次回にお会いしましょう！

## 恋するのっぺらぼう（戦）

「おい、のっぺらぼう」

黒いランドセルを背負った男児2人が、うつむき加減に歩く赤いランドセルを背負った女児に言った。女児は無表情に歩いている。

「のっぺらぼう、何か言えよ。」

ひとりの男児が、そう言いながら笑った。隣にいる男児もにやにやと笑っている。

「かわいそうになあ…」

通りすがりの男の言葉に、男児達がぎくりとして男を見上げた。

「人をいじめたら、悪魔がくっついてくるのになぁ…かわいそうになぁ…」

男はそう言って通り過ぎて行った。

男児達は止まって男を見送っている。
女児も立ち止まって男を見送っていた。

……

もちろん、男とは風間の事である。

風間は角を曲がってから、ため息をついて立ち止まった。

後ろを振り返ったが、誰もついて来ない。

「ちゃんと聞こえたかな…」

そうつぶやいて、前を向いて歩き出そうとした時、前の角に赤いランドセルの女児が立っていた。

風間は目を見開いた。

「お兄ちゃん…ほんと？」

女児は風間に言った。

「人をいじめたら、悪魔がつくの？」

風間は目を見張って、女児を見ていた。女児の背中に、本当に「のっぺらぼう」の妖怪がついている。

「…本当だよ。」

風間は目を見張ったまま答えた。

「どんな悪魔がつくの？」

「その子の性格による。…君には「のっぺらぼう」がついてるよ。」

「！！」

女児は驚いて、目を見張った。

女児の肩にいる「のっぺらぼう」が「しーっ」と口…はないので、口の辺りに人差し指を当てている。

「だけど、のっぺらぼうは悪魔じゃない。いい妖怪なんだ。ただ、寂しがり屋でね。君が寂しがっているのを感じて、君についてる。」
「…！…」

女児は少しほっとしたような顔をした。

「…私が寂しいから…いてくれてるの？」
「そう。…そもそも、君はどうしてのっぺらぼうなんて言われてるんだい？」
「…表情が無いから…」
「表情がない？」

風間が聞き返した。そういうふうにも見えないが…と思った。

「お母さんが言ってたけど…赤ちゃんの時から、あまり笑わない子だったんだって…。皆が大笑いするような先生の話でも…自分では何がおもしろいのかわからなくて…いつも独り黙ってる。…それで…」
「のっぺらぼう…か。」

風間は施設に入った時の事を思い出した。親が消えてから、しばらくは風間も表情も感情も何もかも抜け落ちた時期がある。…この子もそうなのではないか…？

「君、ご両親は？」
「お母さんだけ。…いつも働いてて家にいないの。」
「！…そう…か…。今日もかい？」
「うん。でも夕方に一回帰ってきて、ご飯作ってから、また出て行くの。」
「夜も働いてるの！？」

「そう…朝まで帰ってこない時もあるよ。」
「！！」
生活のためとはいえ、こんな小さな子を独りきりで朝まで家にいさせるなんて…と風間は思った。
「そりゃ、のっぺらぼうが付くはずだよ。」
風間が言った。女児は顔を上げて風間を見た。
「さっきも言ったけど、君についているのっぺらぼうは、悪い妖怪じゃない。それも君とおなじくらいの子どもの妖怪だ。きっと君をずっと守ってくれるよ。」
風間が微笑んでそう言うと、女児の肩にいるのっぺらぼうが、必死に何度もうなずいた。
「ほんと！？…それなら…これから「のっぺらぼう」って言われても、嫌じゃなくなるかな…」
「…そうだね。」
「お兄ちゃん、ありがとう！」
「ん。君、名前はなんだい？僕は祐士っていうんだ。」
「…さえ…」
「さえちゃんね。気をつけて帰るんだよ。」
「うん！」
女児は笑顔を見せて、走りだした。
風間は微笑んで見送った。
（…しかし…なんだ？この胸騒ぎは…）

風間はふと真顔になって思った。何かが起こるような気がしていた。

……

風間は夜、自宅でカードをスプレッドしていた。
さえのことが気になる。

「剣8（スウォード）、正位置（アップライト）！」

1枚引き（ワンオラクル・スプレッド）で占った風間は思わず声を上げた。
カードの絵柄は、地面に刺されている8本の剣に囲まれた女性が、体を縄で縛られ、目かくしをされている。

「……」

風間は更に詳しく占おうと、カードをまとめシャッフルし始めた。

……

翌日、風間は昨日と同じ道でさえを待っていた。
小学校は終わったようで、児童達が何人か通って行く。
しかし、子どもたちの波が切れても、さえは現れない。

（どうしたんだろう？…昨日、家まで彼女を送るんだったな…）

風間がそう思った時、さえをいじめていた男児2人が通りかかった。

「！…君たち！」

風間は思わず声を掛けた。男児達はぎくりとした目で風間を見上げた。

「さえちゃんがいないようだけど…」

風間が硬直して動かない男児達に言った。

「…今日…休んでた…」

独りの男児が呟くように言った。

「！休んでた！？」

男児達がうなずいた。

「…学校にも連絡がなくて…先生が家まで行ったけど…後は知らない…」

「！！…ごめん、さえちゃんの家を教えてくれるかな…ちょっと心配な事があって…」

男児達は顔を見合わせたが、やがて2人とも風間を見上げて、うなずいた。

……

風間は男児達に連れられて、さえの家に言った。

小さなハイツだった。その1階の端の部屋の前に、男児達は立った。

「ここかい？」

男児達がうなずいた。

「ありがとう。君たちはもう帰ってくれていいよ。」

男児達は不安そうに顔を見合わせたが、2人とも頭を下げて帰って行った。

（いい子たちじゃない。）

風間はそう思いながら、人差し指を額に当てた。そして、2人についている「インプ（＝子どもの悪魔）」を声を出さずに祓った。

風間は、玄関に向いてインターホンを探した。

だが、ない。

風間は仕方なく、ドアをノックした。

「さえちゃん！祐士だ！いたらドアを開けてくれ！…さえちゃん！」

風間はそう言いながら、何度もドアをノックした。

だが、ドアが開く様子がない。中に人がいる様子もない。

「…いないのかな…」

風間は途方に暮れて立ちすくんだ。すると、年の入った男性がこわごわと角から顔を出した。

「…あの…どちら様ですか？」

「え！？…あっ、管理人さん！？」

「はぁ…そうですが…」

管理人は何かおどおどとした目で、風間を見ている。
風間が言った。

「すいません！ここ…さえちゃんっていう女の子がいると思うんですけど…」
「ええ…今朝入院したそうですが…」
「！？入院っ！？」
「はぁ…夜中に熱を出していたんだそうですが、朝、母親が帰って来た時はもうだいぶん酷い状態になっていたそうで…」
「！！…病院はどこですか！？」
「…確か…近くの…」

風間は病院の名前を聞くと、管理人に頭を下げて走りだした。

……

風間は病院の前で、タクシーを降りた。
降りて、驚いた。

病院の建物自体が黒い霧に包まれている。…しかし、それは風間にしか見えていない現象だ。
…つまり、悪魔の何かがこの病院にとりついている。

（まさか…さえちゃんに何か…）

風間は病院に入り、ナースステーションに向かった。そして、さえの病室を尋ねた。
だが「さえ」しか聞いていなかったので、看護婦が不審げな顔をした。

「あの…どういったご関係の方ですか？」

看護婦が風間に言った。

「友人です。会えば、さえちゃんもわかってくれます！ご不審なら、一緒についてきてもらえませんか？お願いします！緊急を要するんです！」

風間は必死に看護婦に訴えた。

「あなた独りで不安なら、お医者様も連れてきて下さって構いませんから！」

風間がそう言うと、看護婦はやっと納得してうなずいてくれた。

……

風間は、看護婦2人について、さえの病室に向かった。

看護婦の1人が、ドアをノックした。

そして、開けようとした。

「待って！」

風間は思わず看護婦を押しのけ、自分がドアにへばりついた。そしてドアの中の様子をうかがうように、ドアに耳を当てた。

看護婦達は、不審げに風間を見ている。

「あの…やっぱり…」

看護婦がそう言いかけると、風間は「しっ」と人差し指を口に当て

た。

「…やばい…やっぱり中に何かがいる…」

風間はそう呟くと、看護婦達に振り返って言った。

「ドアから離れていて下さい…そう…あの角に隠れて！」

看護婦達は驚いた目で顔を見合わせると、慌てるように風間の言う通りにした。

風間はそれを見届けると、一つ息をつき、ドアに向かって両手を差し出した。

「鏡の陣！」

小さな陣が現れた。風間は両手を広げた。

陣が膨らんだ。その陣の中には、ドアの向こうの病室の様子が映っている。

風間は目を凝らして陣が映すものを見た。

ベッドにさえが寝ている。…そして風間に見えたものは…。

「狐狗狸（こっくり）！？」

狐とも狸ともわからない、何かの動物の形をした妖怪がさえの胸の上に座っている。

風間は人差し指を額に当てた。

「道を開き、我を導け！」

風間がそう叫ぶと、ドアが勝手に大きく開いた。
すると、強い風が風間を襲った。風間は大きく飛ばされ、廊下に体を打ちつけた。
看護婦達が悲鳴を上げ、お互いを抱くように座りこんだ。近くを通っていた医者や患者達も思わずその風に体を屈めた。

『…礼徳の弟子か…』

狐狗狸の妖怪が言った。竜巻の中にいる。

『身の程知らずが！お前などに私が祓えるわけなかろう！』
「なぜ、さえの傍にいる！？」

風間は体を必死に起こしながら言った。

『この子が呼んだからだ。…それも中途半端な儀式でな。』
「！！」

さえは、夜、独りで「狐狗狸」を呼ぶ儀式をしたのだ。…もしかすると、自分をいじめている男児達に仕返しをするつもりだったのかもしれない。
風間は、遠く病室の中で寝ているさえを見た。「のっぺらぼう」がいない。…「狐狗狸」に追い払われたのかもしれない…と風間は唇を噛んだ。

（くそ…どうすればいい…？）

風間はまだ止まない風を受けながら思った。だが、風が強くてどうしても立ち上がれない。看護婦達も座りこんだまま動けないでいる。
風間は人差し指を額に当てた。…しかし、なんの術を使えばいいの

か思い浮かばない。

その時、小さく声がしたような気がした。

「？…のっぺらぼう？」

風間は風の音の中に「のっぺらぼう」の必死に叫ぶ声を聞いた。

「…！…」

風間はそれを聞きとると「狐狗狸」に向かい、人差し指を額に当てたまま叫んだ。

「逆流の渦！」

陣が渦を巻き始めた。

「野箆坊召喚！」

渦が小さな体の「のっぺらぼう」を吐き出した。そしてその「のっぺらぼう」は、とたんに体を大きく膨らませた。

『ばかめ。お前なんかにやられる訳がなかろう。』

狐狗狸は、ふんと鼻を鳴らして言った。

だが次の瞬間、恐怖に顔を強張らせた。

『！！お前は…！』

「のっぺらぼう」のはずの顔に、大きな一つの目が突然開いた。そ

して、顔の下の方に真一文字に筋が入ったかと思うと、それが大きく開いた。
「！！だましたな！！」
「狐狗狸」はその言葉とともに、一つ目ののっぺらぼうに呑み込まれた。
風間は座りこんだまま、呟くように言った。
「…ダイダラボッチ？」
すると、一つ目ののっぺらぼう…「ダイダラボッチ」が風間に振り返った。
『息子が迷惑をかけたの』
「えっ！？…のっぺらぼうの親って、ダイダラボッチなのっ！？」
『うちの場合はの。いろんなケースがある。』
「ケースって…」
風間はそう思わず苦笑しながら、立ち上がりながら言った。
「さえちゃんは大丈夫なんだな？」
『…うちの息子も、人間の子を好きになっちまうなんて…困ったもんじゃ。』
ダイダラボッチは、背中から現れた「のっぺらぼう」を肩に乗せながら言った。
『じゃが、この子の気の済むまで好きにさせるさ。』
ダイダラボッチはそう笑いながら言い「のっぺらぼう」を見上げて

消えた。
残った「のっぺらぼう」は、病室に入って行った。
風間も病室に入ろうとして、後ろを振り返った。
「あっ…すいませんでした！お祓いは終わりです！もう大丈夫ですので！」
風間はそう言うと、座り込んだまま動かない看護婦達や医者、患者に頭を下げ、病室に入りドアを閉じた。
皆、しばらく呆然として動かなかった。
……
「さえちゃん…大丈夫かい？」
風間がゆっくりと目を開いたさえに言った。さえは目を見開いて風間を見た。
「…お兄ちゃん…」
「お母さんはどうしたの？」
「…お仕事…」
「…そう。」
こんな日くらい休めばいいのに…と風間は思ったが、ここでは言わない事にした。
「さえちゃん「コックリさん」を独りでやったんだね？」
さえは驚いた目をしたが、やがてうなずいた。風間は首を振りながら、さえに言った。

「コックリさんは、単に悪戯が好きなだけの「のっぺらぼう」と違って、悪霊に近いものなんだ。これからはやっちゃだめだよ。」
「…はい…」
「でもね。君はラッキーだった。君を「のっぺらぼう」が、助けてくれたんだ。」
「！…のっぺらぼうが！？」
「そう。今姿を見せて上げよう。」
風間はそう言いながら、さえの体を起こした。そしてベッドから少し離れ、さえに向かって両手を差し出した。
「鏡の陣！」
風間はそう言い、両手を広げた。陣が膨らむ。さえが目を見張って陣を見つめている。
「見えた？」
風間が手を開いたまま言うと、さえは目を見開いたままうなずいた。ベッドに座っている自分の姿が映っている。そのベッドの傍に、もじもじとしながら立っているのっぺらぼうの背中が見えた。
「のっぺらぼう、陣に向け。」
風間がそう言うと、のっぺらぼうはうなずき、陣に振り返った。
さえは笑顔になり「わあ！」と声を上げた。
のっぺらぼうの顔は本当に何もなかった。ただ、真っ白ではなく、真っ赤になっている。その両手はもじもじと、着物の裾を掴んでいた。

さえは鏡を確認しながら、のっぺらぼうのいる辺りに手を回した。
ずると、のっぺらぼうがびっくりしたように体を強張らせた。鏡に
のっぺらぼうの肩にさえの手が乗っている。

「私の手が乗ってるの…わかるの？」

さえがそう言うと、のっぺらぼうがうなずいた。

「…助けてくれてありがとう…これからも、ずっと一緒にいてね。」

さえのその言葉に、のっぺらぼうは何度も大きくうなずいた。
風間は思わず、くすくすと笑った。

……

「ダイダラボッチの息子とはねぇ。」

病院から出た風間は、道を歩きながら呟いた。

「…ちなみに、お母さんは誰なんだろう？」

風間がそう言うと、胸もとに何かを感じた。
風間は苦笑しながら、カードを取り出した。

「うそぉっ！！」

カードを見て、風間は思わず叫んでいた。「死神」のカードだった。

（終）

……

女児「さえ」のことを心配した風間が引いたカード「剣８」正位置の意味

「身動きの取れない状況」「病気」「危機」を表わす。逆位置は「悪化」「事故」を指す。どちらにしても悪い意味のカードである。

## 恋するのっぺらぼう（戦）（後書き）

さて、今回も占い師ではなく、悪魔祓い師の「風間祐士」が、「コックリさん」のお話をしましょう。「コックリさん」と聞いただけで、ぞっとした方いらっしゃると思います。僕自身はしたことはありませんが、小学生の時、女の子達が放課後や昼休みに教室の隅でこっそりやっていたのを見たことがあります。

「コックリさん」は、本来3人でするもので、５０音を書いた紙の上に１０円玉を乗せ（１００円玉ではだめらしい）その１０円玉の上に3人の人差し指を乗せてするものだそうです。そして質問に対して「コックリさん」が答えてくれるのだそうな。…まるで人ごとのように言っておりますが、これは全く間違ったやり方であり、本当のところ、これでは「狐狗狸」は召喚できません。（逆にほっとした方いらっしゃるのでは？）それを証拠に、質問してから１０円玉から手を離してみて下さい。１０円玉だけで動いていれば、それは確かに「狐狗狸」が降臨したかもしれませんが、実際には動かないはずです。…ですが、途中で手を離すと、本当に「狐狗狸」が降臨していた場合は、憑依されてしまいますよ。ま、やめた方がいいでしょう。…召喚できない…といいながら、降臨しているかもしれないような事を書くのは、時々、傍にいる地縛霊等が憑く場合があるからです。これは「狐狗狸」ではないですが逆にやっかいなことになるので、やはりこういった儀式はやらないに越した方がいいでしょう。下手したら、一生付きまとわれることになりますからね。

さて、今回「さえ」ちゃんは、独りで「狐狗狸」を呼びだしてしまったわけですが、中途半端な儀式にも拘わらず、どうして本当の「狐狗狸」に憑依されてしまうことになったのか…。それは「さえちゃん」の念（それも怨念）が強かったことにあります。さえちゃんは僕に「これからは、のっぺらぼうって呼ばれても嫌じゃないかな」と言ってくれていたのですが、やはり心の中では悲しくて仕方がな

かったのでしょう。もしかすると、それまでも何回か独りでやっていたのかもしれません。でないとあれだけ強い「狐狗狸」は現れなかったと僕は思います。
それを、一旦「狐狗狸」に追い払われた「のっぺらぼう」が僕の力を使って、父親「ダイダラボッチ」に「狐狗狸」を呑み込ませてしまうのですが、実際にはこう簡単には参りませんので、本当に興味半分で悪魔を呼んだりしないようにして下さいね。
では、また次回にお会いしましょう！

## 崩壊する歌声（戦）

「圭一さん、新曲ですか！！」

風間祐士が、浅野のマンションのリビングのソファーに座り、嬉しそうに叫んだ。隣に座っている北条圭一が笑った。

「新曲と言っても「ケルティック・ウーマン」が歌っている曲で…」

「カムチャッカ？」

風間がそう聞き返すのを聞いて、向かいでコーヒーを飲んでいた浅野俊介が吹き出した。

「それは、ロシアの方にある島だろう。…全然違うじゃないか、風間君。」

圭一が腹を抱えて笑っているのを見ながら、風間は不思議そうに浅野に向いた。

「今、圭一さん、なんておっしゃったんですか？」

「「ケルティック・ウーマン」…アイルランドの４人組の歌手だよ。天使の歌声と言われている。讃美歌やクラシックを中心に歌っているグループだが、圭一君が今回歌うのは、彼女たちがカバーした歌だったよな。」

「はい。「ユー・レイズ・ミー・アップ」という曲です。」

圭一がやっと笑いを収めて答えた。浅野が呟くように言った。

「日本では「ケルティック・ウーマン」が有名だが、世界中でいろ

んな歌手にカバーされてる名曲だよな。よく許可が取れたね。」
「ええ。僕も半分あきらめていたんですが…良かったです。」
「かなりの話題になるんじゃないか？」
「…ええ。…責任重大ですね…。」

浅野と圭一が話しているのを聞いて、風間の頭の中はクエスチョンマークだらけになっていた。
そんな風間の様子を見て、浅野が笑いながら言った。

「ああ、風間君ごめん。とにかく、世界的に有名な歌を圭一君が歌うってわけだよ。」
「それはよくわかりました。で、「チャッカマン」…でしたっけ？」

コーヒーを飲んでいた圭一と浅野は、同時にコーヒーを吹き出した。

……

翌日ー

風間は、圭一が「防音室」で新曲のレッスンをしていると聞いて、エレベーターに乗り5階に上がった。
エレベーターから降り、「防音室3」に向かっていると、その部屋から出てきた「美しきバイオリニスト」秋本　優(ゆう)が、風間を見て慌てて駆け寄って来た。

「風間君、圭一君に会いに来たのか？」

秋本は、自分に頭を下げている風間にいきなり言った。風間は顔を輝かせて「はい！」と答えた。

「今、カムチャッカ…なんとかの歌をレッスンされているとか…って…」

秋本は意味がわからないような顔をしたが、険しい表情で風間に言った。

「今はだめだ。圭一君、かなり悩んでいてね。」

「えっ！？…圭一さんが…？」

「…サビの部分の自分の声が気に入らないって…。俺も伴奏で一緒にレッスンをしていたんだが、なかなか自分の満足する声が出ないようなんだ。今も、そばにあったパイプ椅子を蹴飛ばすしまいで…」

「！！…圭一さんが…そんなこと…」

「ああ…今までにないくらいの荒れようだよ。…ということだから、今日は圭一君に会うのはあきらめてくれ。俺も一旦退散して、1時間くらいしてから戻ろうと思ってる。」

「…そう…ですか…」

風間はがっかりしながらも、秋本に背中を押されるまま、またエレベーターに戻った。

……

「うわぁ…本当に天使の歌声ですね…」

風間は、秋本から借りたMP3プレーヤーで「ケルティック・ウーマン」の歌う「ユー・レイズ・ミー・アップ」を聞きながら言った。食堂なので、イヤホンで聞いている。隣で秋本がコーヒーを飲みながら言った。

「そうだろう。その曲のサビのところなんて、声の伸びが必要なん

だが…やはり、テノールとはいえ、男の声だと無理があるのかな…。
圭一君の声が綺麗に伸びないんだ。」
「圭一さんでもそんなことあるんだ…」
「圭一君の自滅的な稽古の仕方には慣れてるけど…今回は、まじでやばいかもしれない。…しまいには、歌わない…なんて言いだしたらどうしようなんて思ってるんだ。」
「…圭一さんの性格なら、ありえるかも。」
「ん。完璧主義だからなぁ…俺と違って…」
秋本はそう言うと、またコーヒーを飲んだ。
「圭一君が「ユー・レイズ・ミー・アップ」を歌いたいって言いだしたのは、「天使の歌声」と言われる歌手の中に、自分も加わりたいという圭一君の壮大とも言える夢が絡んでいる。…彼は、その中でいきなり壁にぶち当たったってわけだ。」
「はぁー…」
風間が突然ため息をついた。イヤホンを両手で押さえるような格好で目を閉じている。
「どうした？風間君。」
秋本が不思議そうに尋ねた。
「聞けないと思うと、よけいに圭一さんの生歌が聞きたくなる…ってのは、わがままですかね…」
風間のその言葉に、秋本が笑った。
その時、不機嫌な表情の圭一が、食堂に入って来た。
風間と秋本は少しぎくりとした表情で圭一を見た。風間は慌ててイ

ヤホンを耳からはずした。

「…圭一君。休憩するかい？」

秋本が立ち上がりながらそう言うと、圭一は黙ってうなずき、風間の隣に座った。

初めてみる圭一の不機嫌な様子に、風間はどきどきしながらも圭一を見ている。

秋本は財布を取り出し、カウンターに向かった。コーヒーを頼んでいる。圭一の分だということはすぐにわかった。

…だが、圭一はふてくされた様子で、一言も口を利かないまま、テーブルの一点を見つめている。

風間はただそんな圭一の横顔を見詰めた。すると圭一が、風間の前にあるＭＰ３プレーヤーに目をやり、それを黙って取り上げた。

「！！」

圭一はイヤホンを耳に当て、ＭＰ３プレーヤーを操作している。風間がそっと覗きこむと、やはり「ユー・レイズ・ミー・アップ」の曲でプレイボタンを押していた。

圭一はイヤホンを両手で押さえ、目を閉じて聞いていた。そして、サビの部分を口ずさんだ。

風間はどきりとした。小さな声だが、圭一の声じゃない。恐ろしさを感じる程の低い声だった。

（…この声…！）

風間は圭一の肩を見た。だが、何も見えない。悪魔が憑いている様子もない。…しかしこの声は、圭一の声ではない。

「圭一さん！」

風間が思わず、圭一の肩を掴んで揺らした。圭一が睨みつけるように、風間の顔を見た。そしてその目が一瞬赤く光ったのを、風間は見逃さなかった。

「…風間さん…何？」

目を見開いている風間に、圭一が言った。声は元に戻っているが、表情は険しいままだ。

秋本が驚いたように、コーヒーカップを乗せた盆を持ったまま、見つめ合う2人を見ていた。

「悪魔が憑いてるよ。」

風間がそう言うと、圭一は驚いたように目を見開いた。

……

「それで俺を呼んだのか。」

浅野のマンションで、悪魔ザリアベルがふてくされ気味に言った。

圭一がいないので、紅茶は風間が淹れたのだが気に入らないようだ。

「…すいません。…僕じゃ、手に負えないようなので…」

風間の隣には浅野が座っている。その浅野の表情も固い。

ザリアベルが、まずそうな顔で紅茶を飲みながら言った。

「悪魔を封じ込める声が効かない悪魔に憑かれたってわけか。」
「ザリアベル以外にもいるんですね。」
浅野が呟くように言った。かなりやっかいな相手だとも思える。ザリアベルが言った。
「救いを求めない悪魔なんて、吐いて捨てる程いるさ。本当はそっちの方が多い。」
「…どうすればいいと思いますか？」
風間がすがるような目でザリアベルを見た。ザリアベルは、またまずそうに紅茶をひと口飲むと唸るような声を上げた。
「圭一君は今どこにいる？」
「プロダクションの防音室です。独りで稽古を続けているそうです。」
「行ってみる。」
ザリアベルはそう一言いい、紅茶を飲み干して消えた。
「…まずそうな顔をしながらも、ちゃんと全部飲んで行ったな。」
浅野が残されたカップを覗き込んで行った。風間が苦笑した。
……
「！ザリアベルさん！」
圭一は、突然防音室に現れたザリアベルに驚き、椅子から立ち上がって言った。

隣にいた秋本も驚いている。

「Ｈｅｒｒ（ヘル）（＝Ｍｒ．）秋本」

ザリアベルは微笑んでそう言い、秋本に拳を差し出した。秋本が嬉しそうにその拳に自分の拳を当てた。

「クロイツさん、お久しぶりです。どうされました？」

「風間が圭一君の事を心配していたものでね。」

ザリアベルがそう言うと、圭一が申し訳なさそうにうつむいた。

「ああ…圭一君に悪魔が憑いているとか言ってましたね…」

秋本が不安そうに圭一を見ながら言った。

「クロイツさんには、見えますか？」

ザリアベルに振り返りながら秋本が言った。ザリアベルは眉をしかめながら首を振った。

「…いや…今は見えないな…。私が来るのを先に察知された可能性があるな。」

「どうしたらいいんでしょうか。」

何も言わない圭一の代わりに秋本が言った。ザリアベルは秋本に薦められ、パイプ椅子に座りながら言った。

「圭一君、歌ってみてくれ。」

「えっ！？」

圭一が目を見張り、ザリアベルを見た。秋本も驚いた目でザリアベルを見ている。

「とにかく、歌ってみてくれ。完全な声じゃない事は聞いている。…何かがわかるかもしれん。」

「…はい。」

圭一は、不安そうな表情をしながらも、秋本にうなずいた。秋本もうなずいて、ピアノの上に置いてあったバイオリンを手に取った。

「…行くぞ、圭一君。」

秋本がそう言うと、圭一は少し両足を開き、歌う体勢になってうなずいた。

秋本のバイオリンの伴奏が始まった。ザリアベルはじっと目を閉じて聞いている。

圭一が歌い出した。いつもの圭一の澄んだ声が響いた。

「ユー・レイズ・ミー・アップ」は、直訳すると「あなたが勇気をくれるから」となる。「落ち込んでいる時に、傍にいて欲しい。あなたが勇気をくれるから、私は強くなれる。」というような歌詞だ。サビにも「ユー・レイズ・ミー・アップ」という歌詞がそのまま使われている。

しかし、そのサビの「ユー・レイズ・ミー・アップ」というところで、圭一の声が急に低くなったのをザリアベルは感じ、目を開いた。何故か、圭一も秋本も気づいていない。圭一は目を閉じるようにして、歌い続けている。

ザリアベルは、低音の圭一の声に何も言わず、ただ黙って圭一を見つめていた。

『まるで、洞窟に響くオオカミの…何て言うんでしょうね…唸り声というか…そんな声だったんですよ。』

風間のその言葉通りだ…とザリアベルは思った。

しかし、圭一にも秋本にも何も憑いている様子はない。ザリアベルは、いらだたしさを感じた。自分に見えない邪悪なものが、圭一に憑いている。

歌はいつの間にか終わっていた。ザリアベルは、静かになった事に気付かずに、うつむき加減に考え込んでいる。

圭一と秋本は、思わず顔を見合わせた。

「…ザリアベルさん？」

圭一がそう言うと、ザリアベルは、はっとしたように顔を上げた。

「…すまない…。私にもわからん。…だが、必ず付きとめるから、圭一君はあきらめずに、稽古を続けてくれ。」

ザリアベルの言葉に、圭一は目を見張って「はい」と答えた。

「…君の声は、必ず取り戻す。」

ザリアベルはそう言うと、圭一達に背を向け、姿を消した。

……

「崩壊する声！？」

風間が思わず身を乗り出して言った。向かいのソファーには、防音室から帰って来たばかりのザリアベルが、今度は浅野の淹れた紅茶をまずそうに飲んでいる。

「そうだ。圭一君に憑いている何かに声を壊されている。」

「壊されて…って…このままいくとどうなるんですか！？」

「…声が出なくなるだろうな。」

「！！」

ザリアベルは風間にそう答え、また紅茶をひと口飲んだ。そして眉をしかめた。よほどまずいようだ。…隣で浅野が何か体を縮ませている。

「そうなる前に…どうにかしないと…」

風間が呟いた。ザリアベルは黙り込んでいる。

その時、浅野の携帯電話が鳴った。浅野は携帯を開いて画面を見た途端、険しい表情になった。

「もしもし？秋本さん…何か…！？圭一君が倒れた！？」

ザリアベルの目が見開かれた。風間は思わず立ち上がっている。

「病院は！？…わかりました！すぐに行きます！」

浅野が携帯電話を閉じながら、立ち上がった。

「浅野さん、圭一さんどうしたんですか！？」

「急に呼吸困難を起こして倒れたそうなんだ。とにかく行こう！」
浅野はそう言うと、ポケットの車のキーを確認しながら玄関に向かった。
風間が後について出た。
ザリアベルはそのまま姿を消した。
……
「クロイツさん！」
ベッドの傍にいた秋本が、突然病室に現れたザリアベルに驚いて立ち上がった。
「…呼吸困難と聞いたが…」
ザリアベルが秋本に言った。
「ええ。歌っている途中で急に咳き込んで…胸を押さえて倒れたんです。」
「いきなりか？」
「ええ。検査の結果では何もないので、医者は精神的なものだろう…っておっしゃってましたが…。…クロイツさん、やっぱり悪魔か何かのせいでしょうか？」
「…可能性は高いが…全く姿が見えない…」
「…対処のしようがないというわけですか…」
秋本が腰に手を当てて、うつむいた。
その時、ドアがノックの音と共に開き、浅野と風間が入ってきた。

「！ザリアベル…」

苦笑している浅野に、ザリアベルが振り返って言った。

「急に咳き込んで倒れたそうだ。」

「発作ですか。…やはり悪魔の仕業なのかな…。」

浅野がそう言いながら、圭一の顔を覗き込んだ。

ザリアベルが、風間に向いて言った。

「風間、念の為に鏡の陣で見てみてくれ。」

「…はい。」

風間は浅野がベッドから離れたのを見てから、両手を前に差し出した。

「鏡の陣！」

風間とベッドの間に陣が現れた。秋本が驚いた目で陣を見、風間を見た。

風間が両手を広げると、陣がそのまま圭一を映し出した。

…だが、やはり何もない。影もオーラも映っていなかった。

「…だめです。…全く見えません。」

風間がそう言うと、ザリアベルがふと呟くように言った。

「全く…見えない…？」

「ザリアベル？」

浅野が何か気付いたのかと、ザリアベルを見た。
風間も陣を消して、ザリアベルに向いた。

「どうしました？」
「…全く見えない事がおかしいと考えると…。…「ファントム」かもしれん。」
「！！ファントムですか？」

浅野が目を見開いて言った。風間と秋本は不思議そうな表情でお互いの顔を見合わせた。

「浅野さん、ファントムって？」

風間が浅野に言った。浅野が風間に向いた。

「霊…つまり「ゴースト」と呼ばれる霊よりも、強い霊だよ。悪魔の類じゃない。「ゴースト」でも姿を隠す事は出来るが、普通は長続きしない。だが「ファントム」は、ずっと姿を隠したままでいられるほどの強い力を持っている。…ある意味…悪魔より質は悪いな…」
「ということは…元々は人間だったというわけですか？」
「そうだ。俺は、悪魔が圭一君の力を弱めるために、声を奪ったのかと思いこんでいたが…もしかすると、圭一君へのなんらかの恨みを持った霊の仕業かもしれない。」

ザリアベルが眉をしかめて黙り込んでいたが、急に一点を見つめたまま口を開いた。

「風間」

「！はい！」
風間がザリアベルの前に立った。
「ファントムの声を拾う事は出来ないか？」
「声を拾う？」
「ああ。霊は黙っている事ができない。常に何かを呟いているはずだ。その声を拾うことはできないか？」
「……」
風間は眉をしかめて黙り込んだ。全員が風間を見つめている。…しばらくののち、風間は目を見開いた。
そして、ベッドに向いた。
ザリアベル達は、自然に風間からゆっくりと離れた。
風間はベッドに向かい、両手を差し出した。
「奈落の陣！」
陣が現れた。浅野が驚いたように目を見開いた。秋本も不思議そうな表情で風間を見る。
ザリアベルだけが、口の端をいがませ笑みを見せた。
風間は両手を広げた。陣が広がる。
風間は人差し指を額に当てて言った。
「静寂を敷き、邪なるものの音を拾え！」
とたんに、静寂が病室を包み込んだ。
寒気のような、恐怖感のようなものを全員が感じている。

（音が無いとは、こういうことなのか。）
秋本はそう思った。
…その時、小さく声が聞こえた。
ぶつぶつ呟いている。

風間はそれを聞くと、さらに両手を広げた。陣がさらに膨らむと、声がはっきり聞こえるようになった。
しかし、日本語ではないようである。どこの国の言葉かもわからない。
突然、ザリアベルが「浅野！」と言った。
天使アルシェに姿を変えた浅野は、同時に出現させた弓矢を構え、ベッドの上の天井に向けて矢を放った。

「！！」

天井に刺さった矢の周りに白い布のような物が現れた。

「よしっ！」

アルシェ（浅野）が思わず叫んだ。だが布は矢からするりと抜け、天井をぐるぐると回りだした。

「！…だめか…！」

ザリアベルが舌打ちして言った。
その時、突然轟音が鳴り響いた。雷が落ち続けているような轟音に、全員が両耳を手で押さえ座りこんだ。
風間は、陣が消えずに跳ねたのを見た。

（しまった！陣が閉じてない！…）

陣は床で1度跳ねると、圭一の胸の上に乗った。

「！！」

そのとたん、轟音が静寂に変わり、圭一の歌声が鳴り響いた。

「ユー・レイズ・ミー・アップ」である。

皆、耳から手を離し、思わず圭一を見た。圭一はゆっくりと体を起こし、陣を抱いた。だが口は開かず、じっと目を閉じている。

（！？…圭一さんの心の声を陣が拾ってるんだ！）

天井をぐるぐると回っていたファントムの動きが緩やかになった。

アカペラで歌う圭一の声が静寂に響いている。

全員が思わずその声に聞き入っていた。ファントムが動かなくなり、やがて陣の上にするすると落ちた。

思わず全員が陣に落ちた布のようなファントムを見た。

ファントムは、まるで圭一の歌に葬られるように、陣の中へゆっくりと吸い込まれていく。

圭一が歌い終わると同時に、陣は徐々に小さくなり消えた。

音が戻った。窓の外から木々が風に揺らぐ音がし、救急車がサイレンを鳴らしながら入ってくる音がした。

「…圭一君…大丈夫か？」

アルシェは浅野に姿を戻し、圭一に言った。

圭一は答えようとしたが、声が出ず思わず喉を手に当てた。
「！…圭一さん、無理しないで！」
風間が思わずベッドに駆け寄って、圭一の背中に手を添えた。
圭一がうつむくようにして、うなずいた。
しばらく全員が黙っていた。
すると、突然ザリアベルが口を開いた。
「圭一君、どうしてファントムが君に憑いたか…わかるか？」
圭一は顔を上げて、ザリアベルを見た。
「君が心で歌うことを忘れ、技術（テクニック）を重視したからだ。」
ザリアベルの言葉に、圭一は目を見張った。風間達も目を見張って、ザリアベルを見た。
ザリアベルは続けた。
「本当に「天使の歌声」が欲しいと思うのなら、今、君が我々を助けてくれたように、心で歌うことを忘れない事だ。技術的にうまい奴はいくらでもいる。だが、君にはそういう意味では、うまくなってもらいたくない。前のままの君の歌声でいい。」
圭一の目から涙がこぼれ落ちた。風間は、その背を撫でた。
「もうしばらくしたら、君の声も出るようになるだろう。その時に、また歌を聞きに来るよ。」
ザリアベルはそう言うと、圭一達に背を向けて消えた。

風間が励ますように、圭一の背を叩いた。圭一は風間に向いて、笑顔を見せうなずいた。
浅野と秋本がほっとしたように圭一を見た。

……

1週間後ー

圭一は、音楽番組で「ユー・レイズ・ミー・アップ」を歌っていた。
その澄んだ声に、スタッフも聞き入っているように見える。
サビの部分でも、圭一は力を入れることなく自然に歌い上げていた。
最後まで伸びのある澄んだ声で歌い上げた圭一に、スタッフから自然発生的に拍手が起こった。
歌い終わった圭一は息も弾ませていなかった。まるでまたすぐにでも歌えるような、余裕の笑顔を見せている。

番組がCMに入ったと同時に、風間はテレビに向かって拍手をした。
隣に座っている浅野も拍手をした。向かいのソファーに座っている圭一が、照れくさそうにしている。その圭一の隣でザリアベルが風間につられるように拍手をした。

「すっかり元通りですね。圭一さん！」

風間が真っ赤になっている圭一に向いて言った。

「いや、それ以上だよ。」

浅野がそう言うと、圭一は頭を下げながら言った。

「皆さんのおかげです。ありがとうございます。」

風間が首を振った。浅野も「いやいや」と言い、ザリアベルを指さした。

「ほとんど、ザリアベルのおかげだよね。」

その浅野の言葉に、ザリアベルが面食らった顔をして浅野を見た。風間が身を乗り出すようにして、ザリアベルに言った。

「ザリアベルさん、結局あのファントムはなんだったんですか？」

ザリアベルは、圭一が淹れた紅茶を一口飲んでから答えた。

「一瞬、見えただけでよくはわからんが、あれの生前は、イタリア人のオペラ歌手だ。」

「！？オペラ歌手！？」

「ああ、それこそ「天使の歌声」と言われた「カウンターテナー」だった。だが咽頭がんを患って声を奪われ、がんが発覚してから1年後に死んだ。…圭一君が産まれる前だがな。」

「！…どうして、そのオペラ歌手が圭一君を？」

「まぁ、嫉妬だろうな。「天使の歌声」を持っているのは自分だけだと、イタリア語でぶつぶつ呟いていたよ。だが圭一君はまだ若いから、将来、本当に「天使の歌声」と言われるくらいに成長できるかもしれない。それを今のうちに潰そうと思ったんだろう。」

圭一がうつむいた。浅野が圭一に向いて言った。

「俺は、今でもう「天使の歌声」だと思うけどな。」

「そんな…それは言いすぎです。」

圭一が首を振りながら言った。
「天使の歌声かどうかはわからないが、…圭一君はこのままでいいと思う。」
そのザリアベルの呟きに、圭一が嬉しそうにした。すると風間が少し不満気に言った。
「ザリアベルさんって、どうして圭一さんだけ「君」付けなんですか？」
「！！」
ザリアベルがカップを手に持ったまま、目を見開いた。浅野がおかしそうに笑いながら言った。
「そう言えばそうだ。…どうしてですか？」
浅野にも突っ込まれ、ザリアベルはカップをそのまま置いて、ふてくされ気味に言った。
「…恩人だからだ。」
「恩人？」
「警察官に職務質問されているところを助けてくれた。…だからだ。」
「ザリアベルさん、職質受けたんですか！！」
風間が笑い出した。ザリアベルの顔が一層不機嫌になった。
隣に座っている浅野が「こら、笑いすぎだ！」と風間をたしなめた。
風間は腹を押さえながら言った。

「…すっすいません…。だって、どんな顔で職質受けてたんだろうって思ったら…なんだかおかしくて…。」

ザリアベルは、苦笑しながら紅茶をひと口飲んだ。圭一が「風間さん！」と、笑い続ける風間に言った。

「ごっごめんなさい。」

風間はやっと笑いを収めて言った。

「…その後は、どうされたんですか？圭一さんに助けられた後…。」

ザリアベルは黙っている。圭一が代わりに答えた。

「あのまま外におられたら、また職質受けるかもしれないと思って、家に招待したんです。その時、たまたま浅野さん達の為に「クリームシチュー」を作ってて、それを食べてもらったら、喜んで下さって…。」

聞いていた風間は目を見張って言った。

「…それって…まるで浮浪者のおっさん…ふがっ！」

最後まで言わせないように、浅野が風間の口を塞いだ。…もうほとんど言ってしまった後だったが…。

浅野は、風間を背中から羽交い絞めにしながら、苦笑しているザリアベルに言った。

「ザリアベル、こいつどうします？どういう罰でいきます？」

「ええっ！？罰！？なんで罰！？」

風間が暴れながら言った。圭一が笑っている。

「…そりゃ、あれだろう…」

ザリアベルがにやりとしながら言った。

「くすぐりの刑だ。」

「！！」

風間は「嫌だーっ！！」と言いながら、もがいた。だが浅野の力は強く、なかなか離れない。

「ザリアベルどうぞ！今のうちに！」

「圭一君に任そう。」

「はい！」

圭一が笑いながら、風間のソファーに回り、両手を上げた。

「やめてーっ！！ちょっと…たんまっ！！」

風間はそう言うが、刑は執行された。

ソファーの傍の籠で寝ていたキジ猫の「キャトル」が大あくびをして伸びをすると、ザリアベルの肩に飛び乗った。

ザリアベルはキャトルに向いて「起こしたか。」と言った。キャトルは「にゃご」と鳴いて、ザリアベルの頬に自分の頬を擦り寄せた。

ザリアベルは、口の端に笑みを浮かべながら紅茶をひと口飲むと、満足そうに「ふーっ」と息をついた。

（終）

……

挿入歌「ユー・レイズ・ミー・アップ」
作：シークレット・ガーデン

## 崩壊する歌声（戦）（後書き）

……

では、最後に今回も「悪魔祓い師」の「風間祐士」が、「ファントム」についてご説明します。

「ファントム」は悪魔ではありませんが、人間が悪魔に憑かれたらどうなるか…。今回の「圭一」さんの様子でおわかりになったかと思います。

「圭一」さんは、「ユー・レイズ・ミー・アップ」を歌うと決まった時から、ファントムに憑かれていたのかもしれません。

人が悪魔（悪霊）に取りつかれると、皆が皆、おかしくなるわけじゃありません。殆どの方が、取りつかれている事に気づかずに過ごしていると言っていいでしょう。ですが、強い悪魔（悪霊）に取りつかれると、言動がおかしくなってきます。「圭一」さんもそうでしたよね。

普段なら怒らないことで、怒り出したり、泣き出したりするようになったら、疑った方がいいです。…ですが、悪魔祓い師なんて、そうそう探してもいません（大抵は僕のように隠しています）から、取り憑かれてもどうすればいいのかわかりませんよね。

そういう時は、神社や、お寺などに参られるといいですよ。完全に祓われる…という保証はありませんが、悪魔（悪霊）は少なくとも、中に入れません。そして「交通安全」でもなんでもいいので、１つだけお守りを買って下さい。（沢山買っても意味はありません。）

大抵の悪魔（悪霊）はそれで近寄る事はできなくなります。

最近は「パワーストーン」が流行っているようですね。神社やお寺などに行けない場合は、石の力に頼るのもいいでしょう。ただご自身に合う合わない石があるので、それを調べてから石を買って下さいね。わからないようでしたら、誕生石を身につければまず間違い

ありません。別に大量につける必要はありません。財布に入れられるひとかけらだけでもいいんです。ただお守りも石も大事にしてあげて下さいね。

讃美歌を聞くのもいいです。歌うともっといいですね。うまい下手は関係ありません。同じ意味で、お経を聞いたり、読んだり、書いたりするのも効果がありますよ。

では、また次回にお会いいたしましょう。

## 獏（バク）も喰えない夢（戦）

圭一と風間は能田刑事の運転する覆面パトカーに同乗し、暴走するタンクローリーを追っていた。
昼の高速道路である。本来なら渋滞して動かない時間のはずだ。
だが今は高速道路は封鎖され、暴走しているタンクローリーの後ろを圭一達の乗っている覆面パトカー、その後にも数台のパトカーが追っている。
タンクローリーの運転手は、ハンドルに頭を乗せたまま動かない。
恐らく何かの発作を起こしたものと思われる。
だが車は側壁に突っ込むこともなく、スピードは落ちることはないが道路に沿ってうまく走っていた。
…つまり、これはただの事故ではなく「悪魔」が絡んでいる可能性があるということだ。

圭一と風間はそのために、能田の運転する覆面パトカーに同乗していた。
そして一般の人には見えないが、タンクローリーの上を天使「アルシェ」と悪魔「ザリアベル」が、それぞれ羽を広げて飛んでいた。
2人ともタンクローリーを止めるつもりでいるのだが、石油が満タンに入ったタンクローリーを無理に止めれば、なんらかの衝撃で爆発する可能性があるため、すぐには手を出せないでいた。

「アルシェ！とりあえず運転手を瞬間移動させろ！」

ザリアベルが飛びながら叫んだ。

「了解！」

アルシェは姿を消した。そしてタンクローリーの助手席に出現すると、運転手を抱き、高速道路の側壁へ瞬間移動した。
能田の後ろのパトカーを運転していた警官が、タンクローリーの運転手が突然側壁に姿を現したのを見て、スピードを落とし止まった。そして助手席の警察官が、救急車を無線で呼んでいる。運転していた警察官はパトカーから降り、気を失ったままの運転手に駆け寄った。
アルシェはすぐに羽を広げ、タンクローリーを追った。

……

ザリアベルはタンクローリーの運転席に瞬間移動した。
そしてハンドルを操作しながら、ブレーキを踏んだ。…しかしスカスカという音がするだけで、全く効かない。見るとアクセルが下がったままになっている。
サイドブレーキを引いたが、同時にキリキリという音が響いた。ザリアベルは車の下に火花が散ったのを感じて、またサイドブレーキを下ろした。
火花がタンクに引火したら、爆発を起こし大事故になってしまう。

「くそっ！」

ザリアベルはそう言うと、運転席から外へ瞬間移動した。
再びタンクローリーはスピードを上げた。誰も運転していないはずなのに、アクセルは下がりっぱなしである。
風間が急に「能田刑事！」と声を上げた。運転している能田が、バックミラーでちらと風間を見た。風間が体を乗り出して言った。
「タンクローリーの前に回ってもらえますか？それで一定の距離を

置いて走って欲しいんです！」
「…わかった！」
正直、危険な行為だ。…だが、今は風間の言うことを聞くしかないと能田は思った。能田はアクセルを踏み込み、タンクローリーと並んだ。
圭一は「風間さん、どうするんですか？」と言った。
「陣をタンクローリーの下に潜り込ませて、車体を浮き上がらせます。」
「！！」
「圭一さん、窓から体を出さなくちゃならないので、足を押さえてもらえますか？」
「わかりました！」
能田はスピードを上げ、タンクローリーの前に回った。スピードが半端じゃない。車の限界能力に近かった。
風間は窓を開け、上半身を乗り出した。
タンクローリーと並んで飛んでいるザリアベルとアルシェが驚いて風間を見た。
風間がその2人に向かって叫んだ。
「陣をタンクローリーに噛ませて、浮き上がらせます！浮き上がったと同時に車を止めてもらえますか！？」
ザリアベルとアルシェは目を見開き、うなずいた。
風間はタンクローリーに向けて、両手を差し出した。
「破壊の陣！」

陣がパトカーとタンクローリーの間に現れた。風間は両手を広げた。陣が膨らむ。

「分解！！」

陣が光ったと同時に、いくつもの小型のボールに分かれた。そしてそれぞれ飛び跳ねた瞬間、タンクローリーがそれを踏んだ。タンクローリーは、ボール状になった陣の上に乗った状態で車体を浮き上がらせ、左右に揺れ出した。タイヤは道路から離れているが、かなりのスピードを出していたため、惰性で走り続けている。ボールのような陣も車体を落とさないようにして転がっている。

「今です！」

風間がそう叫ぶと、ザリアベルとアルシェは車体の前に瞬間移動し、同時に両手を前に伸ばした。タンクローリーはザリアベル達に押さえられるようにして、徐々にスピードを緩め始めた。スピードは徐々に落ち、やがてタンクローリーは止まった。それと同時に陣は、シャボン玉が壊れて行くように弾けて消えて行った。

「ふえー…」

タンクローリーと一緒に車を止めた能田が言った。風間は、車の中に体を戻した。圭一が「やりましたね！」と言いながら、強い風で振り乱された風間の髪の毛を整えた。風間は笑いながらうなずいた。

……

「…ってな、夢を見たんです。」

風間のその言葉に、向かいのソファーに座っていた浅野俊介と北条（きたじょう）圭一は、目を見張っていた。

「…すごいリアリティーのある夢だなぁ…」

浅野が拍手をしながら言った。圭一が身を乗り出して言った。

「風間さん、どうして能田刑事をご存じなんですか？」

「え？本当に能田刑事さんっているんですか？」

「ええっ！？」

浅野と圭一が体を引いた。

「えっ…ご存じないのに、夢に出たんですか？」

「はい…。うわ、僕ってすごいかも…。」

風間が言った。そしてふと眉をしかめて言った。

「…というか…これ正夢だったら…やばいですよね…」

浅野と圭一が固まった。

……

夜―

（考えてみれば…）

風間はベッドに入ってふと思った。

（昨夜のあの夢…「獏（バク）」に食べてもらったら良かった…）

「獏」とは夢を食べる妖怪で、通説では悪い夢を食べてくれると言われているが、いい夢も食べてしまう者（？）もいると言う。そのため、これまでは悪い夢を見ても、あまり関わらないようにしていたのだが…。

（もし、同じ夢を見たら、今度こそ「獏」に食べてもらおう…。）

風間はそう思うと、目を閉じた。

……

風間の夢の中…

「アルシェ！とりあえず運転手を瞬間移動させろ！」

そのザリアベルの声を聞いて、風間は思わず「ストーップッ」と叫んで飛び起きた。そして両手を前に差し出し、手で輪を形作ると「逆流の陣！」と叫んだ。手の前に、小さな陣が現れた。風間は両手を広げ、陣を膨らませた。

「獏（バク）、召喚っ！！」

その風間の声と共に、大きな茶色い毛に覆われた熊のような妖怪「獏（バク）」が、陣の向こう側に飛び出し壁に激突した。…一瞬、部屋が揺れたが、これは一般人には感じない。獏は打った顔面を押さえてうずくまっている。

「獏っ！今の夢喰ってっ！！」

風間がそう言うと、獏はよろよろと立ち上がって振り返り「「何かようかい？」って言い損ねた…」と呟きながら、風間の頭を毛むくじゃらの両手でがしっと挟んだ。風間は思わず「ひぃっ」と目を閉じて言ったが、そのまま動かずにいた。

（まさか、頭ごと喰ったりしないよな？）

風間はそう思いながら、獏が行動を起こすのを待った。…だが、獏はそのまま動かない。

「？」

風間はゆっくり片目を開いた。獏はじっと風間の頭頂部を見つめている。

「獏？…どうしたの？早く喰って…」

「喰えねぇな。」

獏が風間の頭を押さえたまま言った。風間は驚いて「えっ」と目を上げた。

「獏にも喰えないのってあるのっ！？」

「あるさ。…これは、近い将来に起こる「正夢」ってやつだ。「正夢」は喰えねぇ。」

「えーーーっ！？」

獏は両手をはずし、背を向けた。風間はベッドからジャンプして、

その獏の背に飛びついた。

「やだっ！食べてっ！正夢なら、なおの事食べてっ！！」

獏は風間の手を払った。風間はそのまま床に落ち、尻もちをついた。

「獏〜〜〜〜〜」

風間は涙目になりながらそう言い、壁に向かう獏の右足にしがみついた。

「お願いお願いお願い！喰ってっ！！お願いだから喰ってっ！！」

獏は必死に風間を払おうと右足を振るが、風間が強くしがみついて離れない。獏は風間の体を引きずりながら、風間の部屋をぐるぐると回った。風間は必死にしがみつきながら言った。

「獏ーっ！お願いですー！喰ってよー！！」

「だから、喰えないって言っておろうがっ！！」

「なんで喰えないのさっ！」

「だから「正夢」は喰えないんだって！」

「「正夢」喰ったらどうなるの！？」

獏は部屋の中を歩き回り、風間をひきずりながら言った。

「もっと最悪の結果になっちまうんだ！」

「！！！！」

「夢を見た限りでは、最後にちゃんとお前が解決しておる。…それを喰っちまったら、また夢が頭っからやり直しになっちまうんだ。そうなると、結果が違うものになる可能性が高い！」

「！」

風間はいきなり獏の足から手を離した。獏の右足が急に解放され、壁に勢いよくぶつかった。獏はぶつけた右足を抱えながら、ぴょんぴょんと飛び跳ねた。

「こっ小指だけ打ったっ！小指だけっ！！」

（あー…それ痛いんだよなー）と風間は呑気に思いながら体を起こした。

「じゃぁ、あの夢はどうしても現実になっちゃうってこと？」

「んだ。ということで、さよなら…」

「待ってっ！！」

風間は、獏の背中に飛びついた。

「何かあの夢を現実にしない方法はないのっ！？」

「ない。じゃな。」

獏は急ぐように、壁の向こうに消えた。

「！！！」

風間は壁に激突し、両手を上げたまま、ずるずると壁を滑り落ちた。

壁の向こうから「うるさいっ！」という声がした…。

……

「獏も喰えない夢もあるんだ…」

翌日、浅野が自宅のソファーで驚いたように言った。隣に座っている圭一が眉をしかめている。

「…結構、大変な夢でしたよ…。」

向かいのソファーでうなだれて座っている風間は、力なくうなずいた。

浅野が腕を組んで呻くように言った。

「最後が本当にその通りになるんだったらいいんだが…その保障もないしな…」

風間は「はーっ」とため息をついた。

「僕だって、自信がありませんよ。陣の「分解」なんてやったこともないし…」

「えっ!?やったことないんですかっ!?」

圭一が驚いて行った。風間はうなだれたままうなずいた。

「やったことないです。…て言うか、陣が分解する可能性はほぼ0です。」

「えっ!?じゃぁ、そこだけ正夢とは違うってことですか!?」

「…そういうことになりますね…。だから、本当に夢の通りのことが起こったら、別の解決方法を考えなければならないってことです。」

「別のって…」

圭一がそう呟いたまま、黙り込んだ。浅野も腕を組んだまま考え込

んでいる。
「やっぱりこういう時は…」
「？」
浅野のその呟きに、圭一と風間は不思議そうな目で浅野を見た。
「困った時の「ザリアベル」？」
「呼ぶな。」
ザリアベルが突然、風間の横に現れた。風間が椅子から飛び上がって「わーっ！」と声を上げた。
浅野と圭一が思わず吹き出している。ソファーから落ちた風間が、胸を手で押さえながら言った。
「ザリアベルさん…びっくりさせないでくださいよ…」
風間は、ザリアベルが笑いながら差し出している手を取って、立ち上がった。
「…あー…心臓が止まったかと思った…」
風間はソファーに座って、また胸に手を当てて言った。圭一がザリアベルに向いて言った。
「ザリアベルさん、紅茶飲まれますか？」
「ん。」
「ダージリンですけど、いいですか？」
「構わん。」
「わかりました。」

圭一はにっこり笑って立ち上がった。

「獏も喰えない夢だって？」

ザリアベルが、にやりとしながら風間に言った。

「そうなんです…。どうしたらいいかわからなくって…」

風間はまたうなだれながら言った。

浅野が、ザリアベルに向いて言った。

「ザリアベルは、風間君の夢の内容はもう見えてるんですか？」

「ああ、今、一瞬で見えた。…確かに最後のやり方は無理があるな。」

「…ですよねぇ…」

風間はうなだれたまま呟いた。しばらく沈黙が訪れた。ザリアベルは、圭一が置いた紅茶の入ったカップを取り、口をつけた。そして「美味い」と呟いてから言った。

「なんとか、アルシェと俺で止めるしかないだろう。」

「えっ！？」

浅野が驚いた目をザリアベルに向けた。

「２人で止めるんですか？」

「ああ。１０ｋｍくらいで、止められるんじゃないか？」

「１０ｋｍ！？」

浅野が素っ頓狂な声を上げた。

「１０ｋｍもタンクローリーを押さえたまま、バックで飛ぶんですかっ！？」

「そうだ。」

ザリアベルがにやりとしてそう浅野に言い、また紅茶をひと口飲んだ。必死に堪えていた圭一が笑い出した。風間も耐えきれずに吹き出してしまった。

「…ビデオに撮りたい…それ…」

風間のその呟きに、浅野が「おいおいー」と言って、目を手のひらで覆った。

「それはちょっと…」

「じゃぁ、お前が考えて見ろ。」

ザリアベルが苦笑するように笑って言った。浅野は「お手上げ」のポーズを取った。

その時、風間の胸ポケットから、がさっという音がした。風間は驚いて、胸ポケットから1枚のカードを取り出した。浅野達が風間に注目した。

「聖杯（カップ）の7…正位置（アップライト）…？」

風間は首をかしげた。カードの絵には、幻想の中で浮かぶ7つの聖杯を見て、男性が困惑している様子が描かれている。

「……」

風間はしばらく考え込んでいたが、やがて「そうか！そういうことかっ！」と声を上げた。

浅野と圭一が顔を見合わせた。風間の心を無断で読んだザリアベルは、にやりと笑った。

……

「ぎりぎり間に合ったな」

ザリアベルが、高速道路を暴走するタンクローリーの上を一緒に飛んでいる天使アルシェ（浅野）に言った。

「ええ。うまく行くといいんですが…」

アルシェが眉間にしわを寄せながら言った。

「ザリアベルにも見えないですか？悪魔の姿…」

「ああ、見えない…。人間界で言う「遠隔操作」ってやつかもしれん。」

「そうですね…」

「そろそろ、やるか。」

「やりましょう！」

ザリアベルはスピードを上げ、タンクローリーを通り過ぎた。

すると、タンクローリーの前を走っている覆面パトカーの助手席から、風間が体を乗り出した。

アルシェが運転席に瞬間移動（テレポート）し、運転手を抱いて道路の側壁へ避難

させた。それを見たザリアベルが覆面パトカーとタンクローリーの間に入り込むようにして、後ろ向きに飛んだ。
そして手を真横に一振りすると、黄金の剣が出現した。ザリアベルはその剣を両手に持ち替え、構えた。

「風間っ！準備はいいかっ！？」
「はいっ！」

その風間の返事を聞くと、ザリアベルはうなずいて黄金の剣を振り上げた。

「ツェアシュテールンク（＝破壊）！」

ザリアベルはそう叫びながら、黄金の剣を真横に振り、走るタンクローリーを真っ二つに切り裂いた。
タンクローリーが大爆発を起こした。
同時に風間は「逆流の陣！」と叫び両手を前に差し出した。そして陣が出現すると、両手を広げて陣を膨らませ「獏、召喚っ！」と叫んだ。
獏が陣から飛び出した。

「獏、喰ってっ！！」

獏が咆哮した。周囲が一瞬で真っ白な霧に包まれた。

……

風間は飛び起きた。

「風間さんっ！」

圭一が風間の肩に手を乗せた。風間は息を弾ませている。体中にびっしょり汗を掻いていた。

「…良かった…夢で…」

風間はそう言うと、額の汗を拳で拭った。圭一の後ろにいた浅野が、風間の頭を撫でた。

「よくやった。」

ザリアベルが、そんな浅野の隣で腕を組み苦笑している。アルシェとザリアベルは、風間の夢を覗き見ていたのだ。

…風間の思いつきは、無茶とも言えるものだった。

「正夢とは言え、夢で見ているうちは「夢」なんですよ。」

その風間の言葉を、浅野と圭一はすぐには理解できなかった。

風間は、タロットカードが導き出した結果を見て「夢のうちなら何をしてもいいんだ」という突拍子のない結論を出した。そして「今度同じ夢を見たら、夢の中でタンクローリーを爆発させてみよう」と決めたのである。

同じ夢を見た風間はその通りにした。そしてそれを夢の中の「獏」に食べさせ、なかったことにしたのである。

…結局、現実にタンクローリーが暴走するような事件は起こらなかった。ただ、本当に「正夢」だったのかどうかは、疑問の残るところではあるが…。

（終）

カード「聖杯7」（正位置）の意味

「幻想」「空想」「想像」を表す。逆位置になると「現実的」「決意」となる。

## 獏（バク）も喰えない夢（戦）（後書き）

では、今回も「悪魔祓い師」の「風間祐士」が「悪夢」についてお話しましょう！
今回は「夢」の中でも「悪夢」のお話でした。
皆さんも「悪夢」は見たことがありますよね？でも、今回のお話のように「悪夢」はあくまでも「夢」に過ぎないのです。「すぐに忘れること」「気にしないこと」が一番です。
事例の1つに、毎晩のように「海で「くじら」に追いかけられる」夢を見るという少女がいたそうです。そもそも「海を独りで少女が泳いでいる」ということ自体がおかしな話なのですが、夢の中ではどうしてもそれを「おかしなこと」とは認識できません。
すると、その少女の話を聞いた「心理学」の先生は、女の子にこう言ったそうです。

「今度「くじら」に襲われたら、そのくじらの背中に乗ってごらん。楽しいよ。」

少女は、夢の中で先生の言うとおりにしました。すると翌日から、全くその夢を見なくなったそうです。
そう。何度も言いますが「悪夢」はあくまで「夢」です。特に現実に近い「悪夢」を見た時は、そうならないように気を付けるようにすればいいのです。例えば、仕事で失敗する夢を見たのなら、その「失敗」はどうして起こったのか…と目が覚めてから分析すれば、現実に失敗することはありません。

え？悪夢は「獏」に食べさせたらいいんでしょって？…うーん…あんまり頼りにしない方がいいですよ。獏は気まぐれですから（^^；）

では、次回またお会いいたしましょう！

## ＜番外編＞特攻隊士の精霊

「へぇー…圭一君が「千の風になって」を歌うんだ！」

浅野俊介が自宅のリビングのソファーで、意外そうな声を上げた。向かいに座っている北条圭一（きたじょう）は、何か神妙な表情をしている。隣に座っている風間祐士は、圭一に「どうしたんですか？」と心配げに尋ねた。

「…僕なんかが歌っても…誰の心にも響かないんじゃないかって思って…」

「えっ！？そんなことないよ！…だって、依頼があったから歌うんだろ？」

浅野が慌てるように言った。圭一はうなずいてから「でも…」と言った。

「僕、戦争というものがわかっていないし…。」

「？…戦争？」

「ええ…。来月「戦没者をしのぶ会」をするから、そこで歌ってほしいって依頼があったんです。なんでも、その会を開く人が僕のファンらしくて…。」

「じゃぁ、そんなに心配することないんじゃない？ファンに呼ばれたんだから。」

「でも、会に出席する方には関係ないじゃないですか…。僕の事も知らない人がいるかもしれない。…そんな人からしたら、２０歳の子どもが歌う「千の風になって」なんて聞かされても…失笑ものなんじゃないでしょうか…」

「圭一さんらしくない！」

風間が急に声を上げた。圭一も浅野も驚いて風間を見た。

「圭一さんの歌は、心に響くことが評判になっているんです。圭一さんなりに…というか、圭一さんらしく心を籠めて歌えば、きっとどんな人の心も動かせると思いますよ。」

「風間君の言うとおりだ。」

浅野が感心するようにうなずきながら言った。

「君なりに、心を籠めて歌えばいいんだ。ザリアベルだって、言ってたじゃないか。」

圭一は目を見開いていたが、やがてはにかむようにしてうつむき「はい」と答えた。

風間が圭一の肩を励ますように叩いた。圭一は風間に向いて微笑んだ。

……

「だから、僕は「悪魔祓い師」で「霊媒師」ではないんですって！」

風間は、電話の向こうの相手に言った。

「え？そりゃまぁ…全く見えないってわけはないんですけど…。」

風間がしどろもどろになっている。今、風間は相澤プロダクションの会議室にいた。

以前、風間が病院で「さえ」という女の子に憑いていた妖怪「狐狗狸（こっくり）」を祓ってから、その場にいた看護婦や患者達から噂が広まり、

風間が「悪魔祓い師」だということが広まってしまった。そしてテレビ出演以外にも、一般の人から、直接いろんな依頼が来るようになったのだ。
どんな小さな仕事もできる限り受けるのが、相澤プロダクションの「売り」ではあるが、タレント活動でないことまで受けていると、風間の体が足りない。ちなみに「相澤プロダクション」に入ってからは「祓い料」は取っていない。（本来、エクソシストは「無料奉仕（イア）」が原則なのである。）

…困り果てたように目に手を当てていた風間は、ふと向こうの言葉に手を離した。

「え？…息子さんの自殺を止めてくれた？」

風間は、心が動いたのを感じた。

……

「日本兵士の霊？」

浅野は、自宅のソファーで驚いたように目を見開きながら言った。
その隣で、圭一も驚いた目で風間を見ている。

「はい。浅野さんもついてきてもらえませんか？」

向かいのソファーに座っている風間が懇願するように言った。

「幽霊は苦手なんだけどなぁ…。」

浅野は身震いして、両腕を抱きながら言った。風間が言った。

「息子さんが自殺しようとしたところを、その霊が止めてくれたんだそうです。それでお礼をしたいって…」
「お礼…って、どうするんだ？」
「霊を成仏させてあげたいっておっしゃるんですよ。」
「…何か心残りでもあるのかなぁ…」

浅野は、自分で自分の両腕をさすりながらいった。

「そうだと思うんです。正直、僕では成仏させてやれないとは思うんですが、天使「アルシェ」の力を借りればできるかなって…。」

圭一が浅野に向いて言った。

「浅野さん、僕からもお願いします！風間さんに手を貸してやって下さい。」

風間と圭一の真剣な目に、浅野はひとつため息をついてから言った。

「確かに、これは悪魔のザリアベルに…という訳にはいかないしな。わかった。明日一緒に行こう。」
「ありがとうございます！」

風間が頭を下げた。すると圭一が「僕も一緒に行っていいですか？」と風間に言った。
風間は驚いたが「もちろん！」と快諾した。

……

翌日一

風間達は、自殺しようとした「山下俊之」という高校3年生の少年の家を訪れていた。

「無理を言いまして、申し訳ありません。」

風間達の向かいのソファーに座っている、俊之の母親が言った。俊之も頭を下げている。

「いえ…。早速ですが、俊之君を助けたという「日本兵士」の霊の事をお聞きしたいのですが…。」

風間がそう言うと、俊之は「はい」と言って、涙ぐみながら話し始めた…。

……

『期待に添えなくてごめんなさい。俊之』

俊之は自筆のその遺書を読み直し、ため息をついた。…手がかすかに震えているのがわかる。

（僕…本当に死ぬんだ。）

そう自分で思った。そして遺書を畳んで、ジーパンの後ろポケットに入れた。

俊之は、目の前の木を見た。学校の中庭にあるこの木に、首を吊るにはちょうどいい太い枝がある。俊之は持っていたロープを、その枝に引っ掛けようと木を見上げた。

その時、どこからか『死ぬの？』という声が聞こえた。

「えっ…」

俊之は驚いて、辺りを見渡した。

すると、木の向こうに「兵士」の格好をした少年が立っているのが見えた。

「！！」

俊之は驚いて目を見張った。

『死ぬのかい？』

何故か怖さは感じなかった。俊之は「うん」と答えた。

『さっきのは…遺書？』

「う、うん。」

『僕も書いたんだ。』

俊之は息を呑んだ。

「でも、君…」

『僕は、まだ死んでないよ。』

「え？」

『だから君も、ちょっと待ってくれないかな？』

「一緒に死んでくれるの？」

少し間があった。

『うーん…一緒には無理だけど…僕の最期を見て欲しいんだ。』
「…最期？」
『毎年ね、お願いするんだ…誰かに。…でも、どうしてもここに戻ってきてしまう…。』
「！？」
『特攻隊って知ってる？』

俊之は目を見開いた。

「うん…知ってる…」
『もうすぐ飛び立つんだ。敵の軍艦に突っ込むの。』
「どうして、そんなこと…」
『決まってるじゃないか。お国のためだよ。』
「…お国のためって…そんなばかなこと…」
『君はなんのために死ぬんだい？』
「！！！」
『これからの日本のために僕は死ぬんだ。』
「……」
『君はなんのために死ぬんだい？』

俊之は思わずうつむいた。また間があった。

『…日本は勝つのかな…』
「！？…」

俊之は本当のことを言ってもいいのかと悩んだ。だが、意を決して言った。

「…負けるよ…」
『！…負ける！？』

「でも、負けても平和になる。」
『平和って…何？』
「みんな戦わなくてよくなって…自分の好きなことができるんだ。
…好きなもの食べられて…好きな歌だって歌える。」
『…へえ…夢のようだな。』

その少年の言葉に、俊之は泣き出しそうになった。

『じゃぁ…僕はどっちにしても死ぬ価値あるんだね。』
「どうしても死ななくちゃならないの！？」
『え？』
「逃げたらいいじゃないか！！」
『親に恥をかかせるわけにはいかないからね。』

俊之はとうとう泣き出してしまった。

『君…優しいんだね。』

少年の表情が、少し和らいだ。

『あのね。お願いがあるんだけど。』
「…何？」
『生きて欲しいんだ』
「！？」
『そして僕の未来を守って欲しい。』
「君の未来？」
『うん。僕と同じ名前で「タツヤ」っていうんだ。今、君のように
悩んでる…でも僕の声が届かないんだ。』
「！？…どこにいるの？」
『よくわからない…。ただ苦しんでる姿だけは見えるんだ。でもど

うしても僕の声が届かない…』
「…わかった…僕、頑張って探してみる。」
『ほんと！？』
「うん。」
『約束だよ。』
「うん、約束する。」

少年の顔がほっとした表情になった。

『もう…行かなきゃ。』

その時、飛行機が飛び立つ轟音が響いた。俊之は思わず空を見上げた。辺りに飛行機のエンジン音が響いている。少年は俊之に敬礼した。…同時に少年の姿が薄れていく…。

「行くな！」

俊之がそう言って、少年に抱きつこうとした。だが少年の姿が消えた。

「！！！」

轟音が響いた。俊之は、思わず両手で耳を塞いだ。

『…敵の飛行機だ…こっちに向かってくる！』

少年の声が俊之の心の中に響いた。震えている。俊之が「逃げるんだっ！」と、耳を塞いだまま叫んだ。

『だめだ！…軍艦に辿り着けない！』

「早く逃げろ！！」
『約束…忘れないで…』
俊之が泣きながら「お願いだから逃げてっ！」と叫んだ。
『…頼んだよ！』
大きな衝突音が響き渡った。
俊之は耳を塞いだまま、その場にしゃがみこんだ。
……
「僕…気が付いたら、走り出してて…手にロープを握ったまま家まで帰っていました。」
俊之はそう言って、泣き出した。母親が涙を拭いながら、その俊之の背をなだめるように撫でている。
風間達もショックで声が出なかった。…しばらくして、圭一が言った。
「「タツヤ」君を探さなくちゃ…。」
風間達がはっとして圭一に向いた。
「たぶん彼は「タツヤ」君のことが気がかりで、成仏できないんだと思います。」
その圭一の言葉に、俊之が泣きながらうなずいて言った。
「僕…あの人と約束したのに…どうやって探せばいいのかわからな

くて…」
「自分と同じ名前だと言っていたな。」
浅野が呟くように言った。風間が言った。
「恐らく、彼の子孫なんでしょう。その「タツヤ」君は何かを悩んでいて、俊之君のように「死ぬ」ことを考えているんだと思います。」
浅野が目を見開いて言った。
「…ということは、早く見つけてやらないと…」
「ええ。その「タツヤ」君は自殺してしまう…」
「風間君、探せるか？」
「…やってみます！」
風間はそう言うと、ソファーの横へ立ち上がり、両手を前に差し出した。
「鏡の陣！」
陣が現れた。俊之と母親が驚いて、その陣を見ている。風間はゆっくりと両手を開いた。陣が膨らむ。
まだ、中には何も映っていない。
「邪気を祓い、迷える魂を映せっ！」
風間がそう言うと、陣の中に兵士姿の少年が姿を現した。
「！！…あの人だ！」

俊之が言った。風間達は思わずその少年の姿を見つめた。…だが、その姿が少しずつ変わり始めた。

「!?」

全員が姿を変えていく少年を見つめた。そしてその姿がはっきりした時、俊之が「あっ!」と言った。

「…2組の「遠藤」君!!」

「えっ!?」

母親が驚いた声を上げて、俊之の肩を掴んで言った。

「あの「遠藤」君!?…T大を受けるって噂の…」

「そう…その遠藤君だ…。まさか…遠藤君も受験の事で悩んで…」

俊之が死のうとしたのは、親の期待が大きすぎて、それを負担に思っていたことからだった。（もしかすると遠藤君も…）と俊之は思った。

「…おい…ここどこだ?」

浅野が目を凝らして言った。この「遠藤」という少年の顔が恐怖に歪んでいるように見える。

「!…浅野さん!これビルの屋上!?」

圭一が叫んだ。全員が驚いて、陣を見つめた。

浅野は陣に手を乗せ、目を閉じた。

…しばらくして、浅野は「はっ」と目を開いた。

「学校か！！」

浅野は、そう叫んだと同時に姿を消した。
驚く俊之と俊之の母に、圭一が微笑みながら言った。

「浅野さん、本当に天使なんです。きっと遠藤君を助けてくれますよ。」

風間が陣を更に大きく広げた。

「…このまま、遠藤君の様子を見ましょう。」

その風間の言葉に、全員が陣に映る遠藤を見つめた。

……

「遠藤達也」は、校舎の屋上にいた。風が髪を吹き上げている。達也は柵の外に降り、下を恐ろしげに見下ろしていた。

（一瞬だ。…痛みは一瞬で終わる…）

達也はそう思いながらも、後ろ手につかんだ柵から手が離せない。
達也は、目を閉じて、ふーーっと息を吐いた。
そして、もう1度目を開いた。

「！！」

目の前に、大きな白い羽を広げた男が浮かんでいる。銀髪で、精悍

な顔つきをしていた。

「天使？」

達也は思わず言った。男は「そう」と答えた。

「アルシェだ、よろしく。おっと、手は離すなよ。死んでもらっちゃ困る。」

「！？」

達也は目を見張った。

「君の事を、ご先祖さんから頼まれてね。」

「ご先祖？」

「君、５組の「山下俊之」君って、知ってる？」

「！…Ｗ大受けるっていう…？」

「うん。…彼も死のうとしてね。君のご先祖さんに助けられた。」

「僕の！？」

「そう。成り行きみたいだけどね。」

天使はそう言うと、達也の額に指をつけ、目をじっと見つめた。その真剣な目つきに達也は目が離せなくなった。

「…あー見えた。…本人じゃないからどうかなと思ったんだが…なるほどな…」

天使はそう言うと指を離した。達也は不思議そうな表情で天使を見た。

「君のご先祖さんが、どうしてこんなに長い間成仏できないのかわ

かったよ。」
「!?…成仏できない?」
「そうなんだ。君が死を意識したのは、ごく最近なはずだ。だから君の事が心配でと言うのなら、それまでにどうして成仏できなかったのかわからなかったんだけど…」
天使は、悲しそうに目を伏せて言った。
「君のご先祖さんは、まだ自分が死んだと思っていないんだ。気の毒なことに、悪夢を繰り返すように何度も敵の軍艦に突っ込もうとして、その度に攻撃されている…。…きっと軍艦に突っ込まないと、死ねないと思ってるんだね。」
「…そのご先祖って…もしかして…」
天使は達也に、ニッコリと微笑んだ。
「知ってるのかい?」
「…はい。特攻隊士だった、ひいおじいちゃんだと思います。文武両道で、とても優秀な人だったって…。…僕は親戚の中でやっと産まれた男の子だったので、その名前をもらったのだと聞きました。確か「少尉」という階級で…身重だったひいおばあちゃんを残して、19歳の若さで死んでしまったって…。」
「…そうか…それは本当に気の毒な話だな…。きっと彼は死ねないことで、家族に恥をかかせることを恐れているんだろう…」
達也はうなだれた。
「達也君、頼みがあるんだ。」
天使のその言葉に、達也は驚いて顔を上げた。

……

「少尉！」

その声に、「遠藤達也」少尉は、自分の乗りこむ飛行機の前で立ち止まった。振り返ると、自分と同じ年齢くらいの少年が立っている。

「！…君は！」

少尉は嬉しそうに微笑み、少年の元に駆け寄った。

「僕の未来」

少尉はそう言い、少年に手を差し出した。少年は涙を浮かべながら、その手を握った。

「ひいおじいちゃん…」

「…そうか…そうなるのか、僕は。」

「ひいおじいちゃん…ごめんなさい…」

「いや、無事で良かった。これからは、自分の命を絶とうだなんて決して考えない事。約束できるね？」

「はい。」

少年が目を拳で拭った。少尉は微笑んで言った。

「それから、僕との約束を守ってくれた人…なんて名前？」

「山下俊之君です。」

「山下君か。彼の事も忘れない…。本当にありがとうと伝えてくれ。」

「はい！」

少尉は微笑んでうなずいた。

「…これで心おきなく、発(た)てるよ。」

「…ひいおじいちゃん…」

少尉は少年の手を離し、敬礼した。

「君がいつまでも幸せでありますように…そして日本がいつまでも平和でありますように。」

少年は泣きながら敬礼を返した。少尉は敬礼を解いて背を向け、飛行機に乗り込んだ。

「…遠藤、出撃します！」

その少尉の声と共に、飛行機のエンジン音が轟いた。

「ひいおじいちゃん…！」

少年が声を上げた。だが、何かを堪えるようにぐっと唇を噛んだ。少尉は少年に敬礼をして、飛行機と共に空へと飛んだ。

……

…少尉は空を見て、目を輝かせた。

『見事な日本晴だ！視界も良好！』

少尉はすぐに下を見ると、ほっとしたように言った。

『…ああ、敵の軍艦がはっきり見える！』

少尉は、機体をゆっくり下げた。

『向かう敵機なし！…このまま、突撃します！』

少尉は喜びに震えながら、レバーを両手で押し下げ、敵の軍艦に機首を向けた。

『甲板に人の姿なし！』

その時、少尉の頭の中で「ひいおじいちゃん！帰ってきて！」という少年の声が響いた。少尉は微笑んで叫んだ。

『大日本帝国万歳！！』

機体は甲板に激突し、轟音と火柱を上げて散った。

……

校舎の屋上で、達也は頭を抱えたまま座り込み、声を上げ泣いていた。

天使はじっと黙っていたが、達也のそばにしゃがみ込んで言った。

「…ひいおじいさんは…これで成仏できたよ。…ありがとう、達也君。」

達也は、頭を抱えたまま首を振った。

「…止めたかった…でも止めたら…」
「そう。同じことを繰り返すことになるだけだ。…ひいおじいさんは、君の未来のために死ななければならない…と思っていたからね。」
達也は、泣き続けた。天使はそっと、達也の肩に手を乗せた。
…そして、陣を通して最後まで見ていた俊之も、声を上げて泣いていた。母親も俊之の背を撫でながら、涙を何度も拭っている。風間と圭一も、涙があふれ出るのを堪えられなかった。
…しばらくして、圭一がつぶやくように言った。
「僕…「千の風になって」を、遠藤少尉のために歌います。心を籠めて…少尉に届くように…」
風間は涙を拭いながら、微笑んで圭一の肩を叩いた。
……
翌月一
「戦没者をしのぶ会」のステージで、圭一は「千の風になって」を歌っていた。
客席は静まり返っていた。皆、真剣な表情で、歌う圭一を見ている。中には目を閉じて聞いている人もいた。…そして、その最後列に、浅野、風間、俊之、そして達也もいた。
突然、達也が思い出したように声を震わせて泣き出した。その肩に、俊之も涙ぐみながら手を乗せた。

達也は目を拭いながら、俊之と微笑みあった。

…その時、空いていた達也の隣の席に、すっと少年が座った。

「！！」

達也と俊之が驚いて、その少年の横顔を見た。

「…ひいおじいちゃん…」

達也が思わず呟いた。少年は微笑んで、目を見張っている達也達に向いた。

『素敵な歌声だね。心に沁みるよ。』

少年が言った。達也は、涙を堪えるような表情をしてうなずいた。

俊之が微笑んだ。

少年はまた前を向き、目を閉じて歌う圭一を見つめた。達也達もステージを見た。

…圭一の歌が終わると共に、達也達は隣の少年を見た。少年は2人に向いて微笑み、ダイヤモンドダストのように姿を散らせ、消えた。

（終）

……

挿入歌「千の風になって」

日本語詞・作曲：新井満

## ＜番外編＞特攻隊士の精霊（後書き）

……

今回は風間からではなく、作者よりこのお話を書くことになった経緯を説明させていただきたいと思います。（ご興味ない方は、読み飛ばして下さいね）

この「特攻隊士の精霊」は妄想ではなく、夢で見ました。
この夢を見たのはまだ8月2日で、お盆でもないのにどうしてこんな夢を見たのか自分でもわかりません。でも忘れてはいけないような気がして、起きてからパソコンを開いて一気に打ちました。

実際の夢では、今の時代の「死のうとする男の子」と「特攻隊で飛び立つ男の子」が、ある木にお互いの手をついて向かい合って話していました。
でも2人の間には、見えない壁があって、お互いに触れることはできません。でも声はちゃんと届くという不思議な空間です。

会話は覚えている限り打ち出しました。
「僕はお国のために死ぬんだ。君はなんのために死ぬの？」という言葉と「平和ってどんなの？」という質問に少年が答えるのを聞いて「夢のようだな」と答える特攻隊の少年の顔がとても輝いていたのが、印象に残っています。

特攻隊の少年は夢の中でも「僕の未来を守って」と言っていました。この「僕の未来」とは、彼には子供がいて、子孫を守って欲しいという意味なのか、平和を守ってと言う意味なのか、あるいは、生まれ変わる自分を守ってという意味だったのか、結局わかりませんで

した。

敵機に突っ込んで行くシーンは「もう行かなくちゃ」という特攻隊の少年を、死のうとしていた少年が必死にとめるのですが、彼は敬礼を残し行ってしまいます。そして残った少年の頭に特攻隊の少年の声だけが聞こえ、敵機に突っ込んで行く瞬間まで、彼の耳に残ります。

私はその衝突音で目を覚ましてしまったので、その後のことはわかりませんが、このお話のように、彼が心残りなく成仏されていればいいなと思います。

最後になって申し訳ありませんが、特攻隊の方々をはじめ、戦没者の方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

（8月15日（終戦記念日）はとっくに過ぎているのですが、正直デリケートな話なので、アップするのをためらっており、このような時期になりました。最後までお読みいただき、ありがとうございました。）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6523t/

Wahrsager（ヴァールザーガー）「占い師　風間祐士」

2011年11月20日11時31分発行